

令和5年度  
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉 川 大 学  
大学 FD 委員会  
大学院 FD 委員会

## は じ め に

### —FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。マイクロ・レベルの FD の目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会および大学院 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会や大学院教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部・研究科の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部・研究科的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや講演会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部・研究科や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。令和 5 年度は大学 FD 委員会、大学院 FD 委員会が組織的かつ体系的に関わり、教員の教育研究活動の向上・能力開発を恒常的に推進してきました。今回もそういった事例を報告いたします。

今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会委員長  
教学部長 伊 従 記 章

#### 「求める教員像」

玉川学園の建学の精神を体し、その使命を自覚し互いに人格を尊重し、常に能力の開発・向上を目指し一致協力して本学の発展に寄与できる教員であること

1. 玉川大学学則第 1 条に定めるとおり、玉川学園建学の理想にかんがみ、「全人教育」をもって教育精神とし、広い教養と深い専門の学術の理論及び応用を教授すること
2. 学校法人玉川学園コンプライアンス方針に従い、教育・研究活動を推進すること

# 目 次

## I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会	
(1) 委員会の目的 .....	1
(2) 委員構成 .....	1
(3) 今年度の活動計画 .....	2
(4) 活動状況 .....	3
(5) 活動の成果 .....	5
(6) 今後に向けて .....	6
2. 学部の活動 .....	7
3. 教師教育リサーチセンターの活動 .....	53
4. ELF センターの活動 .....	56
5. 授業アンケート .....	68

## II 大学院 FD 活動報告

各研究科の活動 .....	120
---------------	-----

## III 教員研修

### 新任教員研修会

(1) 研修プログラム内容 .....	137
(2) 配付資料・参考資料 .....	138
(3) 実施の成果 .....	139

## 参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容 .....	142
2. 大学院 FD 委員会の議事内容 .....	144
3. ユニバーシティ・スタンダード科目「授業アンケート」様式 .....	145
4. 玉川大学 FD 委員会規程 .....	147
5. 玉川大学大学院 FD 委員会規程 .....	149

※本文中の記載内容について

・役職名称は、令和 5 年度当時の記載とした。

# I 大学 FD 活動状況と今後の計画

## 1. 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

### (1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

### (2) 委員構成

#### <大学 FD 委員会>

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教 学 部 長	伊 従 記 章
委 員	文 学 部	松 本 博 文
委 員	農 学 部	肥 塚 信 也
委 員	工 学 部	三 木 秀 夫
委 員	経 営 学 部	矢 野 尚 幸
委 員	教 育 学 部	高 平 小 百 合
委 員	芸 術 学 部	橋 本 順 一
委 員	リベラルアーツ学部	山 口 修 二
委 員	観 光 学 部	三 木 日 出 男
委 員	E L F セ ン タ ー	キ ム , ミ ソ
事務担当	教 学 部 事 務 次 長	光 森 多 佳 子
事務担当	教 学 部 教 務 課 長	横 松 健 二
事務担当	教 学 部 授 業 運 営 課 長	中 山 靖 浩

#### <大学院 FD 委員会>

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教 学 部 長	伊 従 記 章
委 員	文学研究科人間学専攻/ 英語教育専攻	長 谷 川 洋 二
委 員	農学研究科資源生物学専攻	南 佳 典
委 員	工学研究科システム科学専攻	加 藤 研 太 郎
委 員	工学研究科機械工学専攻	福 田 靖
委 員	工学研究科電子情報工学専攻	佐 藤 雅 俊

委員	マネジメント研究科マネジメント専攻	木内 正光
委員	教育学研究科教育学専攻	原田 眞理
委員	教育学研究科教職専攻	伊藤 美紀
委員	脳科学研究科脳科学専攻 /心の科学専攻	高岸 治人
事務担当	教学部事務次長	光森 多佳子
事務担当	教学部教務課長	横松 健二
事務担当	教学部授業運営課長	中山 靖浩

(3) 今年度の活動計画

レベル	研修名	目的	内容	開催時期
全学	大学教育力研修 (SD・FD)	授業の内容及び方法の改善を図り教員個々の教育研究活動等のより一層の充実を目指す (FD)とともに、本学の運営に必要な知識・技能を身に付け、能力・資質を向上させる (SD)ことを目指す	<ul style="list-style-type: none"> <li>■基調講演 (SD 研修)</li> <li>■分科会 (FD 研修)</li> <li>・授業手法に関するワークショップ</li> <li>・現況の教育的課題に関するワークショップ</li> <li>・各学部事例報告 等</li> </ul>	2月21日
	授業手法に関するワークショップ	学生の主体的な学びを促進する様々な授業手法の修得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業時間内の学修を充実させる授業計画</li> <li>・授業時間外の学修を充実させる授業計画</li> <li>・授業改善につながるリフレクションの方法</li> <li>・教学 IR と授業改善の接続</li> </ul> 等	年2回
	ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ	授業を通して修得した能力を評価する体制を構築するため、ルーブリック指標による成績評価手法を修得する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ</li> </ul> * 新任教員対象	年1回 (隔年)
	授業参観 (公開)	授業内容 (手法) の共有と授業改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観</li> <li>・授業参観にかわる研修会</li> </ul>	随時
職位別	新任教員研修	玉川学園の建学の精神、玉川大学の教育理念・教育方針を理解し、専任教員としての業務に必要な情報を修得する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・玉川大学の教育理念</li> <li>・大学教員の勤務</li> <li>・ICT 教育の活用</li> <li>・教学システム</li> <li>・教学事項</li> <li>・学生支援 等</li> </ul>	3月中旬

	非常勤教員対象研修 (オンデマンド)	・本学の授業を担当するにあたり、これからの高等教育改革を理解し、本学の教育が目指すものを確認する ・授業評価の高い授業内容(手法)の共有と授業改善	・玉川大学の教育理念 ・授業内容(手法)の紹介 *オンデマンド	8月～12月
学部	学部 FD 研修	教員個々の授業と教授法の開発	講演会、研修会、ワークショップ、調査、研究、学外セミナー等への教員派遣 等	随時
その他	FDer 養成研修	実質的 FD 活動の推進のため各学部 1 名配置することを目的に養成講座を開催	FD 活動の振り返り 等	要調整
	人事部 ハラスメント防止研修	教職員がハラスメントについて正しい知識及び適切な防止・対処方法を身につけ、適切な行動がとれるようになること	ハラスメント防止研修	4月～6月

#### (4) 活動状況

##### <令和5年度>

5月2日～ 7月31日	ハラスメント防止研修 開催 (動画視聴) (講師) 桑島 英美 本学園顧問弁護士
5月10日	第1回 大学 FD 委員会 開催
5月17日	第1回 大学院 FD 委員会 開催
7月5日	第2回 大学 FD 委員会 開催
7月19日	第2回 大学院 FD 委員会 開催
9月7日	第3回 大学 FD 委員会 開催
11月17日	第4回 大学 FD 委員会 開催
11月22日 ～1月15日	令和5年度 非常勤教員対象研修会 (動画配信)
12月13日	第3回 大学院 FD 委員会 開催
2月1日	第5回 大学 FD 委員会 開催
2月21日	令和5年度 大学教育力研修 開催 基調講演「障害と大学の現在－障害のある学生に対する合理的配慮とは何か」 (講師) 京都大学学生総合支援機構 准教授 村田 淳 氏  分科会 ① 「生成 AI を利活用した実践事例とワークショップ」 (講師) ICT 教育研究センター長・教授 倉見 昇一 学術研究所高等教育開発センター 准教授 小島 佐恵子 文学部英語教育学科 教授 工藤 洋路

	<p>工学部ソフトウェアサイエンス学科 講師 柴田 健一</p> <p>② 「教育資源としての玉川キャンパス：労作教育を問い直す」 (講師) 全人教育研究センター長・教育学部教育学科 教授 今尾 佳生</p> <p>③ 「ループリック評価スタートアップ ～評価の原則から組織での活用まで～」 (講師) 高知大学 講師 俣野 秀典 氏</p> <p>④ 「授業の事例報告 (グループ1)」【ハイブリッド】 (講師) 文学部国語教育学科 講師 野村 亜住 農学部環境農学科 教授 山崎 旬 農学部生産農学科 准教授 石崎 孝之 農学部生産農学科 技術指導員 深澤 元紀 教育学部教育学科 教授 小谷 恵津子 観光学部観光学科 准教授 マティカイネン, ティーナ</p> <p>⑤ 「授業の事例報告 (グループ2)」【ハイブリッド】 (講師) 工学部デザインサイエンス学科 教授 三林 洋介 経営学部国際経営学科 准教授 田中 美和 芸術学部演劇・舞踊学科 講師 田中 圭介 リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科 講師 高木 大祐 ELFセンター 講師 中村 幸子</p>
3月15日	令和6年度 新任教員研修会 開催
3月18日	第6回 大学FD委員会 開催
3月25日	第4回 大学院FD委員会 開催

その他、学生による授業アンケートを、教学システム (UNITAMA) のアンケート機能を利用し、Webにて計画通り実施した。一部の集中科目を除いた全科目を対象として、通常学期の春学期と秋学期の期中および期末に合計4回、特別学期のサマーセッション (I期～III期) およびウィンターセッション (I期～III期) に合計6回行った。アンケートの結果については、各教員が UNITAMA にて確認できるほか、今年度より、科目群や学科・学部全体の平均値と比較できる授業別レポートをNotesデータベースに掲載してフィードバックを行っている。また、大学FD委員会にてユニバーシティ・スタンダード (以下US) 科目および学科専門科目の学部比較を資料にまとめて報告し、各学部での授業改善の取組に活用できるようにした。なお、各学部およびUS科目のアンケート結果は本学のホームページにて公開している。

また、授業方法を共有し、自らの授業の改善につなげることを目的として、全学部およびELFセンターにて、授業公開とそれに代わる取組を実施した。参加者数等の詳細は2. 学部の活動に記述する。

## (5) 活動の成果

今年度の活動計画に基づき、教員と職員が同じスタンスに立って、教職協働のもと活発なFD活動を行うことができた。

5月から7月にかけて、人事部が主管となり、本学園顧問弁護士の桑島 英美氏を講師としてハラスメント防止研修（動画視聴）を、全教職員を対象として実施した。

11月22日～1月15日にかけて実施した非常勤教員対象研修会は、初めての試みとしてオンデマンド形式で実施した。本学の授業を担当するにあたり、これからの高等教育改革を理解し、本学の教育が目指すものを確認することを目的とした、教学部長による「本学が取り組む教育改革について」の講演と、授業内容（手法）を共有し授業改善の参考とすることを目的とした、教育学部教育学科 濱田 英毅 教授と脳科学研究所 武藤 ゆみ子 准教授によるそれぞれの担当科目の授業風景と本人による授業のねらい・解説の動画を公開した。対面や同時双方向型のオンライン形式で実施していた年の参加者は、例年20～60名程度であったが、オンデマンド形式で実施した令和5年度は82名の参加があり、近年では最大人数であった。参加者からは「玉川大学の学生が他大学と異なり非常にまじめに授業を受講してくれる理由がわかった。GPA2.0以上の条件や最大16単位のCAP制度が一日8時間の労働を基準として考えられた条件であり、履修ではなく修得を目的とした玉川大学の教育を理解することができた」「玉川大学が変化の激しい時代の先を読み、自ら考え動いて社会に貢献する人を育成する教育（全人教育）を革新的に推進していることが理解できた」「学修時間の確保のため、システム整備がなされていることが改めて理解できた。授業を行う側として、より自学自習を促す進め方ができないか点検したいと感じた」「予習課題を設けて自分で調べさせ、授業では学生同士で学び合う「反転授業」を導入している点。授業以外で多くの予習を課すと負担増になるのでよくないのでは、と思っていたが、一概にそうとは言えない事が分かった」「他の授業を見る機会はなかなかないため、見せ方や声かけ、学生間でコミュニケーションをとる様子などがとても参考になった。特に大学で教鞭をとるようになってから学生の立場でスライドを見る機会がないため、多くの情報を含む写真を長い時間見ながら解説する方法は印象に残り、取り入れたいと感じた」「理由付けはとても必要であることを感じており、必修授業であっても興味を持たない学生に対して、どのように学修する必要性を理解させるかについて、学部の先生方と話をしたいと感じた」「授業内で課題に取り組める時間を多少確保し、「授業内で課題の入り口を対応し、自宅で続き…」とすることが、モチベーションの確保に有効とのことだった。これは非常に有用な情報と思われるので、自分の授業でも活用したいと思う」といった感想が寄せられた。

2月21日開催の大学教育力研修では、京都大学学生総合支援機構 准教授の村田淳氏をお招きし、基調講演として「障害と大学の現在－障害のある学生に対する合理的配慮とは何か」についてご講演いただいた。基調講演には294名が参加し、参加者からは「つい、やり過ぎてしまう配慮の線引きについて、改めて考えることができた。今後、生かしていけると思う」「合理的配慮についての正しい理解が深まった。社会的障壁を除去するという視点で見ることが今までではできていなかった。具体的な事例を紹介いただいたのでイメージしやすかった」「申告のあった学生以外にもグレーの学生に対して、対応の仕方のヒントが得られた」「合理的配慮と支援の区別が明確になり、評価の基準は変えなくて良いことがわかり、これまでのモヤモヤが解消された。非常にわかりやすく、なおかつ具体的な事例で説明されたので、よく理解できた」といった感想が寄せられた。なお、基調講演について「とても充実していた」

が 55.4%、「充実していた」が 41.5%であり、96.9%が肯定回答であった。午後は、4つの分科会を開催し、生成 AI 利活用や全人教育の実践のためのキャンパスの再発見を目的としたワークショップ、ルーブリック指標による成績評価、各学部の授業事例等の情報を提供することができた。分科会では「生成 AI について、今まではレポートの執筆に悪用されるなどネガティブな面にばかり目が行っていたが、使いようによって研究時間の効率化などうまく活用する道もあることが分かり、また具体的な事例も豊富に示していただいたので良かった。今後 AI はさらに発展し、また身近になっていると思われるため、学生にもしっかりと指導教育していく必要がある、そのためにはまず自分自身でいろいろと試してみようと思った」「日頃何気なく見過ごしているキャンパス内の教育資源に気付くことができた。次年度の担当授業を改善していくためのヒントを多く得られ有意義な機会となった」「ルーブリックを学生に提示することで、学生が自身の到達度や努力が必要な点を確認でき、学習効果が上がるとのことだった。そのような視点はなかったため、今後実践してみたいと思う」「自身の学部以外にも、似たような状況で努力している、改善している学部があること、今後の励みとなった」といった感想が寄せられた。今後の授業実践等において活用されることが期待される。なお、昨年度に引き続き令和 5 年度も学外にも公開し、2 大学から 13 名が受講した。

授業参観については、令和 3 年度まで、全学部および ELF センターにおいて、授業参観の対象となる科目を複数選出し、全教職員が自由に参観できる形式をとっていたが、参加者が少ない状況にあった。そのため、令和 4 年度からは、各学部および ELF センターごとに、「教員相互の『授業方法の共有』と『授業改善につながる取組み』」を目的とし、それを達成するための授業参観または授業参観に代わる研修へと変更し、今年度も計画通り実施した。

3 月に実施した令和 6 年度採用者向けの新任教員研修会の内容及び成果については、Ⅲ章の「教員研修」にて詳細を後述する。

## (6) 今後に向けて

令和 5 年 5 月 8 日に新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症へ移行し、コロナ禍以前のような FD 活動実施が可能になった。しかしながら、単にコロナ禍以前の形態に戻るだけではなく、コロナ禍において得たオンラインツール等をも活用し、今後も、研修の目的に沿った柔軟な実施方法をとっていきたい。特に、令和 5 年度の大学教育力研修では、教職員の関心が特に高いテーマを基調講演・分科会双方で揃えた結果、会場のキャパシティの問題で参加がかなわない教職員や、同時間帯に開催される複数の分科会への参加を望む教員から、ハイフレックスやオンデマンドでの配信の希望が多く寄せられたため、研修の受講効果をさらに高められるよう、適切な実施方法を検討したい。

非常勤教員対象研修においては、令和 5 年度はオンデマンド形式を採用し、多くの先生方に研修を受けていただくことができ、満足度も高かった。引き続き、多くの先生方に受講いただける方法を探っていきたい。

最後に FDer については、各学部に配置することで各学部の FD 活動が一層活発になることも期待できる一方、大学として、FDer にどのような役割を担ってもらい、今後 FD をどのように進めていくのか、を明確にする必要がある。FDer のガイドラインなどを示しながら、大学 FD 委員の役割と、これまでの各学部の FD 担当、新たな FDer の役割について、引き続き大学 FD 委員会を中心に検討していく。

## 2. 学部の活動

令和5年度における各学部FD活動状況一覧

学部	各学部 FD委員会 の構成人数	各学部 FD委員会 の開催回数	学部研修会	学生による授業アンケート※の実施	
				実施時期	公表
文学部	6名	2回	学内実施	春学期 (期中・期末) 秋学期 (期中・期末) 特別学期 (通信教育課程は スクーリングの都度)	学内外 (本学 HP)
農学部	9名	2回	学内実施		
工学部	7名	2回	学内実施		
経営学部	5名	2回	学内実施		
教育学部 (通信教育課程含)	7名	2回	学内実施		
芸術学部	7名	2回	学内実施		
リハビリーツ学部	5名	2回	学内外実施		
観光学部	5名	2回	学内実施		

※授業アンケートは Web にて実施。

## § 文学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

大学生の学力低下や多様化、大学に対する期待とニーズの多様化、および技術革新を含む社会の急速な変化に対応すべく、普遍性と柔軟性を兼ね備えた大学教育を実現できるよう努めることを文学部のファカルティ・ディベロプメント（以下 FD）活動の取組理念とする。その理念のもと、ディプロマ・ポリシー（以下 DP）を意識しながら教員一人ひとりが主体的に各担当授業において改善に取り組むとともに、学部・学科としても組織的かつ継続的に FD 活動を実施することにより教育の改善を推進することを目標とする。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部主任会（文学部長、文学部教務主任、文学部学生主任、国語教育学科主任、英語教育学科主任）、文学部 FD 担当、国語教育学科・英語教育学科の各学科 FD 担当代表（両学科ともに学科主任が兼務）の合計 6 名により、文学部長を委員長とした文学部 FD 委員会を組織している。文学部長が文学部 FD 委員会を開催し、文学部 FD 担当はそれを支援するとともに、大学 FD 委員会等で出された情報を文学部内で共有したり、文学部 FD 研修会等を企画・運営したりすることにより、文学部 FD 活動の実務的な取り纏めを行う。その他の委員は審議事項を審議するとともに、報告・確認事項を各学科で共有する。なお、文学部 FD 委員会は教学部授業運営課文学部担当とも文学部 FD 活動に関連する情報を共有する。

### 3 令和 5 年度の活動内容

文学部では以下の研修会を実施した。

#### (1) 文学部 FD 研修会「生成 AI とこれからの大学教育」

##### ①概要

近年著しい進化を続けている生成 AI は、2022 年 11 月に公開された ChatGPT の登場を機に社会一般にも急速な広がりを見せるようになったが、大学生の間でも同様の現象が見られ、学修・研究にも様々な影響が生じていると考えられる。具体的には、授業外課題として課されたレポートや英作文の作成において生成 AI の使用が疑われるような事例が見られている。こうした状況を受け、生成 AI 自体の理解を深めるとともに、生成 AI の登場により大学教育が直面することとなった問題・課題を確認・検討するとともに、より具体的に実際の担当授業においてどのような問題が生じ、どのような対応がとられているのかについて情報を共有すべく、文学部専任教員を対象に文学部 FD 研修会を開催する。

##### ②到達目標

文学部 FD 研修会の目標は以下の 3 点である。

- (1) 生成 AI がどのようなものなのかを理解する。
- (2) 生成 AI の普及により特に大学教育との関係でどのような問題・課題が生じるのかを確認・検討する。

- (3) 各教員が実際に担当している各授業において、具体的にどのような問題が生じる可能性があり、どのような対応が必要かを考える。

### ③活動内容

上記の概要・目標のもと、令和5年9月14日(木)11:00~12:30に大学教育棟2014620教室において、本学ICT教育研究センター長である倉見昇一教授を講師に迎え「生成AIとこれからの大学教育」と題した研修会を開催した。前半の講演部分では「生成AIとは」「生成AIの使用についてのガイドライン」「今後の方向性」といった基礎的かつ重要な事項に関する理解を深めることができた。「生成AIとは」では生成AIの仕組みについて、「生成AIの使用についてのガイドライン」では生成AIに関する文部科学省のガイドライン等や先に公開されていた本学のガイドラインについて、「今後の方向性」では生成AIの問題点だけでなく教育における利活用の可能性について、有益な情報が提供された。後半のグループ・ディスカッションでは、各教員が実際に担当授業でどのような問題があったか、またその問題に対応したかといった具体的な事例について情報交換を行うとともに、その情報をもとにディスカッションを行った。

### ④評価

文学部専任教員20名中18名(国語教育学科9名中9名、英語教育学科11名中9名)が参加した(参加率90%)。欠席者は長期研修派遣中の1名と当日公務重複の1名、計2名であった。

終了後に実施した参加アンケートでは、参加者18名のうち1名を除いて回答があり、文学部FD研修を受けての有益なフィードバックを得ることができた。全体としては、分かりやすく役立つ内容であったとの回答であった。リカート・スケールを使用した質問項目の回答結果は以下のとおりである。

- (1) 前半の講演の内容は分かりやすかったですか。

- 大変よく理解できた 64.7%
- おおむね理解できた 35.3%

- (2) 前半の講演の内容はご自身の授業・研究との関係で有益でしたか。

- 大変有益であった 41.2%
- おおむね有益であった 58.8%

- (3) 後半のグループ・ディスカッションは有益でしたか。

- 大変有益であった 58.8%
- おおむね有益であった 35.3%
- どちらとも言えない 5.9%

- (4) 本FD研修会は、全体として有益でしたか。

- 大変有益であった 64.7%
- おおむね有益であった 35.3%

記述による回答でも全体的に肯定的な評価がほとんどで、特に「時宜に適った内容でよかった」といったフィードバックが多く寄せられた。今後も変化の激しい教育環境とそれを受けての教員側のニーズを考慮した上でFD活動を展開することが重要で

あると考えられる。

このようなことから、到達目標は達成できたと言える。

## (2) 研修会「国語教育学科 カリキュラム改訂に向けた検討」

### ①概要

令和3年度以降、国語教育学科で行っている現行カリキュラムの検討を継続し、DPの達成を更に強化するカリキュラム・ポリシー（以下CP）の構築という目標を軸に、カリキュラム改訂案の策定を行う。具体的には、文学、日本語学、文化・思想系の深い教養や論理的・批判的思考力の育成をさらに強化すること等による、より質の高い教員養成を含む、学生の将来のキャリア形成を見据えた新カリキュラムの構想について、複数のプロジェクトチームに分かれて検討を重ね、全体会での発表・意見交換を行う。

### ②到達目標

カリキュラム改訂の方向性や枠組みを学科で共有しつつ検討を重ねることで、令和7年度入学生以降に資する新カリキュラムを構築する。

### ③活動内容

カリキュラム改編を視野に入れた学科専任教員全員参加の共同研究が継続研究2年目となる年度である。共同研究と並行して以下の活動を行った。

学科専任教員によるカリキュラム改訂ワーキンググループ検討会を、4月18日(火)14:00～16:00（オンライン）、4月27日(木)11:00～14:00（オンライン）、5月11日(木)11:15～14:00（オンライン）、5月16日(火)13:15～15:00（オンライン）、6月8日(木)11:15～13:00（オンライン）、6月20日(火)13:15～15:00（オンライン）、7月4日(火)13:15～15:00（オンライン）、7月27日(木)13:00～14:30（オンライン）、2月21日(水)16:00～17:00（対面）、3月7日(木)13:00～15:00（オンライン）、3月21日(木)13:00～15:00（オンライン）に開催し、卒業論文「ランゲージアーツプロジェクト」の見直し、研修行事の強化、キャリア系科目「キャリアナビゲーション」「キャリアセミナーA」「キャリアセミナーB」の更なる体系化・目標の明確化、文学・日本語学・哲学系学科科目の整理・体系化等の検討を重ね、学科会にて随時共有を行った。

担当教員による学内インターンシップ検討会を、7月5日(水)11:00～12:40（対面）、12月6日(水)13:00～13:30（対面）、1月10日(水)13:00～15:00（対面）に行い、インターンシップ系学科科目の内容を精査した。

学科専任教員全員によるキャリア系科目検討会を1月25日(木)11:30～14:00（対面）に、担当教員によるキャリア系科目検討会を2月16日(金)15:15～17:00（対面）に開催し、次年度同科目の見直しを行った。

3月末に学科専任教員による、他大学カリキュラム等の現地調査も予定されている。調査後に情報を共有し、更なる見直しを図る予定である。

### ④評価

選択必修であった「ランゲージアーツプロジェクト」（卒業論文）を見直し、令和6

年度以降入学生対象に「ランゲージアーツプロジェクト（卒業研究）」の必修化が承認された（7月13日（木）学科会、9月14日（木）教授会）。これにより、卒業時における学修の質を高め、言語・文化に関する専門的な教養や論理的・批判的思考力を備えたより質の高い職業人、および国語科教員を養成することが期待される。

インターンシップ系科目については、DTSによる協力のもと令和3年度（一期生）より活動を開始した学内インターンシップの内容を、国語教育学科長谷川洋二教授を中心に精査することで、令和4年度～5年度9月に活動した二期生、令和5年度9月～3月に活動した三期生へと活動を継続することができた。次年度四期生の活動開始も予定されている。町田市民文学館の協力によるインターンシップについても、文学館学芸員ならびに国語教育学科酒井雅子准教授の指導のもと、町田ゆかりの作家・作品を整理した成果物をもって、市内の公立中学校にて出張授業を行うことができた。

研修行事では令和5年度実施の大相撲観戦（1年次）、歌舞伎鑑賞（2年次）といった研修行事に加え、社会人マナー研修として和食のテーブルマナー研修（3年次）を行うことができた。また、歌舞伎鑑賞に向けた意識向上のため、事前に学友会寄附講座として歌舞伎役者市川高麗蔵丈による講演を行い、ホンモノを体感する機会の強化を図ることができた。

キャリア系科目についての検討を行うことで、国語教育学科独自のキャリア教育の方向性が共有され、次年度科目のマイナーチェンジが行われた。次年度にはカリキュラム改訂を視野に更なる検討を重ねる予定である。

カリキュラム改訂の時期・対象については、当初の到達目標であった令和7年度入学生から令和8年度以降入学生へと変更した。これにより英語教育学科と同一年度における、文学部としてのカリキュラム改訂へと足並みを揃えることができるとともに、更に学科全体での検討にも時間をかけることで、DPの見直しも含めたより意義のあるカリキュラム改訂へと進むことが期待される。

### （3）研修会「英語教育学科 カリキュラム改正に向けた検討」

#### ①概要

英語教育学科の教育活動を改善するため、令和元年度より運用が開始された現行カリキュラムの課題の洗い出しを行うとともに、改訂案の策定を具体的に進めている。

令和8年度開始のカリキュラム骨子案をDP、CP、アドミッション・ポリシー（以下AP）の見直しと平行して検討している。

#### ②到達目標

英語教育学科の教育活動を改善するため、令和元年度より運用が開始された現行カリキュラムの課題の洗い出しを行うとともに、改訂案の策定を具体的に進める。今回は特に、文部科学省より全体的な枠組みが提示され、東京都が令和5年度より実施を表明した教員採用試験の3年次受験への対応の検討等を行い、カリキュラム（案）を教務委員会に上程できるよう準備をする。

### ③活動内容

令和5年5月8日(月)15:00~16:30、対面により新カリキュラムに向けてワーキンググループを中心に打合せが定期的実施され、これまで20回以上検討会が実施された。加えて、学科規模での検討会も6月1日(木)、7月20日(木)、3月22日(金)に実施された。初回は冒頭で本FD活動の概要・目的・目標と、教員採用試験の3年次受験に伴う英語教育学科カリキュラムへの影響についてWG担当者から説明があった。その後、留学の実施時期の変更、実施期間の変更、4年間の学びの流れ、ゼミとの関わり等、様々な観点から課題の洗い出しや対策案が検討された。その結果、本学科の特色である留学(現行は9か月間)は2年生の秋学期のみの6か月に短縮することになった。同時にこれまでのカリキュラムで課題となっていた点の改善を検討した。

### ④評価

令和4年度になって動きが具体的になった教員採用試験の3年次受験の制度は、2年次夏から3年次春学期にかけて留学を必修とする英語教育学科の現行カリキュラムにとっては、大きな変更が必要となり得る事案である。同制度を踏まえ、本FD活動は今後のカリキュラム改訂に向けて有用であった。

次に、調査については以下のとおりである。

#### (1) キャリアの観点から見る留学の意義と効果に関する研究 —継続研究3年次—

(文学部共同研究)

##### ①概要

本研究は、令和3年度に始まり、令和4年度も継続して文学部共同研究として英語教育学科において進めている「キャリアの観点から見る留学の意義と効果に関する研究」を受けた、3年目の継続研究である。引き続き、大学在学中のキャリア観の形成および卒業後の実際のキャリアの観点から見て、留学がどのような意義と効果を持つのかについて研究を行う。最終年次となる3年目の研究では、留学後のキャリア観を中心に、同じ調査対象群について留学前後での比較・検討を行う。また、卒業生についてもデータを収集する。

##### ②到達目標

学生が留学を経てどのようなキャリア観を形成するかを検証し、留学を含むカリキュラムの改善に繋げる。

##### ③活動内容

文学部共同研究(代表:松本博文教授)の一環として、英語教育学科で必修となっている海外留学プログラムに参加した令和4年度出発留学参加学生の留学前後での変化を、心理機能測定・分析ツールであるBEVI-jを用いて測定・分析した。留学前については令和4年に実施しており、令和5年度については留学後について実施した。これにより、留学前後での変化を見ることができた。

また、卒業後の変化も同様の方法で追跡調査ができるよう、卒業する4年生につい

ても調査を実施するよう調整した。詳細について今後論文等において公表する予定である。

#### ④評価

予定どおりに BEVI-j による調査を実施し、有益な情報を得ることができた。その情報も含め、分析を進めている。また、卒業後の変化に関する調査についても調整を行い、実施することができた。これにより今後のカリキュラム改善に活用できるデータが得られた。

### (2)「卒業生英語教員のコミュニティ構築—玉川大学英语教育研究会 (ELTama) の取り組みと今後の課題—」(文学部共同研究)

#### ①概要

本件は年度初めに提出された「FD 活動計画」に含まれていないが、当初より計画されていたものであり、「FD 活動計画」への記載が漏れていた。そのため、FD 活動の実績として本報告に記載する。

玉川大学英语教育研究会 (ELTama) は、文学部比較文化学科・英語教育学科および大学院文学研究科を卒業・修了し、全国の教壇で活躍している卒業生英語教員と在学生、教員がネットワークをつくり交流を深めることを目的として平成 21 年度よりスタートした取り組みである。本研究では、令和 4 年度から実施してきた文学部共同研究「卒業生英語教員のコミュニティに向けた基礎研究」等を通して得た知見を踏まえ、令和 5 年 9 月に開催した玉川大学英语教育研究会 (ELTama) の実施報告を行い、卒業生英語教員のコミュニティ構築・展開における今後の課題を展望する。

#### ②到達目標

玉川大学英语教育研究会 (ELTama) の良さと課題を明確にする。コロナ禍を経て今後のあり方を検討する。また、卒業生教員の発表等を通して教育現場の最新情報を入手するとともに、その情報をもとにカリキュラム改善を行う。

#### ③活動内容

ELTama は英語教育学科におけるコミュニティの活動の柱であるものの、あくまでも活動の一つである。令和 5 年度は 9 月 23 日 (土) に慶應義塾大学の田中茂範名誉教授を講師にお迎えし、「CEFR を読み解く—これからの英語教育へ向けて—」と題して講演していただいた。続いて、「話すこと」というテーマを中心に卒業生教員 (小・中・高) 3 名による話題提供があり、その後、それぞれの学校種に分かれて、話し合いを行った。

#### ④評価

今回の ELTama はコロナ後初めて対面で実施したが、対面で様々な議論をすることができたことは、教職に就く卒業生の会合として、またこれから教職に就こうとする在校生にとっても、有意義な場となった。また、ELTama に加えて卒業生教員が集う各種会合等を設定することにより、より継続的なコミュニティ活動を実践することが可能となる。この点については、工藤・松本・小田・鈴木・日臺・米田 (2020) のア

ンケート調査においても、48.3%の回答者が「より頻繁に年3～4回程度実施されるような講演会（会場は玉川大学）」を、41.4%が「より頻繁に年3～4回程度実施されるような研究会・ワークショップ（会場は玉川大学）」を選択していたことから支持される。現状では活動が年1回のELTama開催に留まっているため、多様なプログラムを組み合わせることで年数回開催することによって卒業生教員により深い学びや交流の場を提供することが可能となるはずである。大学教員にとっても、日々変化する教育現場の実態を知り、教員がどのような悩みや課題を抱えているかをタイムリーに把握することができ、現場のニーズに即した学部カリキュラムおよびELTamaプログラムの提供に繋がるはずである。今後検討していく。

研修および調査に続いて、学外セミナー等への教員派遣については以下のとおりである。

#### (1) 大学コンソーシアム京都 第29回FDフォーラム

##### ①概要

コロナ禍によりフォーラムや学会が全体的に対面実施を見送っていたこともあり、このところ活発ではなかったが、令和5年度になりまた対面実施が戻ってきている。そこで文学部としても学外のFD研修会に文学部専任教員を派遣し、FDに関する最新の情報を収集する。

##### ②到達目標

FDに関する最新の情報を収集し、文学部内で情報を共有することで、教育改善を推進する。

##### ③活動内容

2月23日（金）～24日（土）にキャンパスプラザ京都で開催された「第29回FDフォーラム」に、文学部英語教育学科の森本俊准教授を派遣した。今回のFDフォーラムは「DX・AI時代の高等教育のゆくえ」をメインテーマに、分科会およびポスターセッションが行われ、参加する中で情報収集を行った。

##### ④評価

このところ計画しながらも対面開催がなかったため派遣できていなかった学外のFD研修会だが、久しぶりに派遣することができ、FDに関する最新の情報を入手することができた。今後の文学部FD活動において活用していく。

最後に、活動の一つとして計画した授業参観については、文学部専任教員の担当する秋学期開講の学科専門科目を、全学（玉川大学・玉川学園教職員）に対して公開としたが、最終的に授業参観の希望はなく、実施されなかった。教員は授業や学生指導といった様々な教育活動が授業のない時間にあり、職員も通常の業務が授業時間帯にあるため、授業参観は実施が容易ではない活動であると言える。授業参観は教育改善において効果的な手段の一つであるが、それが実際に機能できるようにするためには、組織によるより体系的な調整が必要になってくるものと思われる。この点は今後の課題である。

#### 4 昨年度（令和4年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度提案された2点の予定・課題の達成度は以下のとおりである。

1. 「文学部 FD 研修会の機会を設けて、学部の課題の検証を継続的に行う」という点については、文学部の課題を検証するための文学部 FD 研修会は開催できなかったが、その代わりに時宜にかなった「生成 AI とこれからの大学教育」に関する文学部 FD 研修を開催することができ、教育改善を推進することができた。文学部の課題の検証については、各学科でカリキュラム改善に取り組む中、いわばボトムアップの形で行うことができた。
2. 『学生による授業アンケート』の文学部内の効果的な活用と授業改善のシステムの充実については、学期ごとに授業アンケートの結果が出たところで、文学部教授会などの場を利用しながら、全体的な傾向に関する情報や、各授業の結果の確認を推進することができた。

#### 5 今後（令和6年度以降）の予定・課題について

これまで行ってきて効果があると考えられる FD 活動を継続・活性化し、さらに推進する。

また、それと並行して、令和6年度は以下の2点を主要課題とする。

1. 各学科のカリキュラム検討等を通して出てきた文学部の課題を文学部全体で共有し、改めて検討することで、各学科のカリキュラム改善を推進する。
2. 授業参観実施の可能性と、それに代わりうる FD 活動の可能性について検討する。

## § 農学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現するため、学生の学修レベルを農学部教員が理解し、授業の内容および方法の改善、研修会への積極的な参加を、大学 FD 委員会と協調して促進する。これまで、農学部では実験実習科目が多いことから、講義科目との連携によって、学生が主体的に学修できる教育環境の充実を進めてきた。本年度は新型コロナウイルス感染症対策に伴う授業対応が、5 月以降にほぼ緩和され対面授業が主となった。しかし、コロナ禍で培ったハイブリッド授業、ハイフレックス授業、オンデマンド授業などの多様な形態は、農学部の教育力の向上にも寄与すると考えられる。特に、遠隔地を使った実験実習や卒業研究などの科目は、これらの授業形態の利用が教育力アップにつながることを期待され、今後もさらなるスキルアップが必要と考えている。一方、生成 AI に代表される新しいツールの教育分野へ利用の検討が重要であると示唆されている。従って、例年進めている授業アンケートの実施と授業改善への意識を高めることや、授業作成ツールとしての動画撮影などの支援体制の共有化やその利用をさらに図るとともに、新しいツールとしての生成 AI の教育利用の可能性について検証を開始した。これらのことについて、主任会メンバーを中心に各教員との情報交換を昨年度と同様に進め、引き続き、学生の学修環境の向上に努める。さらに、学習指導要領改訂に応じた対応について、一定の方向性が明らかになったことから、これに対して着手する。これらを通して、教員は自らの教育力向上に対する意識を高めるとともに、社会情勢に臨機応変かつ適切に対応可能なファカルティ形成を目指す。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生産農学科主任、生産農学科副主任、環境農学科主任、先端食農学科主任、学生主任、教務主任、農産研究センター副センター長および農学部 FD 担当の計 9 名が中心となり、農学部全教職員が目標達成にあたる。

### 3 令和 5 年度の活動内容

#### (1) 研修会

##### ① 概要

##### 1) 講演会「学校活動での安全対策、COVID-19 を考慮して」

令和 5 年 7 月 27 日 (木) 16 時 15 分から 17 時半、Consilience Hall 2020 203 教室において、講師として保健センター健康院長 庭野裕恵教授を講演者として招き開催した。農学部教員の安全教育と感染症予防の意識の向上を目標に行った。特に熱中症対策については、オープンキャンパスなどの活動時の非常時対応が整理できたことなど、予想以上の効果も得たと思われる。

##### 2) ワークショップ「生成 AI の仕組みと教育研究分野への適用の可能性を探る」

国立研究開発法人情報通信研究機構 フェロー 隅田 英一郎氏、桜美林大学 リベラルアーツ学群教授 平 和博氏のお二人を講演者として令和 5 年 10 月 12 日 (木) 15 時から 17 時まで、Consilience Hall 2020 501 教室、502 教室

で開催した。研修テーマとして「生成 AI と大学教育：両者の架橋に必要な条件とは？」を設定した。隅田氏の「TOEIC900 点に達する翻訳・通訳専用の AI」と平先生の「chatGPT の凄さと怖さを踏まえて」の講演後、生成 AI の教育利用についてディスカッションを進めた。これを通じて専任教員に生成 AI についての知識の共有が出来たと思われた。

全ての研修は農学部専任教員を対象とし、また、一昨年度に開設した農学部 FD 専用の Teams 内に、事前質問アンケートや配付資料をアップロードし、受講者の理解が深まるように工夫を加えた。また、講師の方々の許可を頂いた上で、事後配信を期間限定で行い、教員間の知識の共有化を試みた。このことで、研修会の欠席者が、研修会の内容を閲覧できるようになった。なお、計画・申請していた「多様な学生の心のケア（仮題）」については、講師との日程調整を含めて、年度内に調整出来ず、農学部主任会と検討して次年度 FD 活動での講演として延期することとした。

## ② 到達目標

- 1) コロナ後の大学活動において、医学的見地から見た注意点を共有する。
- 2) 生成 AI の仕組みを理解するとともに教育・研究分野への適用について、その効果及びリスクを把握する。

## ③ 活動内容

- 1) 大学活動におけるコロナ対応のレビューとコロナ後の大学生活における野外活動時の安全対策や感染症予防対策などについて何を重点とすべきかなどを医学的見地から講演頂き、その後質疑応答を進めた。これらの過程で到達目標は達成出来たと思われる。
- 2) 生成 AI の開発の背景とその仕組みを把握するとともに、教育・研究における利用例、他機関でのガイドラインの考え方などを講演を拝聴することで概観し、その後のディスカッション時間を取ることで農学部における教育・研究に適用する上でのポイントを抽出することを行った。これらの過程で到達目標は達成出来たと思われる。

## ④ 評価

いずれの講習会についても、開催後のアンケート調査などから各研修会の到達目標設定について好意的な意見が多く、本研修会の目的がファカルティ内で理解されていると評価できる。

## (2) 学生による授業アンケート

### ① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部開講科目の担当教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、すべての講義科目と実験・実習科目について授業アンケートを実施した。

## ② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に結果を公開する。

## ③ 活動内容

授業アンケートを集計後、結果をアンケートの原本とともに各教員に送付した。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。

## ④ 評価

令和 5 年度の授業アンケートも、UNITAMA を用いて Web ベースでアンケートを行った。総合評価値は、昨年度とほぼ同様であった。このことは、様々な授業形態に学生も教員も工夫を進めることが教育活動の安定化に結びついたと思われる。ただ、アンケート回収率が、昨年と同様、低下しており今後の検討課題としてあげられる。この傾向は、多くの学部で見られることから、授業アンケートの実施法や設問内容、フィードバックについて教学的な見地での検討も必要と思われる。

なお、農学部の授業アンケート結果は、下記の URL で閲覧可能である。

[https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/report\\_agr](https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/report_agr)

## (3) 教職員を対象とした公開授業

2 つの科目を秋学期に申請したが、授業参観についての情報がうまく学内で共有されていないようで、いずれも参加者はいなかった。本年度は、Notes 掲示板等で授業参観情報が公開されていたのが FD 担当者を含めて良く把握できていなかった。この点、改善の余地があると思われる。

## 4 昨年度（令和 4 年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和 5 年度の FD 活動についても、農学部主任会・FD 委員と逐次検証を行うことで、専任教員間の議論が促進され、提案された課題が十分達成された。

## 5 今後（令和 6 年度以降）の予定・課題について

- ・ 多様な学生の心のケアに関する研修
- ・ 法令改正に伴う化学物質の適切な管理及び安全教育に関する研修

## § 工学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教授会、主任会、教務担当者会、学科会の他に、FD 活動に特化した運営組織として、工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、MR（マネジメントレビュー）がある。これらの組織は平成 29 年まで認証継続していた ISO9001 の教育クォリティマネジメントシステムで運用していたものであり、ISO9001 の更新を停止した後も継続的に運用している。

工学部 FD 研修会は全教員で構成される組織である。各学期の終了後に新入生の成績動向や専門科目の受講者動向などの検証を行う。

授業評価検討会は学科ごとに全教員で構成される組織である。各学期の終了後に授業アンケートの結果などをもとに授業改善の検証を行う。

授業評価総合検討会は、教務主任、教務担当、FD 担当で構成される組織である。各学科で実施された授業評価検討会の結果をもとに今年度の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

MR は学科ごとに全教員で構成される組織と工学部長、教務主任、学生主任、学科主任で構成される組織である。各学科で実施された MR の結果をもとに今年度の学部の教育活動全般の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

### 3 令和 5 年度の活動内容

#### (1) 工学部 FD 研修会

##### ① 概要

各学期の終了後に全教員を対象に実施される研修会である。教務主任、学科主任、教務担当が学期ごとに GPA や単位修得率をもとに成績動向について報告を行う。春学期は数学と物理の教員が入学時に実施するテスト（プレースメントテスト）の結果について報告を行う。秋学期は各学科の教員 1 名が事例報告を行う。

##### ② 到達目標

全教員が全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、各学科の今後の組織的展開と学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、そして教員の自己省察に資する内容となることを目標とする。

##### ③ 活動内容

#### ■ 第 1 回工学部 FD 研修会

実施日：令和 5 年 9 月 14 日（木）9：00～9：52

場所：Zoom による遠隔会議方式

プログラム：

春学期学習状況分析結果報告

(1) 情報通信工学科 教務担当 森文彦

- (2) ソフトウェアサイエンス学科 教務担当 塩澤秀和
- (3) マネジメントサイエンス学科 学科主任 成川康男
- (4) デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科  
教務担当 斉藤純
- (5) 数学系 マネジメントサイエンス学科 朝山芳弘
- (6) 物理系 デザインサイエンス学科 水野貴敏
- (7) 学部全体の状況 教務主任 佐々木寛

■ 第2回工学部 FD 研修会

実施日：令和6年3月14日（木）9：00～10：04

場所：STREAM Hall 2019 313AB 教室

プログラム：

学習状況分析結果報告

- (1) 情報通信工学科 教務担当 森文彦
- (2) ソフトウェアサイエンス学科 学科主任 大竹敢 教務担当 塩澤秀和
- (3) マネジメントサイエンス学科 教務担当 高橋宗良
- (4) デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科  
教務担当 斉藤純
- (5) 学部全体の状況 教務主任 佐々木寛

事例報告

- (6) 情報通信工学科 「ビッグデータ解析」 水地良明
- (7) ソフトウェアサイエンス学科 「セキュアプログラミング」 坂崎尚生
- (8) マネジメントサイエンス学科 「幾何学 I」 佐藤健治
- (9) デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科  
「デザインサイエンスプログラミング」 平社和也

④ 評価

第1回工学部 FD 研修会は35名、第2回工学部 FD 研修会は34名の教員が参加した。報告者が使用するスライドおよび報告内容をまとめた解説は配付資料としてまとめられ、事前にメールにて全教員に配付された。

(2) 生成 AI に関する情報共有

① 概要（目的を含む）

4月1日（土）の教授会において「ChatGPT等の生成型 AI に対する工学部の対応」と題した生成 AI に対する工学部の基本方針がアナウンスされた。急激な速度で進化する生成 AI に対応するため生成 AI に関する情報共有を行う。

② 到達目標

教育における生成 AI の利用に関する最新情報を全教員が共有する。

③ 活動内容

生成 AI に関する情報共有を行う場所として5月に Blackboard@Tamagawa にコミュニティ「工学部：生成 AI 関連情報」を作成し、コミュニティのメンバーが生成 AI の情報を発信・共有できるようにした。コミュニティのメンバーは工学部・工学研究

科の専任教員・非常勤教員とした。

④ 評価

令和 6 年 3 月時点で 100 件以上の情報が投稿され、29 名の教員がコミュニティにアクセスして情報を閲覧した。投稿された情報は「方針・対応」、「活用事例」、「FD・イベント」、「関連動画」、「倫理」、「著作権」、「雑誌」に分類・整理されている。後述の生成 AI に関する研修会の開催および動画配信に際してはコミュニティのメール送信機能が利用された。

(3) 生成 AI 対応に関するアンケート

① 概要（目的を含む）

生成 AI の利用状況等を把握するためにアンケートを実施する。

② 到達目標

生成 AI の利用状況等を把握して生成 AI に関する FD 研修会の開催等を検討する。

③ 活動内容

アンケートは Microsoft Forms を利用して実施された。回答期間 10 月 3 日（火）～10 月 30 日（月）とした。

④ 評価

29 名の教員がアンケートに回答した。また科目に関する設問の回答科目数は 98 科目だった。集計されたアンケートの結果は 10 月 26 日（木）の教授会で報告された。

生成 AI に関する FD 研修会の実施を希望するかどうかの設問の回答結果は「実施を希望する」が 22 名で「実施を希望しない」が 7 名であった。また、希望する研修内容に関する設問（複数回答可）の回答結果は「使い方・利用方法および導入について」が 11 名、「実際の活用事例の紹介」が 18 名、「成績評価について」が 10 名、「国内外での対応について」が 6 名だった。これらの結果は後述の生成 AI に関する研修会の実施内容を決める際の判断材料とした。

(4) 生成 AI に関する FD 研修会

① 概要（目的を含む）

生成 AI の利用と活用のための研修会を実施する。

② 到達目標

生成 AI に対する理解を深め教育・研究・業務に活用する。

③ 活動内容

実施日：令和 5 年 12 月 21 日（木）17：00～18：07

場所：Zoom による遠隔会議方式

内容：KDDI テクノロジー CTO 嶋是一先生「ChatGPT の進化とその活用」

⑤ 評価

工学部・工学研究科の専任教員・非常勤教員 50 名が参加した。

研修会后に授業運営課工学部担当の協力のもと UNITAMA でアンケートを実施した。アンケートでは「とても有益であった」が 63.4%、「有益であった」が 29.3%、「あまり有益でなかった」が 7.3%、「まったく有益でなかった」が 0%だった。

本研修会を撮影した動画は DTS により編集され、Blackboard@Tamagawa のコミュニティ「工学部：生成 AI 関連情報」で公開された。

(5) 授業評価検討会・授業評価総合検討会・MR（マネジメントレビュー）

① 概要（目的を含む）

授業評価検討会は、各学期の終了後に学科ごとに「授業実施チェックシート」（様式は平成 30 年度の活動報告書を参照）や授業アンケートの集計結果などをもとに授業改善を検討する。

授業評価総合検討会は、各学科の授業評価検討会の集計結果や議事録などをもとに今年度の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

MR は、各学科で実施された会議の議事録をもとに今年度の学部の教育活動全般の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

② 到達目標

授業実施チェックシートや授業アンケートの集計結果などをもとに授業改善を検討する。

③ 活動内容

■ 授業評価検討会

実施日：

春学期

情報通信工学科	令和 5 年 9 月 7 日（木）19：00～19：30
ソフトウェアサイエンス学科	令和 5 年 9 月 8 日（金）18：30～19：30
マネジメントサイエンス学科	令和 5 年 9 月 8 日（金）14：30～15：00
デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科	令和 5 年 9 月 8 日（金）16：30～16：45

秋学期

情報通信工学科	令和 6 年 3 月 7 日（木）18：30～19：00
ソフトウェアサイエンス学科	令和 6 年 3 月 7 日（木）18：00～19：30
マネジメントサイエンス学科	令和 6 年 3 月 7 日（木）14：30～15：00
デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科	令和 6 年 3 月 7 日（木）15：30～15：45

■ 授業評価総合検討会

実施日：

春学期	令和 5 年 9 月 21 日（木）14：00～14：45
秋学期	令和 6 年 3 月 21 日（木）11：30～12：30

■ MR

実施日：

情報通信工学科	令和 6 年 4 月 1 日（月）実施予定
ソフトウェアサイエンス学科	令和 6 年 4 月 1 日（月）実施予定
マネジメントサイエンス学科	令和 6 年 4 月 1 日（月）実施予定

デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科

令和6年4月1日（月）実施予定

全体

令和6年4月23日（火）実施予定

④ 評価

授業評価検討会では、「授業実施チェックシート」や授業アンケートの集計結果などを用いて議論された。

授業評価総合検討会では、各学科の授業評価検討会の集計結果や議事録を用いて議論された。春学期と秋学期の議事録をそれぞれ図1と図2に示す。

令和4年度のMRまでは、以前教育マネジメントシステムに対するISO9001認証を得ていた活動で使用した書式を用いてきた。しかし、教育及び研究に関する自己点検・評価において「人材養成等教育研究に係る目的」および3つのポリシーが重視されることを考慮して書式の見直しを行った。この作業に時間を要したため、令和5年度のMRは令和6年4月に実施する予定である。

## 2023年度春semester工学部授業評価総合検討会議事録

日時：2023年9月21日、14:00～14:45

場所：Zoom ミーティング

(以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科、DS…デザインサイエンス学科)

出席者：森 (ICT 教務担当)、塩澤 (SS 教務担当)、高橋 (MS 教務担当)、黒田 (ED 教務担当)、齊藤 (DS 教務担当)、三木 (工学部 FD 担当)、佐々木 (教務主任)

議事録作成：佐々木

資料：2023年度春学期 授業評価検討会議事録 (ICT, SS, MS, ED, DS)

2023年度春学期 授業評価集計結果 (ICT, SS, MS, ED, DS)

2023年度春学期 科目別教育クオリティ目標一覧表 (SS)

各学科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本semesterにおける各学科の取組みについて報告が行われた。全学科、不満足授業はなかった。

各学科からの報告内容を以下に記す。

- ・ICT：「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は 3 科目であった。「物理学 I」(29%) では入学時の確認テストで成績が悪かった学生が半期遅れで履修しており、今後はそのことを踏まえたフォローを検討していく。「プログラミング I」(40%) は再履修クラスで警告を受けている履修者が多かった。センサ工学 (51%) は対象が 2 年生であり学年として学力が低い傾向にあった。学科で検討の結果、いずれも不満足授業 (改善必要授業) には当たらないと結論された。
- ・SS：授業アンケートの「理解度」は全て 3 以上であった。「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は 2 科目であった。「プログラミング I」(52%) は学力別 3 クラスにより開講され、そのほかの 2 クラスは 73%、68%であり科目全体としては 60%以上となっていた。「プログラミング II」(52%) は再履修または進度の遅れている学生が受講しており、基本的な学習習慣の身につけていない学生が多い傾向にあり出席不足等による履修取消学生も多かった。今後はチューター制度の利用を促進する指導をしていく。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。
- ・MS：授業アンケートの「理解度」で 3 未満となった科目は「ベクトル解析」(2.0)、「コストマネジメント」(2.8%) であった。「ベクトル解析」は教職課程受講者が多く物理学をあまりやっていないという背景が原因と思われた。また、7S 開講のため教育実習でコンスタントに授業ができなかった事情もあった。「コストマネジメント」は欠席の多い学生が目立った。「成績 B 以上」が 60%に満たない科目は「統計的方法」(56%)、「解析学 I」(12%) であった。「統計的方法」では、レポートの記述が適切でない学生が多い傾向にあった。「解析学 I」(必修) は再履修科目であり C 評価による合格者が多かった。学科での検討の結果、いずれも不満足授業 (改善必要授業) には当たらないと結論された。
- ・ED, DS：「成績 B 以上」が 60%に満たない科目は「解析学 I」(53%)、「解析学 II」(50%) 代数学 I (33%)、確率統計学 I (20%) であった。いずれも主に 2 年生を対象としているが、エンジニアリングデザイン学科 2 年生は全体として学力が低い傾向にある。昨今の理系学力不足が原因であると考えられ、当該科目のみの問題ではなく、入試での選抜を含め総合的な対処が必要と考えられる。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。
- ・全体：各学科での検討により、全体を通して大きな問題は抽出されなかった。

以上

図 1 令和 5 年度春学期工学部授業評価総合検討会議事録

## 2023年度秋 semester 工学部授業評価総合検討会議事録

日時：2024年3月21日、11:30～12:30

場所：Zoom ミーティング

(以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科、DS…デザインサイエンス学科)

出席者：森 (ICT 教務担当)、塩澤 (SS 教務担当)、高橋 (MS 教務担当)、黒田 (ED 教務担当)、齊藤 (DS 教務担当)、三木 (工学部 FD 担当)、佐々木 (教務主任)

議事録作成：佐々木

資料：2023年度秋学期 授業評価検討会議事録 (ICT, SS, MS, ED, DS)

2023年度秋学期 授業評価集計結果 (ICT, SS, MS, ED, DS)

2023年度秋学期 科目別教育クオリティ目標一覧表 (SS)

各学科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本 semester における各学科の取組みについて報告が行われた。全学科、不満足授業はなかった。

各学科からの報告内容を以下に記す。

- ・ICT：授業アンケートの「理解度」は全て3以上である。「成績B以上」が60%未満となった科目は2科目であった。「電磁気学」(30%)では基礎的な内容を中心とするように心がけたが、C評価が多くB以上の割合が少なかった。「量子セキュリティ」(54%)では、例年より発展的な内容を含めたことで理解が十分でなかった学生が多かった。今後は基礎的な内容を中心とするよう工夫する。学科での検討の結果、不満足授業(改善必要授業)はなかった。
- ・SS：「成績B以上」が60%未満となった科目は4科目であった。「離散数学」(44%)では、入学時数学学力確認テストの結果により履修指導したが、受講させる基準の見直しが必要となった。「ネットワーク技術Ⅰ」(53%)では、到達度の低い学生に向けて補習課題を設けるなどしているが、それを始めからあてにする学生が増えている傾向もみられた。「プログラミングⅡ」(55%)は再履修者が多く、基礎学力の低い学生が対象であった。「モバイルシステム総合研究」(44%)では、資格試験に合わせた日程で不規則となっていることもあり出席率が悪かった。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。学生の学修意欲向上のため、多くの学科科目でプログラミング等を入れる検討もなされている。
- ・MS：授業アンケートの「理解度」は全ての科目で3以上である。「成績B以上」が60%未満の科目は「微分方程式Ⅱ」(50%)であった(C評価が大多数)。4セメ開講で教職課程受講者の多い科目であり、学期開始直前に数検により教職課程受講不許可となった学生が履修していることも影響している可能性がある。学科での検討の結果、全体として不満足授業はなかった。
- ・ED, DS：授業アンケートの「理解度」は全ての科目で3以上である。「成績B以上」が60%に満たない科目は「解析学Ⅰ」(44%)のみであった。基本的に学力不足による結果と考えられる。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。
- ・全体：学生の学力不足および学力レベルのばらつきの指摘があった。また、授業出席率の低い学生が増えている、板書等のノートをとらない学生が増えているという意見があった。学修するうえで基本となる、授業の出席、授業中のノートテイキングの指導が重要という認識で一致した。一方で、ノートテイキングを促進するため授業資料の提供を抑えると、学生の授業評価が低くなる可能性も指摘された。各授業で指導するとともに、学部での取り組みの必要性も今後の課題として考えられた。

以上

図2 令和5年度秋学期工学部授業評価総合検討会議事録

## (6) 研究授業

### ① 概要（目的を含む）

春学期と秋学期に各学科 1 名の教員が各自の担当科目に関して参観授業(研究授業)を実施する。科目は学科専門科目でなくてもよい。各学科の教員数は 9～10 名であるため、全教員が 4～5 年に 1 回担当することになる。学生による授業アンケートとは別の視点である参観者からの評価を授業改善につなげることが目的である。

### ② 到達目標

参観者の評価をもとにした授業改善を検討する。

### ③ 活動内容

今年度の実施概要を表 1 に示す。

参観者は授業を参観して「工学部研究授業チェックシート」（様式は平成 29 年度の活動報告書を参照）を参観後に授業担当者に提出する。授業担当者は参観者の評価をもとに「研究授業科目担当者票」（様式は平成 29 年度の活動報告書を参照）を作成して、学部長、教務主任、学科主任、教務担当、FD 担当に提出する。

### ④ 評価

提出された「研究授業科目担当者票」の「今後の対処計画」には下記のようなコメント（原文そのまま）があり、今後の授業改善が期待される。

- 学生の知識とスキルを伸ばすことのできる授業を目標に、授業前後の予習および復習の重要性を学生が感じ取れるような授業方策を考えて、さらに改善を行ってきたい。
- スライドの視認性をあげるため、スライドの文字サイズを大きくする。
- 講義名と講義内容の関連性が見えるように、演習内容を変更する。
- 3つの実験を実施しましたが、それぞれ実験直後に結果と考察を書かせていたので、少し間延びしていたかもしれません。実験をある程度まとめて実施して、結果と考察を書く時間もまとめることを検討します。
- 早口については自覚があります。ご指摘いただいた投影内容の部分は読み上げながらの説明だったより早口になっていたかもしれません。以降の授業では気を付けて説明したいと思います。
- 授業前に使用するファイルを前もって開いておく。
- 拡張ディスプレイにするなど、PC のデスクトップやフォルダは見せないように工夫する。
- 板書のタイミングと内容をよく確認しておく。
- iPad で板書したときに文字の大きさを事前に確認する。
- 発問を行う。
- フォローアップのため Bb にアップする資料を充実化する。
- 学生に質問して答えさせる機会を作る。
- 話し方の語尾の癖は今後意識してみる。
- スライド周りの照明を落として授業を進める。
- レーザーポインターではなく、指し棒を使って説明箇所に視点を注ぐようにする。
- 板書の内容を整理し、簡潔に示す。

- 「繋がり」に意識して、スライドの内容を修正加筆をする。

表1 令和5年度研究授業実施概要

	学科	授業 担当者	科目	開催日時限	教室	受講 者数
春 学 期	情報通信工学科	相原威	ブレインサイエンス	6月9日(金) 5・6時限	ELF Study Hall 2015 329 教室	3
	ソフトウェア サイエンス学科	大崎正雄	フーリエ解析	6月22日(木) 1・2時限	STREAM Hall 2019 313AB 教室	2
	マネジメント サイエンス学科	折登由希子	デジタルシチズンシップ	5月23日(火) 3・4時限	ELF Study Hall 2015 331 教室	4
	エンジニアリング デザイン学科・ デザイン サイエンス学科	水野貴敏	科学入門	5月12日(金) 7・8時限	Consilience Hall 2020 403 教室	6
秋 学 期	情報通信工学科	森文彦	情報システム入門	10月18日(水) 7・8時限	ELF Study Hall 2015 331 教室	2
	ソフトウェア サイエンス学科	柴田健一	コンピュータアーキテクチャ	11月3日(金) 7・8時限	ELF Study Hall 2015 331 教室	3
	マネジメント サイエンス学科	三木秀夫	オペレーションズリサーチ	10月30日(月) 5・6時限	ELF Study Hall 2015 331 教室	4
	エンジニアリング デザイン学科・ デザイン サイエンス学科	長谷川嘉代	化学と工学	11月9日(木) 1・2時限	Consilience Hall 2020 203 教室	7

### (7) 学生による授業アンケート

#### ① 概要 (目的を含む)

授業内容・方法・スキルの向上などの授業改善を具体化することを目的として、平成12年度秋学期より学生による授業アンケートを春学期と秋学期の学期末に実施している。

#### ② 到達目標

すべての学科専門科目について継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。

#### ③ 活動内容

他学部と同様に UNITAMA でアンケートを実施した。アンケート結果を集計したレポート (PDF ファイル) は科目担当者に配付される。科目担当者はアンケート結果からのフィードバックとしてレポートに設けられた「今期の総括と今後に向けて」の欄にコメントを記入する。回収したレポートは『玉川大学 工学部「学生による授業評

価」報告書 46』、『玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 47』と題した冊子としてまとめられ、STREAM Hall 2019 の 2 階にて閲覧公開した。また、これらは Blakboard@Tamagawa のコミュニティ「工学部 FD」を通じて全教員に配付された。

#### ④ 評価

アンケートの回答率(回答者数/履修者数)は、春学期が 52.6% (2,408 名/4,581 名)、秋学期が 54.4% (2,506 名/4,609 名)であった。

レポートの「今期の総括と今後に向けて」へのコメントの記入率は、春学期が 93.6% (117 科目/125 科目)、秋学期が 73.7% (101 科目/137 科目・3 月 29 日(金)時点)であった。

### 4 昨年度(令和 4 年度)に提案された予定・課題の達成度について

工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、研究授業、学生による授業アンケートを予定通り実施した。MR は令和 6 年 4 月に実施予定である。

学生による授業アンケートは、例年通り全科目担当者に周知のお願いをしたが、回答率は昨年度より少し減少した。

研究授業は、教務主任、教務担当、FD 担当、新任教員が積極的に参加した。また、新任教員が担当する授業では同じ学科の教員が積極的に参加した。

FD 活動の在り方に関する課題については改善されていない。

### 5 今後(令和 6 年度以降)の予定・課題について

工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、MR、研究授業、学生による授業アンケートは次年度以降も継続的に実施する。ただし、それぞれの実施方法については再検証を行う必要がある。

学生による授業アンケートは、より学生の意見を反映させるためにアンケートの回答率を上げることが望まれる。

研究授業は、より多くの視点から改善案を得るためには参観者数を増やす必要がある。

## § 経営学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と FD 担当は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。

### 3 令和 5 年度の活動内容

#### (1) ワークショップ（令和 5 年 7 月 20 日（木））

##### ① 概要（目的を含む）

一昨年度より実施したワークショップを踏まえて、コースプログラムによる支援体制を強化する。また、カリキュラム改訂に関する方向性を固める。

##### ② 到達目標

コースプログラムの支援体制の強化とカリキュラム改訂の道筋を整える

##### ③ 活動内容

コースにおける学修の状況、検定試験ならびに TOEIC IP の結果を踏まえて、カリキュラム改訂の具体的な内容を議論する

##### ④ 評価

コース別の目標と現状を教員間で共有し、カリキュラム改訂の具体的な方向性を議論することができた。今後、細かい修正点等を明らかにし、カリキュラム改訂の実施に備えていきたい。

#### (2) ワークショップ（令和 5 年 10 月 5 日（木））

##### ① 概要（目的を含む）

外部有識者（大学予備校大学事業担当者）より、高校生の学習状況、大学志望状況の変化を話してもらう。

##### ② 到達目標

カリキュラム改訂の道筋を整える。

##### ③ 活動内容

昨今の高校における学習指導要領や高校生の大学志望状況の変化、学力の変化等を伺い、カリキュラム改訂の参考とする。

#### ④ 評価

現状の学習指導要領や、高校生の大学志望状況の変化、大学経営を取り巻く環境等を把握することができた。また、高校生の大学の選び方、各大学の広報戦略等も理解することができた。これらを踏まえ、カリキュラム改訂を実施する際には、学生が学びたい科目を充実させるとともに、方向性を明確にしていきたい。

### (3) 学生による授業アンケート

#### ① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業アンケートを実施している。今年度も春学期、秋学期ともに実施した。

#### ② 到達目標

学生の講義に対する要望等を把握するとともに、各教員のさらなる指導方法の充実を図る。

#### ③ 活動内容

今回の授業アンケートは、UNITAMA を活用した Web 形式である。経営学部で開講している全科目で実施した。アンケート集計は DTS に依頼し、その結果を科目担当者別に配付している。

#### ④ 評価

すべての開講科目で授業アンケートが実施できている。アンケート結果のまとめを Web 上で公開している。回答率は約 40%であったため、より回答数を増やすために、科目を担当している教員には、学生へのアナウンスを周知していただく。

### (4) 学外セミナー等への教員派遣

大学コンソーシアム京都主催の FD フォーラムに教員を 1 名派遣した。主にアクティブラーニング、グループワークに関する分科会に出席した。本フォーラムで得た知見に関して、次年度以降の FD ワークショップで共有する機会を設ける予定である。また、次年度以降も引き続き教員を派遣する予定である。

### (5) 授業参観にかわる研修会

都合により今年度は実施することができなかった。次年度の課題としたい。

## 4 昨年度（令和 4 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に予定した活動は、授業参観にかわる研修会以外すべて実施できている。また、外部有識者を招いて高校生の学習状況、大学志望状況の変化を話してもらうことで、カリキュラム改訂において、より明確な課題や改善案を見出すことができた。

カリキュラム改訂に関しては、一昨年度以来継続して経営学部長、コース代表者による会合を定期的に開催しており、具体的なカリキュラム案も定まりつつある。

## 5 今後（令和6年度以降）の予定・課題について

これまでのFD活動を地道に継続するとともに、アクティブラーニングに関するワークショップを実施する予定である。

また、カリキュラム改訂に際して、DLPによる教育効果の検証を踏まえ、コースの運営を拡充していく。カリキュラム改訂に関しては、現代社会に求められる経営学関連の専門性を学生が身につけられる講義を選定し、さらなる議論を進めていきたい。

## § 教育学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

本年度の FD 活動への取組理念・目標は、令和 4 年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 担当、通信教育課程主任の 7 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 担当が学部における FD 活動計画（企画・運営）の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項については教授会で議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

### 3 令和 5 年度の活動内容

#### (1) 研修会等

##### ① 概要（目的を含む）

前年度に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、オンライン研修会及び対面による研修会をおこなった。

##### ② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取組や課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かしていく。また日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、また参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

##### ③ 活動内容

令和 5 年度は、コロナ感染症が 5 類となり、全面的に対面授業となったが、対面授業に適応しにくい学生への対応が必要となるため、「学生のメンタルケア」についての研修を対面で行った。

また、「アナフィラキシーショック」についての研修を保健センター健康院・院長・庭野裕恵教授に対面で行っていただき、実践練習も予定していたが、天候不順により急遽 Zoom による双方向オンラインでの研修となった。

最後に、令和 6 年度から私立大学においても合理的配慮が義務づけられ、発達障害と診断された学生やその傾向のある学生への対応も必要となるため、研修を対面でおこなう予定であったが、講師の都合により次年度へ延期となった。

オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットを学部の新人教員へ配布した。

「オンライン授業の有効なツール及び ICT 活用術」と「新人教員のための資料：面

談シート・授業参観からの学び」については、FD 担当者の都合により実施することができなかつたため、次年度に期待したい。

1) 研修名 : 「オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットの配付」

実施日 : 令和 5 年 5 月 1 日 (月)

方法 : 新任教員メールボックスへの配付及び学内便による配付

2) 研修名 : 「オンライン授業の有効なツール及び ICT 活用術」

講師 : DTS による「オンライン学習支援」説明動画の配信と Bb アップロード

実施日 : 令和 5 年 9 月 20 日 (水) (実施せず)

場所 : オンデマンド方式による研修

3) 研修名 : 「アナフィラキシーショックへの対応」講習会

講師 : 保健センター健康院 院長 庭野裕恵教授

実施日 : 令和 5 年 8 月 15 日 (火)

場所 : Zoom によるオンライン双方向での研修

時間 : 14 時～15 時 00 分

4) 研修名 : 「学生のメンタルケア」

講師 : 保健センター健康院 カウンセラー 佐藤紀代子先生

実施日 : 令和 6 年 3 月 27 日 (水)

場所 : Zoom による双方向オンライン方式による研修会

時間 : 14 : 00～15 : 10

5) 研修名 : 「要支援学生への配慮」

講師 : 國學院大學 渡邊雅俊先生

実施日 : 令和 6 年 2 月 16 日 (金) → 令和 6 年度 2 月へ延期

場所 : 対面による研修会

#### ④ 評価

「オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットの配付」については、昨年度に続き、新任教員に配付し、オンラインで配信する資料が多いため、参考になったと思われる。

「オンライン学修支援の動画」に関しては、教員用 Bb 上に掲載しており、必要に応じて教員が参照できるようにした。

「学生のメンタルケア」研修は Zoom 双方向オンラインで行われ、50 名近い教員が参加した。保健センター健康院カウンセラー佐藤紀代子先生から、学生のメンタルヘルスの現状と教育学部の先生方から提出された質問に答える形で行われた。また、倦怠感を訴える学生もいるため、COVID-19 の後遺症についても保健センター健康院院

長・庭野教授にお話しいただいた。大変有意義で今後に活かせるお話であった。「要支援学生への配慮」についての研修は、講師の事情により延期となり、令和7年2月に行うこととなった。

新任教員へは、Bb上に新任教員が参考にできる資料を集めたタグを作成し、評価・面談・その他のことについて効率的に伝達できるようにした。

## (2) 学生による授業アンケート

### 【通学課程】

#### ① 概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

#### ② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。例年は、受講者が10名未満のゼミなどについては実施しなかったが、今年度から10名未満のゼミや授業であっても実施する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

#### ③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業アンケート（リフレクションシート）を実施した。

#### ④ 評価

令和5年度は、ほぼ対面授業であったが、授業の中の一部でオンデマンド方式が用いられることもあった。前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなっているが、オンデマンド方式の授業などではより多くの時間を内容理解のために費やしている傾向が見えた。ただし、あくまでも平均であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対する時間的な意識の違いがあることも考慮した上での評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対する説明を加えるなど検討したい。また、この項目が高い教員の実施方法などを共有し他の教員の参考にしていきたい。

### 【通信教育課程】

#### ① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全科目において実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックする。目的は、各授業担当者が授業改善につなげることにある。

## ② 到達目標

- ・専任教員、非常勤講師を問わず、すべてのスクーリング授業において学生による授業アンケートを実施する。
- ・実施した授業評価のデータ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

## ③ 活動内容

- ・開講されたスクーリングにおいて、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（科目）について、オンラインでの授業アンケートを実施した。開講したのべ146科目（事情により一部の科目は除く）において実施した結果、のべ144科目において学生からの回答が得られた。
- ・質問内容は、昨年と同一のものを使用し、自由記述欄も設けた。

## ④ 評価

授業評価の結果としては、各設問とも概ね高い評価を得た。各授業の評価結果は、担当教員本人に配付し、結果と課題を共有した。

通信教育課程では、新型コロナウイルスの問題とは関係なく、対面、オンライン、ブレンディッド(オンライン+対面)と複数の形態でのスクーリングを提供している。そのような複数の形態を設けている通信教育課程だからこそ、今後、それぞれの形態によるメリット・デメリットについても整理していきたいと考える。

## (3) 教職員相互の授業公開と参観

### 【通学課程】

令和5年度は対面授業ではあったが、いまだ新型コロナの影響も多少あり、またFD担当者の時間的都合により困難となり、先生方に授業公開を依頼するのが難しくなったため実施を見送った。その代わりに、「オンライン学習支援」説明動画は、常にBb上のHPで見られるようにしてある。

### 【通信教育課程】

通信教育課程においても同様に授業参観の実施は見送ったが、代わりに「玉川大学教育学部通信教育課程の教員が実際に行っているTeamsの授業事例」「玉川大学における通信教育でのオンラインスクーリング7つのポイント」の説明資料の配信を行った。

## (4) FD研修

### 【通学課程】

#### 1) 「全人教育鹿児島研修」

##### ① 概要

全人教育研究センターが主催する研修であり、本学建学の理念であり、また設定される教育課程の根拠でもある全人教育成立の背景について、創立者小原國芳の生涯の軌跡を探訪する。本年度は特に創立者の幼少年期から青年前期を過ごした鹿児島を地を实地踏査する。参加者は今尾佳生、杉山倫也、松本由美、原田眞理、藤谷哲（何れ

も教育学部教授)、及び山田深雪(教育学部准教授)。

## ② 到達目標

1. 小原國芳の生まれ育った地の歴史・地理的特徴を実際に見聞することを通して、創設者の生涯、及び全人教育の理念の成り立ちに関する理解を深める。
2. 目標1の過程で、全人教育に関する学びと研究のための新たな課題を見出す。

## ③ 活動内容

令和6年2月28、29日の両日に実施。28日は鹿児島到着後、西南戦争の旧跡、探勝園、鹿児島郵便局や鹿児島師範学校跡を見学した後、甲南の日本基督教団鹿児島教会にて現牧師の先生と面談。29日は國芳が片道10キロ以上の山道を通ったという枕崎市の桜山小学校を訪問。次いで坊津歴史資料センター輝津館に立ち寄り、坊津町の歴史民族的背景について学ぶ。その後國芳の生誕地である久志を探訪、玉川学園通りを通って生誕地公園へ。さらに小原家菩提寺である廣泉寺を探訪。最後に加世田に向かい、國芳養家の旧鱒坂邸跡を見学して、旅程を終了。

## ④ 評価

### 1. 理解の進化に関して：

- \* 西南戦争が近代鹿児島の精神風土を大きく特徴づけていること
- \* 薩摩藩第28代当主島津斉彬が日本で初めてモールス信号による交信実験に成功したことに代表される鹿児島の地の先進性
- \* 日本基督教団鹿児島山下町教会第八代牧師尾島真治氏の肖像写真を確認し、また信者の方から寄贈されたという國芳の色紙を目にすることができたこと
- \* 枕崎市立桜山小学校にて、小原國芳勉学の道ハイキングの復活の経緯をお伺いし、同時に本年1月に、かつて玉川の職員でいらした瀧山氏から寄贈されたという「静観」という書が額装されているのを拝見し、さらに國芳の一時入学を許可した当時の第十代校長立石徳太郎氏の肖像写真を確認することができたこと
- \* 坊津歴史資料センター輝津館にて、この地が古代より南シナ海に通じる海洋交通の要衝の地として栄えたこと
- \* 小原家菩提寺である廣泉寺を探訪。國芳筆の扁額や、本堂にあった「慧眼見真」の額、そして寄贈された柱時計を確認することができたこと

### 2. 新たな研究課題に関して：

- \* 西南戦争を主導した西郷隆盛の奉じた陽明学思想と全人教育論の関わりについて
- \* 西南戦争以後の鹿児島へのキリスト教普及と國芳の宗教的覚醒の関係について
- \* 桜山小学校第10代校長の姓に、「立志」と「立石」の2通りがあることについて

### 3. その他：

\*今尾・杉山以外のメンバーは初めての鹿児島探訪であったが、全員大変充実した研修であった旨を事後感想とされていた。参加者 1 名が事後今尾に送ったメールの一部を以下に示す。

「國芳先生が過ごされた土地を実際に歩き、初めて知ったこと、改めて実感した事も多く、自分なりに色々得るところの大きい研修でした。また、今一度、教育者としての原点に立ち返る良い機会ともなりました。今後とも一層精進して参りたいと思います」

#### 【通信教育課程】

##### ①概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自の FD 研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外 FD 研修に関わる情報を提供する。

##### ②到達目標

本校の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加したり、関連する情報を得たりすることで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

##### ③活動内容

今年度のスクーリングは 3 年ぶりの全面対面実施が可能となったため、夏期スクーリングが始まる前に「夏スク対面授業において工夫していること」を通信教員全員に示してもらい、それらを相互共有することで通信教員の授業向上に役立てた。

##### ④評価

今年度の夏スクーリングの授業アンケート結果をみると、夏スク授業の全平均が 4.5 という高い評価であった。これは各教員の授業向上のための努力の成果であると思われる。

## 4 昨年度（令和 4 年度）に提案された予定・課題の達成度について

#### 【通学課程】

教育学部は、学部独自の教育課題を追及する学部企画 FD 研修を行っているが、気候の影響や講師のやむを得ない事情により、中止または延期となった研修がいくつかあった。また、長時間に及ぶ教授会の前の時間帯を研修時間にあてているため、教員の負担が大きいと思われる。次年度は研修内容をより精査し、教員の負担が少なくニーズに沿った研修を行っていきたい。

#### 【通信教育課程】

スクーリングの授業アンケートは、原則として全科目で実施する予定であったが、一部の科目（博物館実習・コンピュータ）に関しては科目ごとに独自にアンケートを実施しているため授業アンケートは実施しなかった。テキスト学修科目のアンケートについては、

平成 28 年度に見送りを決めて以降、特段の進展はなかった。

## 5 今後（令和 5 年度以降）の予定・課題について

### 【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。また、近年の生成 AI の活用に対応できるように、ChatGTP などの利用や制限等についての研修も行っていきたい。

教員の重要な職務である研究活動の活性化のために、共同研究などの勉強会を令和 6 年度も開催していきたい。

全人教育研究センターにおける FD 研修として、令和 5 年度は 6 名が鹿児島研修に参加した。令和 6 年度も引き続き、新任教員に優先的に鹿児島研修等を実施していきたい。

### 【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業アンケートを実施する。令和 6 年度も対面でのスクーリングとオンラインでのスクーリングの双方が予定されていることから、それぞれのスクーリングにおける課題を明らかにするために、スクーリングの形態による比較や同一科目・同一教員の経年経過の分析などを試みたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。さらに ChatGPT によるレポート作成や試験解答も考えられるので、この点の情報共有を教員間で行う予定である。

## § 芸術学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

先を見通せない VUCA 社会は産業・就業構造などの変化が常に進行する。「芸術による社会貢献の実践力を育成する」をミッションとする芸術学部として、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していくことが望まれている。政府が掲げる Society5.0 社会は「経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」と定義されており、芸術分野は新産業分野でも期待される感性や創造力などの育成と深くかかわっている。今後、社会の発展や改善に不可欠なニーズとしての芸術学部の人材養成はますます重要となることが予想される。

学部ミッションを達成するためには、常に芸術と産業分野や地域社会とのかかわりを意識しながら、ESTEAM 教育の推進をはじめ教員養成課程の充実など、カリキュラムや教授法の改善・開発を行う必要がある。また、入学生の資質や能力などの動向も踏まえた学修支援体制の構築や、学生を主体とした授業方法の研究および総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部機関との連携授業を推進することも重要である。そのためには柔軟性や機動性をもった組織として教員構成を編成しなければならない。教員たちが目標や課題を共有し、協働して教育活動を推進・改善できるチーム力形成が重要である。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び芸術学部 FD 担当が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会が中心となり教育課題の共有や分析を行い、目標や課題の設定および改善方策などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果及び方策等を拡大教授会で報告することなどを通じて、学部全教員が目標や課題を共有し、組織的な取組とする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD の中核メンバーであるので、学科内の取組をまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。主任会構成員および大学 FD 委員会委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、学部内の情報共有を図り、FD の組織的活動が円滑に行われる役割を担っている。

### 3 令和 5 年度の活動報告

#### (1) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

##### ① 概要・活動内容（目的を含む）

令和 5 年度は、芸術学部で開講されている授業（卒業研究など複数のゼミを同じ授業名でまとめられた科目を除く）について春学期、秋学期それぞれ期中、期末に年 4 回の授業アンケートが UNITAMA による調査方法にて実施された。調査対象とした期末段階での対象者数（延べ数）およびアンケート回答率は、春学期 4,612 人 41.5%、秋学期 4,129 人 30.5%であった。

アンケートの全体概要結果および各科目担当教員の個別アンケート結果詳細の閲覧方法を学部拡大教授会等によって専任教員に周知した。また、総合的な内容については大学のポータルサイトにて公開される。

教員の教育活動の振り返りと成果共有を目的に、学部専任教員（20名）と非常勤教員・実技指導員（7名）が令和4年度の授業成果を文書化し、芸術学部紀要別冊（授業報告書）としてまとめた。300部作成し、令和5年12月下旬に学部全専任教員、全非常勤教員、および教育学術情報図書館に配付した。授業改善と成果を文書として記録化することで長期的かつ広範に活用することが期待できる。令和5年度の授業も引き続き授業成果報告書を作成する。なお、本授業報告書は、教員間の授業参観と同等の効果があるものとして、令和5年度授業参観に替える。

## ② 到達目標

芸術学部FD委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、学部運営に活かすと共に今後のFD活動の方向性および学部教育を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

## ③ 評価

UNITAMAによる授業アンケートは個別に結果を確認でき、教員自身が自分の担当する科目を客観的に評価することができるようになった。問題点としてはアンケートに対する回答率の低さがある（春学期41.5%、秋学期30.5%）。すべての科目が対面授業となったが、まだ遠隔授業の影響がアンケート回答率の低下に関係していると考えられる。特に秋学期に回答率が下がったのは、1年生の意識低下が大きいと考えられる。

## (2) 講演会・研修会・ワークショップなど

### 1)

#### ① 概要

芸術系教員のためのアカデミックスキル（8月3日）

#### ② 到達目標

芸術系教員の研究について、その展開可能性を理解する。

#### ③ 活動内容

講師として塩瀬隆之氏（京都大学）を招き、ワークショップおよび事例紹介などを通して、他領域との関わり方や方法などを教示いただいた。

#### ④ 評価

数人の事情がある教員を除き全員の参加があった。昼食を挟み、午前午後と行われたが講師の問いの巧みさもあり、終始活発な受講状態であった。

なお、講師が利用した「slido」を用い、終了後に収集したコメント（全コメント、編集なし）は以下の通りである。

「対話を通して認識を揺さぶることや解像度があがることで分かることの面白さに目から鱗のレクチャーでした。「やっていることを見せる相手を変える」「自分たちを違う人に説明する場が発表」という言葉が印象に残っています。研究初心者としてこうした場に対する苦手意識が軽減され、学会や研究会に飛び込んでいく前向きな気持ちを得られました。」

「塩瀬先生のレクチャー内容が「芸術系教員のためのアカデミックスキルとは」という

タイトル（目的）に合致した内容だったかと言われると、少しずれていたように思いました。ただ、途中でタイトルと合致しないレクだと認識してからは、お人柄（好奇心と細部にまで行き届く教養の深さ）があふれ出ていて、大変興味深く拝聴させていただきました。」

「FDとしてこうした試みが継続的に続くことを願っております。」

「純粹に楽しく参加できたFDでした。毎年実施される教学部主催のFDもこのような内容・形で行なってほしいと切に思います。話は変わります。研究分野や学会によっては、研究会の場が必ずしも自分の仲間を広げられる場ではなく、戦闘モードで行かないといけない場もあります。そのため、初心者には学生と同様、研究会選びも重要な視点となってきます。気になったことがありました。「匿名」です。今回、匿名投稿を体験することにより、そのメリットを改めて痛感しました。同時に、やはり「研究者」としての自分自身の選択に「匿名」はない、ということを実感することができました。多くの視点から多くを学べた研修の機会を設けてくださったこと、小北さんをはじめご準備いただいた先生や助手さんに感謝いたします。」

「講義の内容で「そもそも知らないことは調べることもできない」という内容がとても印象的でした。発信すること、人の目に入ること、相手に興味を持ってもらうこと「相手の世界に入る」ということの重要性を感じました。また、slidoを使った意見の交換は瞬間的に思考を共有できてとても面白く有意義な時間が過ごせました。」

## 2)

### ① 概要

ケアする芸術（10月12日）

### ② 到達目標

芸術による活動のひとつとして「ケア」がある。本FDでは、芸術が有する自己理解・他者理解および心理面の効果について理解する。

### ③ 活動内容

講師として、芸術系大学卒業後、心理学を修め、イギリスで芸術療法の専門資格を取得している鈴木綾香氏（東邦大学医療センター大森病院、臨床心理士）を招き、ご自身の経緯を紹介いただくとともに、芸術療法の歴史的経緯や適用、今後の発展可能性などを教示いただいた。

### ④ 評価

音楽学科12人中8名、アート・デザイン学科（メディア・デザイン学科含）18名中11名、演劇・舞踊学科11名全員、および技術職員1名、事務職員2名の出席があった。

約1時間程度の講義形式のみであったが、受講した教員からは、今後も芸術療法に関する知識を得たい、芸術教育において心理面を踏まえた関わりの技術を得たいという声もあり、また学生のニーズも高いと思われたことから、来年度以降、授業として学生の受講機会を作る方向で調整することとなった。

3)

① 概要

大学教育と生成 AI (10 月 26 日)

② 到達目標

生成 AI の基本概念と原理を理解し、大学教育の新たな可能性と課題を理解する。

③ 活動内容

講師として、ICT 教育研究センター センター長 倉見昇一教授を招き、技術的解説、社会的影響などを紹介いただき、今後の大学教育との関係性などをご教示いただいた。

④ 評価

芸術学部 10 月度拡大教授会前に開催することで多くの専任教員の参加があった。生成 AI の基本概念 (生成 AI とは、原理、社会での利用状況など) および大学教育との関係 (玉川大学ガイドラインの解説、文科省や他大学の考え方、利用の利点・問題点・モデルケース、倫理的な問題、著作権に関する対応など) のレクチャーがあり、生成 AI に対する全体的な理解を得ることができたので、教員が抱える漠然とした不安感は払拭できたと思える。

レクチャー後、質疑応答の時間もあり、教員が自分の授業にどう対応するかを考える上で良い機会となった。

(3) 調査・研究など

なし

(4) 学外セミナー等への教員派遣

1)

① 概要

大学の音楽科教育に関わる情報交換会

② 到達目標

AI 活用、鑑賞教育、他校種との教育連携などについて、他大学の教員と意見交換を行い、現状の問題点を把握し、今後の大学に於ける音楽教育授業の実施に活かす方向性を見出す手立てとする。

③ 活動内容

本年度の大学部会大会は大学教員及び大学院生 5 名による研究発表が行われた。武蔵野音楽大学講師、玉川大学芸術学部音楽学科准教授、玉川大学芸術学部音楽学科非常勤講師、東京藝術大学修士課程 2 年生、東京藝術大学教育研究助手がそれぞれの研究領域について発表を行なった。その後質疑応答も実施され、充実した時間となった。

午後は、「学校間連携と系統的な学び」と題して、幼、小、中、高、大の教員によるパネルディスカッションが行われた。これからの音楽科の課題である校種間の連携、地域連携について活発な意見が出された。

玉川大学からは、発表者の今野哲也准教授、清水宏美教授、中田知宏講師、露崎義矢助手、非常勤講師の小林史子先生他が参加した (推薦入試と日時が重なったため出席者

は計画時から変更された)。

#### ④ 評価

今年の大学部会は音楽の創作領域に置く AI の活用方法、アメリカ合衆国における音楽大学予備課程の現状、教育現場で必要とされるピアノ演奏技能、ポピュラー音楽の価値観についての歴史、島岡譲の教育理念と実習についての再解釈など、コロナ感染症拡大前の研究発表のように多岐に渡る分野の内容が盛り込まれており、大変有意義なものであった。次年度も武蔵野音楽大学で行われる大学部会大会に期待したい。

### 2)

#### ① 概要

(株) インターアドミッション社が主催する音楽大学の説明会  
本年度も昨年同様、全国から 10 校が参加した。

#### ② 到達目標

全国の高校生、中学生、保証人及び教師に向けた玉川大学芸術学部音楽学科の教育目標、教育施設の周知。

#### ③ 活動内容

朝日ホール（有楽町駅マリオン 12 階）を使用して各校 20 分のプレゼンテーションによる大学説明及び階下のコンベンションホール説明ブースでの個人対応説明会が開催された。プレゼンテーションでは大学紹介の映像を流した後、PowerPoint による大学説明を中村岩城教授が行った。相談ブースでは長裕二教授、渡辺明子教授、松川儒教授に加え入試広報課の鷺見氏が参加し、来場者個々の質問に対応した。

#### ④ 評価

本年度は質問ブースに来られる人数が昨年よりも多かった。これは玉川大学だけではなく他大学も同様であった。その中で本年度も洗足学園音楽大学は質問者を他校より若干多く集めていた。洗足学園音楽大学の大学案内は高校生にひびく作りになっており、玉川大学のオープンキャンパスの PowerPoint 作成の参考にもなっている。

毎年の来場者は保証人、受験生を入れても 350 名ほどで、現在玉川大学の音楽学科に入学している学生がこのフェアを通じて入学を志した可能性は少ない。実際に入学時のアンケートでもこのフェアの名前は 3 年間一度も出ていない。そのため到達目標である玉川大学芸術学部音楽学科の周知はこのフェアに参加して得られるものではないと判断し、次年度以降の参加については見送る方向で調整中である。

## 4 昨年度（令和 4 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案した令和 5 年度 FD 活動計画はほぼ達成することができたが、予定されていた研究会などが中止となり、いくつかの活動ができなかった。結果、予算として組まれた経費が未執行となった。次年度に向けて新たな FD の取り組みの方法を再度検討することとしたい。

実施された各 FD 活動に関しては逐次、芸術学部拡大教授会により報告された。

## 5 今後（令和6年度以降）の予定・課題について

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが令和5年5月8日から「5類感染症」となり、大学生活もコロナ以前に戻りつつある。令和6年度は、令和3年4月から始まった学部改組から4年が過ぎ、新学科体制による初の卒業生を送り出す年度でもある。コロナ禍中にあった様々な制約の影響は残るものの、これまでの教育成果と課題をもとに、より充実した学部教育を構築することが重要である。

今後も、専任、非常勤教員全体の意識向上や各学科・各プロジェクトの横断的な連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員の資質能力やチーム力の向上努力を一層推進する。

## § リベラルアーツ学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

FD 担当…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を教授会にて報告する。

学部専任教員対象の FD 研修会をコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

### 3 令和 5 年度の活動内容

#### (1) 初年次教育の方向性に関する研修

##### ① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、今年度の実施結果を共有し、その振り返りをもとに次年度以降の 1 年次研修の具体的なプランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

##### ② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

##### ③ 活動内容

4 月～翌 3 月に実施した。参加者は 1 年生担任教員で、必要な回には各主任が参加した。具体的には以下の各項目について検討を行った。

- ・「一年次セミナー」のクラス運営と学修・生活に関する早い段階での教育および指導・支援方法
- ・新入生研修代替プロジェクトの内容と指導方法
- ・次年度以降の新入生研修の内容と実施方法
- ・秋学期「一年次セミナー102」の内容と指導方法

##### ④ 評価

入学もない 1 年生が大学での学修に慣れ、自発的な個々の学びを着実に計画・実践していくために、「一年次セミナー」で提供すべき内容について担任教員を中心として丁寧な議論を重ね、1 年生の指導とサポートをきめ細かく行うことができた。コスモス祭学部展などの発表の場を「一年次セミナー」で活用し、学部内の教員と学生のコミュニケーションを促進し、本学部の多様な学問分野についての知識を得、それを学内外へ発信することによって、大学での対面機会が限られていた 1 年生の学部所属意識を高めることにもつながった。以上のように、今年度においても、効果的な初年

次教育カリキュラムを整えることができた。

(2) 「二年次セミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

① 概要（目的を含む）

本学部2年生必修科目「二年次セミナー201」および「二年次セミナー202」の教育内容と教育方法を検討し、望ましい2年次教育のあり方を考える。

② 到達目標

この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

③ 活動内容

春・秋学期中に2年生クラス担任会を開催し、「二年次セミナー」の教育内容・方法を改善するためディスカッションを行った。今年度は以下の点を中心に検討を行った。

- ・アカデミックリーディングおよび要約、ディスカッションのさらなるスキルアップの方法
- ・学部での3年生以降のより専門的な学びに向けた指導方法
- ・学内にとどまらない多様な学びや経験に触れるための情報提供のあり方、特に海外留学やキャリアプランニングについて

④ 評価

2年次教育のあり方に関して教員間で問題意識を共有し、実際の教育内容と方法の改善を進めることができた。コスモス祭学部展を活用して、「二年次セミナー」春学期での学修内容の整理と補足、プレゼンテーションをグループワークで実施し、学修をさらに発展することができた。

(3) 令和5年度リベラルアーツ学部FD研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部教育活動の点検、本学部共同研究報告、新年度教育計画、学部教育の今後の展望に関する意見交換等を行う。学部教育目標や教育内容・方法、研究活動のあり方について教職員間で認識を共有することができる。

② 活動内容

令和6年2月19日～20日に湯本富士屋ホテルにおいて専任教員による研修会を実施し、以下の項目について集中的に検討した。

(ア) 特別講演 小島佐恵子准教授（学術研究所高等教育開発センター）

「1年次・2年次の教育を考えるにあたって」

(イ) 次年度「一年次セミナー」「二年次セミナー」「学際アカデミックスキルズ（リーディング）」の内容

(ウ) 次年度「リベラルアーツ総合研究」「クロスフィールズ研究」の内容

(エ) 学部共同研究中間報告

③ 評価

(ア) 小島先生の特別講演では、大学における1年次・2年次の教育の現状と問題点について教育学の立場からデータに基づいた考察をいただき、リベラルアーツ学部において「一年次セミナー」「二年次セミナー」の授業内容を改善する

ための視点を得ることができた。

(イ) 次年度「一年次セミナー」「二年次セミナー」「学際アカデミックスキルズ(リーディング)」に関して、今年度の運営について振り返りを行い、使用する教材やスケジュールだけでなく、授業内容及び方法について忌憚なく話し合うことで、次年度に向けた授業改善の具体的なイメージを得ることができた。

(ウ) 次年度「リベラルアーツ総合研究」「クロスフィールドズ研究」の内容に関して、各フィールドに分かれてディスカッションを行い、具体的な教育計画を立案することができた。

(エ) 学部共同研究中間報告では、授業における英語使用の必要性あるいは問題点について各教員から各専門領域にもとづいて意見交換がなされるとともに、リベラルアーツ学部北海道プロジェクトにおける教育活動および将来の新たなプロジェクトの開拓の可能性についての展望が報告された。

以上の点から、きわめて意義深い研修会であったと評価できる。

#### (4) 令和5年度リベラルアーツ学部臨時FD研修会

##### ① 概要(目的を含む)

学部教育において生じる直近の問題に対応すべく必要に応じて研修会を開催する。

##### ② 活動内容

今年度は以下のように2回に分けて実施した。

(1) 令和5年6月8日(木) 17:30~19:00 玉川大学 大学1号館201教室にて専任教員による研修会を実施し、ChatGPT使用に関する問題および学生授業アンケートの扱いについて議論を行い、学際アカデミックスキルズについての情報の共有および今後の方向の検討を行った。

(2) 令和6年1月11日(木) 17:00~18:30 玉川大学 大学1号館504教室にて専任教員による研修会を実施し、2年次セミナーの現状と問題点について情報共有およびディスカッションを行った。

##### ③ 評価

活発な意見交換がなされ、今後の教育方針や体制についてさらなる検討を進めることができた。

#### (5) リベラルアーツ学部防災訓練

##### ① 概要(目的を含む)

大学教育棟2014等の防火施設、避難誘導方法等について、実践的に学ぶ。

##### ② 到達目標

教育・研究現場において、災害発生時の迅速かつ的確な対処ができるようになる。

##### ③ 活動内容

令和5年7月27日(木) 16:00~17:00 玉川大学 大学教育棟2014の避難経路、防災設備の確認を実施した。

##### ④ 評価

リベラルアーツ学部専任教員の研究室があり、多くの授業が行われている大学教育

棟 2014 での避難方法、災害時の対応について、詳細にわたり確認することができた。

#### 4 昨年度（令和 4 年度）に提案された予定・課題の達成度について

- ① 今年度 FD 研修会で検討された新カリキュラムの実施計画に基づき、令和 5 年度の新カリキュラム実施における具体的運用の結果として明らかになる諸問題について議論を積み重ねる、そのための場を FD 活動で提供する。初年次教育・2 年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）も、この点を踏まえて展開する。

上記の予定・課題については、ChatGPT 使用に関する問題および「二年次セミナー」の運営についての検討を行ったことを含めて、全体として効果的に達成することができた。

- ② 講習会は、防災訓練、ハラスメント講習の他、学部内で共通する問題意識にかかわる内容についての開催を検討する。

上記の予定・課題については、防災訓練を行ったことも含めて、全体として効果的に達成することができた。

#### 5 今後（令和 6 年度以降）の予定・課題について

今年度 FD 研修会で検討された授業改善計画等に基づき、令和 6 年度の新カリキュラム実施における具体的運用の結果として明らかになる諸問題について議論を積み重ねる、そのための場を FD 活動で提供する。初年次教育・2 年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）も、この点を踏まえて展開する。

防災訓練の他、学部内で共通する問題意識にかかわる内容についての開催を検討する。

## § 観光学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材養成の達成を目標に FD 活動に取り組むこととする。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、研修会などのプログラムの実施にあたる。

### 3 令和 5 年度の活動内容

#### (1) 講演会

「学生募集に繋がる、最近の高校生事情から見えること」  
～大学入試志願者動向などを絡めて～

実施日 : 令和 5 年 7 月 20 日 (木) 17:00～18:00 (質疑応答含)

講師 : 株式会社ナガセ 東進ハイスクール大学事業部  
部長 押山 均氏

場所 : 玉川大学 大学教育棟 2014 621 教室

#### ① 概要 (目的を含む)

大学経営を取り巻く環境について、各種データ (18 歳人口、大学数、志願者、入試形態推移等) を基に学部が取り組むべき学部募集の戦略を考えることを目的とする。

#### ② 到達目標

高校生の大学選定基準 (学びたいこと、進路、学校環境) を把握し、魅力ある学部のあり方について構想することができる。

#### ③ 活動内容

広報戦略、学生募集の成果をあげている事例などについて意見交換を行った。

#### ④ 評価

定量的なデータに基づく現状を把握し、学部募集に繋がる取り組みのヒントを得ることができた。

#### (2) 講演会

「2023 年度 1 年生 GPS-Academic 受験結果 報告」

実施日 : 令和 5 年 9 月 28 日 (木) 16:00～17:00 (質疑応答含)

講師 : 株式会社 ベネッセ i-キャリア 遠藤 優花氏

場所 : 玉川大学・STREAM Hall 2019 408 会議室

- ① 概要（目的を含む）  
2023 年度新入生の「問題解決力」を思考力・姿勢態度・経験・学生意識調査の 4 領域で測定し、今後の学生指導の参考とすることを目的とする。
- ② 到達目標  
外部のアセスメントテストを検証し、観光学部新入生の「問題解決力」の特性（強み・弱み）を把握することができる。
- ③ 活動内容  
「問題解決力」の 4 領域に関し、数値化された全国平均と玉川大学他学部との比較検証と観光学部の課題について共有化を図った。
- ④ 評価  
客観的なデータに基づく学生の実情を把握することにより、学生指導の参考情報として活用できた。

### （3）学外セミナーへの教員派遣

派遣先：ラーニング・バリュー

- ① 6 月 27 日（火）「初年次教育実践セミナー」1 名参加  
テーマ：たった一日で新入生の不安が自信に変わる 初年次教育の実践報告

派遣先：芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター

- ① 8 月 21 日（月）「英語による授業のための WS」1 名参加  
到達目標
  - ・科目を英語で教える活動案・レッスンプランを作成することができる。
  - ・わかりやすい英語で学生とコミュニケーションする準備ができる。
- ② 9 月 7 日（木）「詳細シラバスの書き方 WS」1 名参加  
到達目標
  - ・シラバスの基本的な構造について説明することができる。
  - ・自身の授業における授業目的を振り返り、適宜改訂することができる。
  - ・自身の授業における到達目標を振り返り、適宜改訂することができる。
- ③ 9 月 7 日（木）「授業デザイン WS」1 名参加  
到達目標
 

<前半：半期の授業デザイン>

  - ・基礎的な授業デザイン方法を修得することができる。
  - ・自身の授業をふり返り、成果や課題、改善点を明らかにすることができる。
  - ・自身の授業における授業デザインに関する課題解決のヒントを得ることができる。

<後半：1 コマの授業デザイン>

  - ・1 コマの授業デザインの基本を学び、「発問」を取り入れる方法のヒントを得ることができる。
  - ・自身の 1 コマの授業構成をふり返り、成果や課題、改善点を明らかにすることができる。

- ・授業の取り組みについて他者と話し合うことで、自身の1コマの授業における課題解決のヒントを得ることができる。

#### (4) 学生による授業アンケート

##### ①概要 (目的を含む)

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業アンケートを実施した。

##### ② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に活かす。

##### ③活動内容

Web アンケート機能を活用して、学生を対象とした観光学部開講科目の授業アンケートを実施。データの集計結果は UNITAMA で科目担当教員が参照できる。

##### ④評価

###### ■回答率

令和5年度春学期	24.0%	(対象者数: 1,650名)	回答数: 396名	※延べ数
令和5年度秋学期	18.9%	(対象者数: 1,504名)	回答数: 285名	※延べ数
令和4年度春学期	23.3%	(対象者数: 1,853名)	回答数: 431名	※延べ数
令和4年度秋学期	26.2%	(対象者数: 1,785名)	回答数: 467名	※延べ数

※回答率前年比: 春学期が僅かながら改善するも秋学期の回答率が下がる。

###### ■スコア

令和5年度	春学期: 4.1	秋学期: 4.2
令和4年度	春学期: 4.1	秋学期: 4.1

※令和5年度秋学期が前年度(令和4年度)よりも、0.1ポイント改善した。

#### (5) 授業参観

専任教員全員がいつでもどの教員の授業を参観できるように参観方式を変更したが、1名の参加に留まった。

#### 4 昨年度(令和4年度)に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された課題は、学部の教育力の向上を目指すための更なるFD活動の実施と授業アンケート回答率の向上であった。

先ず、学部の教育力の向上については、第1回講演会にて大学経営を取り巻く環境の変化を把握することにより時代に即応した教育力推進のあり方を構想することができた。また、第2回講演では観光学部に属する学生の問題解決力についてアセスメントテストで強み・弱みを認識することができた。この2つの取り組みにより、我々が取り組むべき教育力向上の方向性を掴むことができた。

一方、アンケート回答率向上については著しい改善を実現することができなかった。次年度は、達成目標を数値化するなどして回答率の向上を目指したい。

## 5 今後（令和6年度以降）の予定・課題について

少子化が進行する中、理論上、大学進学を志望する者はすべて大学に入れる時代に入りました。また、大学に進学を志望する学生達の中には自身の将来について真剣に向き合わずに4年間を過ごしてしまう学生も散見される。学部としては4年間の学びを通じて社会で必要とされる思考力、姿勢、コミュニケーションといった汎用的能力の向上を目標に、令和5年度同様、学部FD研修会、講演会、授業アンケートを実施する予定である。

特にFD活動の礎となる授業アンケートについては、教育力の質向上の観点からも、重点課題として、回答率を高めていく必要がある。

以上

### 3. 教師教育リサーチセンターの活動

#### 1 教職課程 FD・SD 活動への取組理念・目標

本センターは、大学における教職課程の運営を目的とし、大学附置機関として設置された。主な業務内容には、「教職課程における学生支援」と「教職に関する研究活動支援」がある。研究活動支援のひとつとして教員養成における教職課程 FD・SD 研修があり、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

#### 2 教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、課長及びリサーチフェローを中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

#### 3 令和 5 年度の活動内容

##### (1) 教師教育フォーラム

##### ① 概要（目的を含む）

『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（令和 4 年答申）において、教師及び教職員集団の姿が示された。答申では学校教育を取り巻く環境の大きな変化に対して、教員養成、採用、免許制度も含めた方策を通じて、多様な人材の確保や教師の資質能力の向上を図り、質の高い教職員集団を形成することが求められている。『令和の日本型学校教育』の構築のためには、校長のリーダーシップのもと、事務職員や様々な分野や組織運営等に通じる多様な外部人材や専門スタッフが、チームとして家庭や地域と連携した学校運営が必要不可欠とされている。

また昨今では教員不足が大きな課題となっており、教員の確保も含めた養成・採用・研修・免許制度の一体的改革が必要である。

今回の教師教育フォーラムは、『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教職員集団の構築に向けた様々な取り組みについて、講演者、出席者がともに考える機会として計画した。

##### ② 到達目標

学内外より 200 名以上の出席者を集客することを目標に掲げた。

##### ③ 活動内容

日時：令和 5 年 10 月 21 日（土）9：30～15：30

於：大学教育棟 2014 よりオンライン（Zoom）配信

テーマ：新しい時代（変化の時代）に対応できる質の高い教職員集団の形成に向けて

## 【プログラム】

午前の部

### ○講演（50分）

- ・新しい時代（変化の時代）に対応できる質の高い教職員集団の形成に向けて

文部科学省総合教育政策局 教育人材政策課長 後藤 教至 氏

### ○シンポジウム（90分）

- ・「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた研修と教員の確保について

東京都教職員研修センター 研修部長 栗原 健 氏

- ・新たな学びのスタイルを目指した秦野のチャレンジ～末広スタイル～

秦野市立末広小学校 校長 吉田 正也 氏

- ・理論と実践の往還を重視した教職課程カリキュラム改革

玉川大学教師教育リサーチセンター リサーチフェロー 森山 賢一 教授

【コーディネーター】玉川大学教師教育リサーチセンター 笠原 陽子 客員教授

午後の部

### ○分科会：教職大学院

- ・文学の教材研究と〈問〉を中核とした学習デザイン 玉川大学教職大学院 松本 修 教授

- ・英語教育部会 玉川大学教職大学院 西村 秀之 准教授

- ・特別な配慮を必要とする生徒への対応 玉川大学教職大学院 成川 敦子 准教授

- ・教員の人材育成 玉川大学教職大学院 今井 勉 教授

## ④ 評価

テーマに基づき文部科学省よりご講演いただき、シンポジウムでは、東京都教職員研修センター、実際の教育現場（小学校）、養成大学それぞれの立場からの報告をもとに、質の高い教職員集団の形成についての意見交換がされた。

午後の部では、本学の教職大学院担当者を中心に分科会を実施し、4つのテーマに分かれて発表を行い、意見を交換した。

また、感染症拡大防止の観点はもとより、遠方からの参加者の利便性なども鑑みて、開催方法は、全体会を昨年度に引き続きオンライン形式、分科会を対面およびオンライン形式（※分科会による）の併用とした。成果として、近隣地域のみならず幅広い地域の現職教員等学校関係者、教員養成に携わる大学教職員、教員志望学生、教育研究者、教育委員会関係者等、教育に携わる方々に参加していただくことができた。

会としては延べ130名の参加者を迎え、盛会のうちに終了した。

## (2) 令和5年度教職課程FD・SD研修会

### ① 概要（目的を含む）

令和3年、令和4年の二つの答申により、「令和の日本型学校教育」の構築に向けた子供の学びの姿、さらに子供を育てる教師の学びの姿が示された。それにより、養成、採用、免許、研修の具体的な方向性が明確になり、学校現場、教育委員会、養成大学等が連携し

て対応することが求められることとなった。

本研修は、“教員養成における理論と実践の往還の中心としての教育実習”について、答申の背景と見直すべき教育実習の内容について具体的に解説し、養成大学としてより質の高い教員養成を目指した今後の取り組みについて理解を深める機会とすべく企画した。

## ② 到達目標

答申の内容を具体的に解説し、養成大学としてより質の高い教員養成を目指した今後の取り組みについて、教職員の理解を深め、これからの教育活動への意識を高める機会とする。

## ③ 活動内容

日 時：令和 6 年 3 月 5 日（火）10：00～11：30

場 所：オンライン配信（Zoom）

テーマ：「教員養成における理論と実践の往還の中心としての教育実習」

大学院教育学研究科教授・教師教育リサーチセンター リサーチフェロー

森山 賢一

対 象：大学教員、事務職員

内 容（目的）：答申の内容から“教員養成における理論と実践の往還の中心としての教育実習”について具体的に解説し、養成大学として、より質の高い教員養成を目指した今後の取り組みについて理解を深める。

## ④ 評価

学内教職員より、おおよそ 70 名の参加者があった。答申で示された内容について具体的に解説していただくことにより、今後の教職課程の在り方を再確認し、教員養成大学として、これからの教育活動への意識を高める機会となった。

## 4 昨年度（令和 4 年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和 5 年度は「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」各 1 回を計画し、開催した。計画通り実施することができ、それぞれの目標を達成することができた。

## 5 今後（令和 6 年度以降）の予定・課題について

「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」を計画している。「教師教育フォーラム」は、引き続き教職大学院と共催することにより、大学全体としての教員養成への取組をふまえた内容で開催を予定している。

## 4. ELF センターの活動

### 1 FD・SD 活動への取組理念・目標

ELF センターには世界初の共通語としての英語を学ぶ ELF (English as a Lingua Franca) プログラムがあり、さまざまな言語的・文化的背景を持つ教員が在籍している。玉川大学の ELF センター (CELFL) は、教員の資質向上と遠隔教育のスキル向上を重視し、教員研修活動を通じてこれらの目標を達成しようとしている。センターは、ELF プログラムの質を高めるため、専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも取り組んでいる。

また、ELF センターには 17 ヶ国の教員が在籍し、彼らはさまざまな言語的・文化的背景を持っている。教員は共通語としての英語の理解と使用を重視し、言語学習環境を共同で構築している。CELFL 教員研修 (FD) は、教員のニーズに応え、遠隔教育スキルの向上を支援するために様々な FD ワークショップ、講義、特別セミナー、ディスカッションを実施している。

教員研修活動は、教員にとって互いの知識や経験から広く学ぶことができる有意義な機会として位置付けられている。ELF センターの FD 活動は、最高の学習環境を提供し、共通語としての英語の理解と使用を促進することが目的である。

### 2 ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、大学 FD 担当を中心に、ELF センターの作業部会の専任教員がその企画と実施を担当する。指導法、評価など作業部会内にさまざまな分野に特化した教員のグループが存在し、CELFL Journal, CELFL Forum, CELFL-ELTama Forum, CELFL Orientation Meeting, Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

### 3 令和 5 年度の活動内容

#### (1) 講演会・ワークショップの開催

##### 1) The 2023 CELFL Forum

###### ① 概要

ELF センターは令和 5 年度 The CELFL Forum を開催した。

###### ② 達成目標

- ・EMI の理解を深め、日本での EMI 実施の可能性を探求する。
- ・Global Englishes (GE)に関する研究の最新情報を常に更新する。
- ・ELF 教員が授業で活用できるリソースを共有する。
- ・それぞれの FD 活動において非常勤教員に参加を促す。
- ・学園内の英語教員が集う機会を提供する。
- ・これらの活動により ELF センターと英語教育関係の学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
- ・玉川大学卒業生の中・高の英語の教員と言語学研究者の間の情報交換の場を提供する。
- ・これらの活動により ELF センターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する

考えや研究成果を共有する機会とする。

- ・玉川大学 ELF センターの国際共通語としての英語（ELF）教育の研究や教育法を広める。

### ③ 活動内容

以下のワークショップや発表大会が開催された。

- ・令和5年9月8日（金）10：00～16：45  
The CELF Forum

### ④ The CELF Forum の評価

Dr. Heath Rose (University of Oxford) の基調講演が2件、ELF センターの常勤教員および非常勤教員等による発表が8件、CELFD活動のレポートが1件行われた。基調講演では、Global Englishes (GE)に関する今後の研究と実践に焦点を当てたものと、日本における英語授業の地域的な課題が取り上げられた。ELF センターの教員多数が参加した科研費プロジェクトの発表では、ELF 研究者向けのリソースである ELFJ コーパスと、それが ELF 認識型教育においてどのように活用できるかについて論じた。その他のプレゼンテーションでは、AIの進展を踏まえたライティングの評価や、MOOCs を活用した学習の自律性の育成、そして英語教育における EMI-STEAM-PBL アプローチの統合など、様々なテーマが取り上げられた。

## 2) 講演会、CELFD 特別講演会

### ① 概要

CELFD は、定期的なワークショップに加えて、様々な ELF および研究トピックに特別なワークショップを提供している。これらのワークショップは、教員が最新のアイデアやアプローチを探求し、同僚とディスカッションやコラボレーションを行う機会を提供する。CELFD は、教員が ELF 教育を向上させ、最新の ELF 動向を把握し、学生の言語学習を支援するためにさまざまなプロフェッショナルデベロップメントの機会を提供する。

### ② 達成目標

- ・ELF 教員の国際共通語としての英語（ELF）教育の研究や教育法を高める。
- ・それぞれの FD 活動において非常勤教員の参加を促す。
- ・ELF センターと英語教育関係学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
- ・ELF センターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。
- ・国際共通語としての英語（ELF）研究、言語政策、言語教育への応用に関する知識を深める。

### ③ 活動内容

#### 1) 講演会の開催

- ・ELF Discussion: Autonomy and ELF

講演：Students' autonomy and ELF education

実施日：令和5年 11月 21日（火） 15：00～16：00

講師：スティーブソン， ロバート アンドル ELF センター講師

(2) 研究会・研修会・ワークショップなど

① 概要

- ・Blackboard の使い方に関する理解を深めるワークショップや講演会を開催した。
- ・ELF の理念に関する講義や意見交換を実施した。

② 達成目標

- ・非常勤教員が Blackboard の仕組みを理解し、円滑に利用できるようになる。
- ・ELF の授業においてブレンド型学修（通常授業にオンラインを取り入れる学修）や自主的学修を積極的に取り入れることができるようになる。
- ・ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ELF の理念について教員間で知識を深める。
- ・言語教育について教員間で知識を深める。

③ 活動内容

1) ワorkshop・講演会等

- ・CELFL Modules, Blackboard, UNITAMA and Teams ヘルプデスク (2回)

実施日：令和5年 4月 10日（月） 12：30～13：30 参加者 12名

令和5年 4月 11日（火） 12：30～13：30 参加者 12名

講師：キム， ミソ ELF センター講師

茂木 悠太 ELF センター講師

チャイクル， ラサミ ELF センター准教授

黒嶋 智美 ELF センター准教授

祐乗坊 由利ジョディー ELF センター准教授

- ・CELFL Modules, Blackboard, UNITAMA and Teams ヘルプデスク (2回)

実施日：令和5年 9月 25日（月） 12：30～13：30 参加者 5名

令和5年 9月 26日（火） 12：30～13：30 参加者 13名

講師：キム， ミソ ELF センター講師

茂木 悠太 ELF センター講師

チャイクル， ラサミ ELF センター准教授

黒嶋 智美 ELF センター准教授

祐乗坊 由利ジョディー ELF センター准教授

- ・成績評価 and UNITAMA ヘルプデスク (2回)

実施日：令和5年 7月 10日（月） 12：30～13：30 参加者 11名

令和5年 7月 11日（火） 12：30～13：30 参加者 4名

講師：キム， ミソ ELF センター講師

茂木 悠太 ELF センター講師  
チャイクル, ラサミ ELF センター准教授  
黒嶋 智美 ELF センター准教授  
祐乗坊 由利ジョディー ELF センター准教授

・成績評価 and UNITAMA ヘルプデスク (2回)

実施日：令和6年 1月15日 (月) 12:30~13:30 参加者 5名

令和6年 1月16日 (火) 12:30~13:30 参加者 7名

講師：キム, ミソ ELF センター講師

黒嶋 智美 ELF センター准教授

・学期末成績評価 FD

実施日：令和5年 7月25日 (火) 15:00~16:00 参加者 6名

講師：キム, ミソ ELF センター講師

・年末の反省と提案

実施日：令和6年 1月29日 (月) 15:00~16:00 参加者 7名

講師：キム, ミソ ELF センター講師

・CELF Tutor FD 講演会、ワークショップ

実施日：令和5年 4月 参加者 2名

講師：チャイクル, ラサミ ELF センター准教授

・Ideas for teaching ELF communication for teachers (ENG105) ワークショップ

実施日：令和5年 4月24日 (月) 15:30~16:30 参加者 13名

講師：祐乗坊 由利ジョディー ELF センター准教授

・ChatGPT and AI-powered tools for teaching ワークショップ

実施日：令和5年 5月8日 (月) 15:30~16:30 参加者 9名

講師：キム, ミソ ELF センター講師

・Ideas for teaching BELF ワークショップ

実施日：令和5年 10月10日 (火) 17:00~18:00 参加者 11名

講師：湯山 恵子 ELF センター非常勤講師

祐乗坊 由利ジョディー ELF センター准教授

④ 評価

令和5年度には、新しいカリキュラムの導入とAIの登場に伴い、それに対応したワークショップを実施した。これらのワークショップでは、新しい教え方やAIツールの活用方法について共有し合い、教員同士が積極的に協力し合う機会を提供した。このような共同作業により、CELFの教員は新しい技術やアクティビティを実践し、教員の成長を促進できた。

### (3) ELF センター教員オリエンテーション

#### ① 概要

- ・ ELF センター教員のオリエンテーションを実施した。これは単に学期前の教員ガイダンスという要素だけではなく、ディスカッショングループ活動などさまざまな FD 活動を含んだ内容となっている。

#### ② 達成目標

- ・ ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ ELF の理念について教員間で知識を深める。
- ・ ELF クラスを効果的に運営する知識を深める。
- ・ 新 ELF プログラムに関する研修会紹介。

#### ③ 活動内容

##### ELF 教員の次年度オリエンテーション

- ・ 令和 6 年度春学期 ELF 教員のオリエンテーション

実施日：令和 6 年 3 月 22 日（金）10：00～15：30

新任専任・非常勤教員のオリエンテーション（10：00～11：30）

非常勤を含む全 ELF 教員のオリエンテーション（13：30～15：30）

講師：マクブライト，ポール ELF センター長、鈴木 彩子 副センター長、  
ELF センター専任教員

#### ④ 評価

次年度春学期開始前に開催された。午前のセッションでは各教員に ELF プログラム、教科書およびカリキュラム、クラス管理、テクノロジー指向、そしてキャンパスツアーが提供された。午後のセッションでは、新プログラムと教科書の説明、学習資料の使い方、そして学生の参加率を向上させる方法、テクノロジーの活用方法、ELF 教育方法などのトピックに焦点を当てた。参加者にとっては非常に有意義な機会となった。オリエンテーション後、専任教員で実施内容についての改善点を協議することになっている。

当日参加できなかった非常勤教員へは、後日別途実施するため、参加率は 100%となる。年度途中の新任教員へのオリエンテーションも実施している。

### (4) 学生による授業アンケート

#### ① 概要

令和 5 年度の春秋学期の期末に、ELF センター独自のオンライン授業アンケートを実施した。学生は授業中にスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように指示された。学生は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF 教育に関する意識、チューター制度、マルチリンガルカフェなどについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有された。

## ② 達成目標

授業アンケート調査の目的は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることである。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もある。

## ③ 活動内容

春学期授業アンケートは、2,877 名を対象に実施し評価回答を得た。

秋学期授業アンケートは、1,544 名を対象に実施し評価回答を得た。

## ④ 評価

これらのアンケート結果は ELF プログラムに対する評価として使用され、令和 6 年度の教育プログラム構築のために使用される。大半の学生は授業に対してとても満足しているという結果であった。令和 5 年度は授業アンケート調査を春学期と秋学期（年 2 回）に行い、それぞれの教員に学生からの評価を配付し、自身の指導の改善に役立ててもらおう。

## (5) 教員による授業内容アンケート

### ① 概要

令和 5 年度の春秋学期の期末に、ELF センター独自のオンライン授業内容アンケートを実施した。専任および非常勤教員は、教科書、教授方法、新カリキュラム、Blackboard システム、TOEIC、ELF に対する意識、ELF センターから受けるサポートの質について評価した。アンケート結果は教育プログラムの改善計画や研究の目的で使用される。

### ② 達成目標

- ・多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集すること。
- ・カリキュラムを改革すること。

### ③ 活動内容

春学期と秋学期のアンケートから回答を得た。

### ④ 評価

新カリキュラム実施初年度として、カリキュラムの内容、教科書の難易度、授業方式等についてフィードバックを得ることで、今後の FD 活動計画を策定することができ、教員のサポートをどのように効果的に行うかについての検討に役立てられた。

## (6) ELF センターの出版物

ジャーナルを出版することは、ジャーナルの論文が数多く引用をされた場合、玉川大学が世界におけるランキングをアップグレードするのに役立つため、大学名を国内および国際レベルで宣伝するための重要なツールとなる。今年度から、The Center for ELF Forum オンラインジャーナルを発行した。

## Englishes In Practice (EIP)

### ① 概要

Englishes in Practice は、2014 年にサウサンプトン大学の Centre for Global Englishes によって始められ、現在は玉川大学 Center for English as a Lingua Franca (CELFL) の

ワーキングペーパーとして発行されている。この学術誌は、CELFの教員や他の研究者が、ELF（共通語としての英語）グローバルコミュニケーションに関する研究や探究を発表するためのプラットフォームを提供している。

② 達成目標

- ・先駆的研究論文をスピーディーに発信する。
- ・教員間で高い学識を探究する。
- ・ELFに対する学識を共有する。
- ・ELFセンター所属の教員に効果的な研究発表の場を設ける。

③ 活動内容

- ・Englishes In Practice (EIP) を出版する。
- ・Englishes In Practice (EIP) ELFセンターのホームページにもリンクを掲載する。

④ 評価

Englishes in Practice は今後も世界各地の研究者に読まれることが期待される。

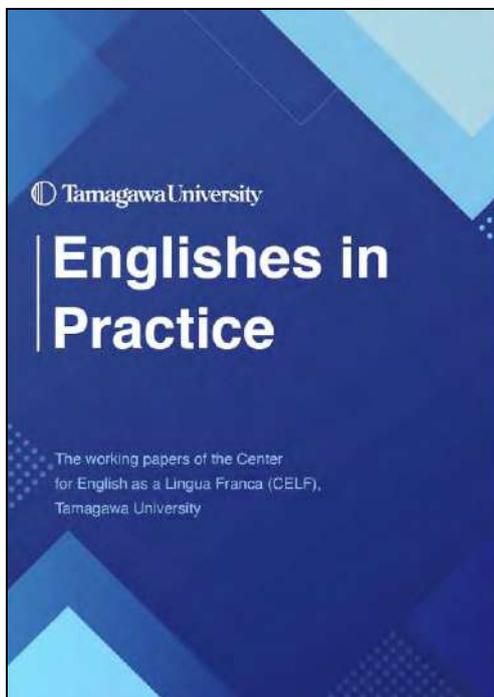


図 1. Englishes In Practice (EIP) 第 1 号

## The Center for ELF Forum

① 概要

令和 5 年度、ミリナー、ブレット准教授とコーテ、トラヴィス教授がジャーナル担当となり、The Center for ELF Forum をオンライン出版予定。ELFセンターの教員全員が査読者となりそれぞれの投稿論文を審査し、The Center for ELF Forum の第 4 号発行を予定している。

<http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/>

② 達成目標

- ・授業運営を改善する。
- ・自発的学修についてのアイデアを共有する場を設ける。

- ・教員間で高い学識を探究する。
- ・ELF に対する学識を共有する。
- ・ELF センター所属の教員に効果的な FD の場を設ける。

### ③ 活動内容

- ・The Center for ELF Forum 第 4 号をオンライン発行予定。また、ELF センターのホームページにも PDF 版を掲載予定。さらに、教員のアカデミックポータル (academia.edu, REAP, Google Scholar, Research Gate など) にも掲載する。

### ④ 評価

The Center for ELF Forum は各教員に配付され、投稿者自身も満足度が高いものになった。このジャーナルをオンラインで閲覧できるようにすることで、より多くの研究者が我々の論文を手にとることができ、他の論文にも引用されるようになると考えられる。

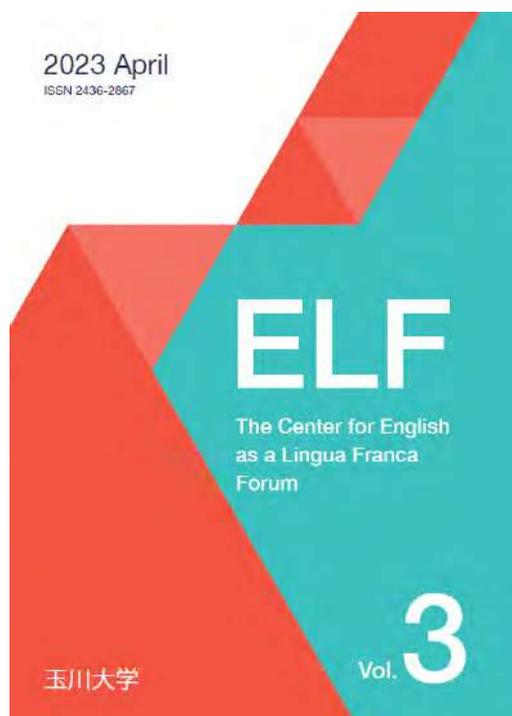


図 2. The Center for ELF Forum 第 3 号

## 4 昨年度（令和 4 年度）に提案された予定・課題の達成度について

CELFF は、教員の専門能力を向上させ、学生の学習を促進するために継続的な専門能力開発の機会を提供している。今年度の FD 活動には、新カリキュラムや ELF 教育、評価、研究に関連する様々なトピックを取り上げたワークショップやトレーニングプログラムが含まれていた。これらの活動を通じて、教員は英語教育分野の最新動向を把握し、学生に効果的で魅力的な学習環境を構築するために必要なツールやリソースを得ることができた。今年度の FD 活動を通じて、教員と学生の両方をサポートし、ELF 教育および学習の卓越性を促進することができた。

今年度の ELF センター発刊ジャーナルでは ELF スキルや評価に焦点を当て、トレーニングや活発な研究活動について記載している。表 1 は令和 5 年度の ELF 専任教員の研究活動をまとめたものである。表 2 は令和 5 年度の CELF 専任教員の論文活動を示す。

表 1. 令和 5 年度 4 月-3 月の CELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国外学会発表	20
国内学会発表	10
論文を投稿・出版	21
科学研究費助成事業	5

表 2. 令和 5 年度の CELF 専任教員の論文を投稿・出版

査読の有無	論文・著書	著者
有	Kim, M. (2023). Decolonizing ELT materials: A sociomaterial orientation. <i>ELT Journal</i> , 77(3), 316-326. <a href="https://doi.org/10.1093/elt/ccad013">https://doi.org/10.1093/elt/ccad013</a>	Miso Kim
無	黒嶋智美 (2023). 「第 3 章 合意形成における経験, 知識, 権利—住民座談会の事例をもとにして」『実践の論理を描く 相互行為のなかの知識・身体・こころ』 勁草書房, pp. 59-76.	Satomi Kuroshima (co-editor)
無	黒嶋智美 (2023). 「第 14 章 行為連鎖組織」『エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック』 新曜社, pp. 173-188.	Satomi Kuroshima
無	Kuroshima, S. (2024). Disfluency and preference organization in a requesting turn at a service encounter. In T. Sadanobu, T. Maruyama, T. Endo, M. Funahashi, R. Hayashi, and A. Mokhtari, (Eds.). <i>Fluency and Disfluency</i> . Hituzi Shobo.	Satomi Kuroshima
無	Kuroshima, S. (2024). Book Review of <i>Multimodal Approaches to Healthcare Communication Research: Visualising Interactions for Resilient Healthcare in the UK and Japan</i> . <i>Journal of Pragmatics</i> , 222, 23-24.	Satomi Kuroshima

有	Ng, P.C.L., Matikainen, T., & Glasgow, G. P. (2023). Multilingualism in global Englishes language teaching: Narrative insights from three TESOL practitioners in Japan. In K. Raza, D. Reynolds, & C. Coombe, C. (Eds.), <i>Handbook of Multilingual TESOL in Practice</i> (pp. 147-161). Springer, Singapore. <a href="https://doi.org/10.1007/978-981-19-9350-3_10">https://doi.org/10.1007/978-981-19-9350-3_10</a>	Tiina Matikainen, Patrick Chin Leong Ng, Gregory Paul Glasgow
無	Okada, T. (2023). Outsider teachers? Filipino teachers' reflections on English teaching and raising intercultural awareness in Japan. In G. P. Glasgow (Ed.), <i>Multiculturalism, language, and race in English education in Japan: Agency, pedagogy, and reckoning</i> (pp. 204–225). Candlin & Mynard e-publishing. <a href="https://doi.org/10.47908/26">https://doi.org/10.47908/26</a>	Tricia Okada
無	Kuroshima, S., Dimoski, B., Okada, T., Yujobo, Y. J., & Chaikul, R. (2023). Linguistic expertise in extended other-initiated repair sequences in ELF interactions. <i>The Center for English as a Lingua Franca Forum</i> , 3, 1-14.	Satomi Kuroshima, Blagoja Dimoski, Tricia Okada, Yuri Jody Yujobo & Rasami Chaikul
無	Stevenson, R., & Bennett, P. A. (2023). Reflective practice for transformative learning in a MOOC course. In N. Curry, P. Lyon, & J. Mynard (Eds.), <i>Promoting reflection on language learning: Lessons from a university setting</i> . <i>Multilingual Matters</i> .	Robert Stevenson, Phillip A. Bennett
無	Leichsenring, A. (2023). <i>Accounts of preservice teachers' experiences: Relationships and teaching practice through teacher training in schools</i> . Amazon	Andrew Leichsenring
無	Leichsenring, A. (2023). <i>Accounts of preservice teachers' experiences: Sense of belonging and philosophy of teaching through teacher training in schools</i> . Amazon.	Andrew Leichsenring
有	Suzuki, A. (2023). Pre-service teachers' difficulty understanding English as a lingua franca for intercultural awareness development. In A. Sahlane, & R. Pritchard (Eds.), <i>English as an International Language Education</i> . <i>English Language Education</i> , 33. Springer, Cham. <a href="https://doi.org/10.1007/978-3-031-34702-3_12">https://doi.org/10.1007/978-3-031-34702-3_12</a>	Ayako Suzuki
有	Toh, G., & McBride, P. (2023). A reflexive account of an English as a lingua franca program. In Z. Tajeddin, & C. Griffiths (Eds.), <i>Language Education Programs</i> . <i>Language Policy</i> , 34. Springer, Cham. <a href="https://doi.org/10.1007/978-3-031-38754-8_12">https://doi.org/10.1007/978-3-031-38754-8_12</a>	Glenn Toh, Paul McBride

有	Matikainen, T., Ng, P. C. L., & Glasgow, G. P. (2023). Teachers' attitudes toward primary school English teaching reform in Japan: Implications for second language teacher education. <i>Second Language Teacher Education</i> , 2(1), 43–66. <a href="https://doi.org/10.1558/slte.24476">https://doi.org/10.1558/slte.24476</a>	Tiina Matikainen, Patrick C.L. Ng, Gregory Paul Glasgow
有	Nakamura, S. (2023). Emotion regulation and strategy instruction in learning. Springer. <a href="https://doi.org/10.1007/978-3-031-42116-7">https://doi.org/10.1007/978-3-031-42116-7</a>	Sachiko Nakamura
有	Kim, M., Cho, E., & Kim, S. (2023). Going beyond boundaries: A collaborative autoethnographic study of three teachers' negotiation of cognitive/emotional dissonances. <i>Language Teaching Research</i> . <a href="https://doi.org/10.1177/13621688231195317">https://doi.org/10.1177/13621688231195317</a>	Miso Kim, Eunhae Cho, Sungwoo Kim
有	Matthews, J., Milliner, B., & McLean, S. (2023). Can learners understand words with derivational affixes, and does the presence of context make a difference? <i>RELC Journal</i> , 1-14. <a href="https://doi.org/10.1177/0033688223122203">https://doi.org/10.1177/0033688223122203</a>	Joshua Matthews, Brett Milliner, Stuart McLean
有	Milliner, B., Lange, K., Matthews, J., & Umeki, R. (2024). Examining EFL learners' comprehension of derivational forms: The role of overlap with base word knowledge, word frequency, and contextual support. <i>Language Teaching Research</i> . <a href="https://doi.org/10.1177/13621688231225704">https://doi.org/10.1177/13621688231225704</a>	Brett Milliner, Kriss Lange, Joshua Matthews, Riko Umeki
有	Matikainen, T. (2024). Academic writing in English: Lessons from an EMI program in Japan. <i>Journal of English for Academic Purposes</i> , 68. <a href="https://doi.org/10.1016/j.jeap.2024.101358">https://doi.org/10.1016/j.jeap.2024.101358</a>	Tiina Matikainen
無	김미소. (2024). 내 언어는 나를 배신하고, 나는 언어로 억압자를 배신하고. 벨 훅스 함께 읽기. 동녘. 49-76. Kim, M. (2024). Nae eoneoneun nareul baesinhago, naneun eoneoro eogapjareul baesinhago [My language betrays me, and I betray my oppressors through language]. In Fepe Lab (Ed.), <i>Bel hukseu gachi ikgi</i> [Reading bell hooks together] (pp. 49-76). Dongnyok.	Miso Kim
無	김미소. (2024). 긴 인생을 위한 짧은 일어 책. 동양북스. Kim, M. (2024). <i>Gin insaengeul wihan jjalbeun ireo chaek</i> [A little book for lifelong Japanese learners]. Dongyangbooks.	Miso Kim

## 5 今後（令和6年度以降）の予定・課題について

令和6年度のELFセンターは、専任、非常勤の多彩な国籍の教員で構成されることとなる。FD活動はこれらの背景を考慮した試みが必要であると認識している。また令和6年度は、令和5年度から導入された新ELFプログラムにおける全教員の専門性を高めるために、様々なワークショップの実施を計画している。新ELFカリキュラムに対応するため、以下の項目の実施を予定している。

1. ELFセンター主催FDワークショップの学内公開
2. *Englishes in Practice* および *CELFL Forum* の出版
3. ELFの概念を生かした教授法に関する講義
4. 言語教育に関する講義や意見交換を実施する機会
5. 学会と共同で実施される英語教育に関する研究会
6. 学生や教員による授業アンケート
7. 効果的な教員オリエンテーション
8. 他大学との言語教育交換研究会
9. オンラインツールおよびAIを用いた授業設計サポート
10. 新ELFプログラムに関する研修会、ワークショップ

## 5. 授業アンケート

### 1. アンケート実施概要

#### (1) 概要

FD活動の一環として授業の改善に資するため、令和5年度春学期・秋学期の期中・期末及び特別学期（サマーセッション、ウィンターセッション）において、学内ポータルサイト「UNITAMA」にて学生に対し授業アンケートを実施した。対象科目は、全科目（ユニバーシティ・スタンダード科目（US科目）、学部学科専門科目）である（ただし、一部の集中講義科目を除く）。

回答者数・履修者数（いずれも延べ数）及び回答率は次のとおりであった。

	春学期		秋学期		特別学期	
	期中	期末	期中	期末	サマーセッション	ウィンターセッション
回答者数	20,337名	20,506名	13,758名	15,966名	183名	269名
履修者数	50,294名	50,739名	48,542名	49,151名	579名	766名
回答率	40.4%	40.4%	28.3%	32.5%	31.6%	35.1%

#### (2) 実施時期

春学期…期中：5月29日（月）～6月11日（日）＊第8回授業前後

期末：7月10日（月）～8月3日（木）

秋学期…期中：11月14日（火）～11月27日（月）＊第8回授業前後

期末：1月10日（水）～2月6日（火）

特別学期…サマーセッションⅠ期：8月10日（木）～8月16日（水）

Ⅱ期：9月1日（金）～9月7日（木）

Ⅲ期：9月19日（火）～9月25日（月）

ウィンターセッションⅠ期：2月20日（火）～2月26日（月）

Ⅱ期：3月11日（月）～3月17日（日）

Ⅲ期：3月25日（月）～3月31日（日）

※上記期間中であれば学生は回答を修正し、再提出することができる。

#### (3) 実施方法

「UNITAMA」の Web アンケートにて実施した。学生には事前に「UNITAMA」掲示板において周知を行った。

#### (4) アンケート様式

期中及びUS科目（期末・特別学期）の授業アンケート様式は、参考資料3（p.145）のとおりである。学部学科専門科目（期末）の設問は、大学ホームページ内で公開されているレポートに掲載している。

## 2. 集計結果及び公表

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、授業別及び次の分類別に行った。

US 科目：

US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群、人文科学科目群、社会科学科目群、自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群、教職関連科目群、資格関連科目群

学部学科科目\*：

学部全体、学科別

\*一部、分類が異なる学部がある。詳細は各学部のレポートを参照のこと。

集計結果は授業担当者及び各学部にフィードバックしている。アンケート回答は各授業担当者が UNITAMA 上で随時確認でき、期中の結果においては開講中の科目の授業改善へリアルタイムに活用されている。また、期末及び特別学期の結果は、授業別及び分類別にレポートにまとめ、授業担当者及び各学部に提供しており、授業担当者が次学期以降の授業改善に活用するほか、各学部で結果の分析が行われたり、次年度以降のカリキュラム改善のための資料として用いられたりするなど、各学部の FD 活動のなかでも活用されている。

なお、期末の分類別のレポートは大学ホームページ内でも公表している。

<https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/>

US科目全体

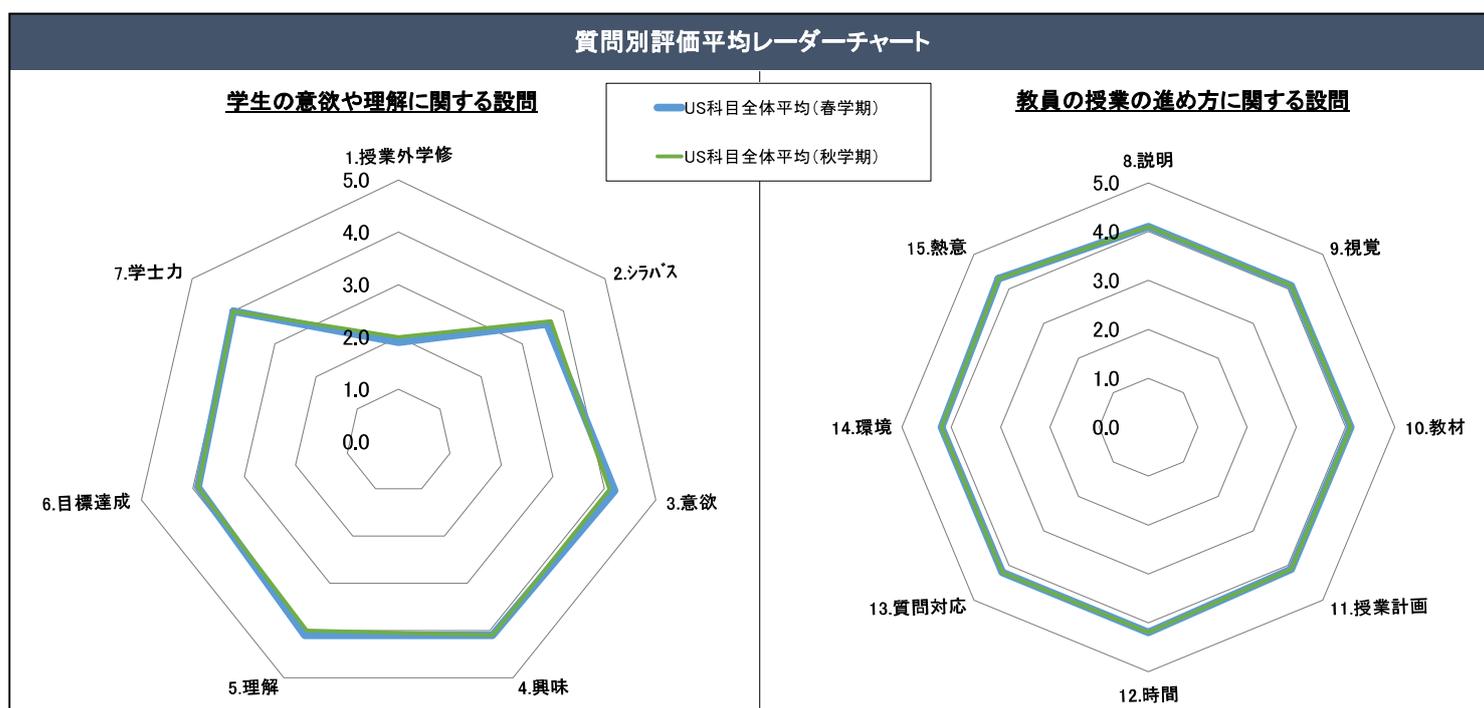
履修者数：21,215名

回答者数：10,341名

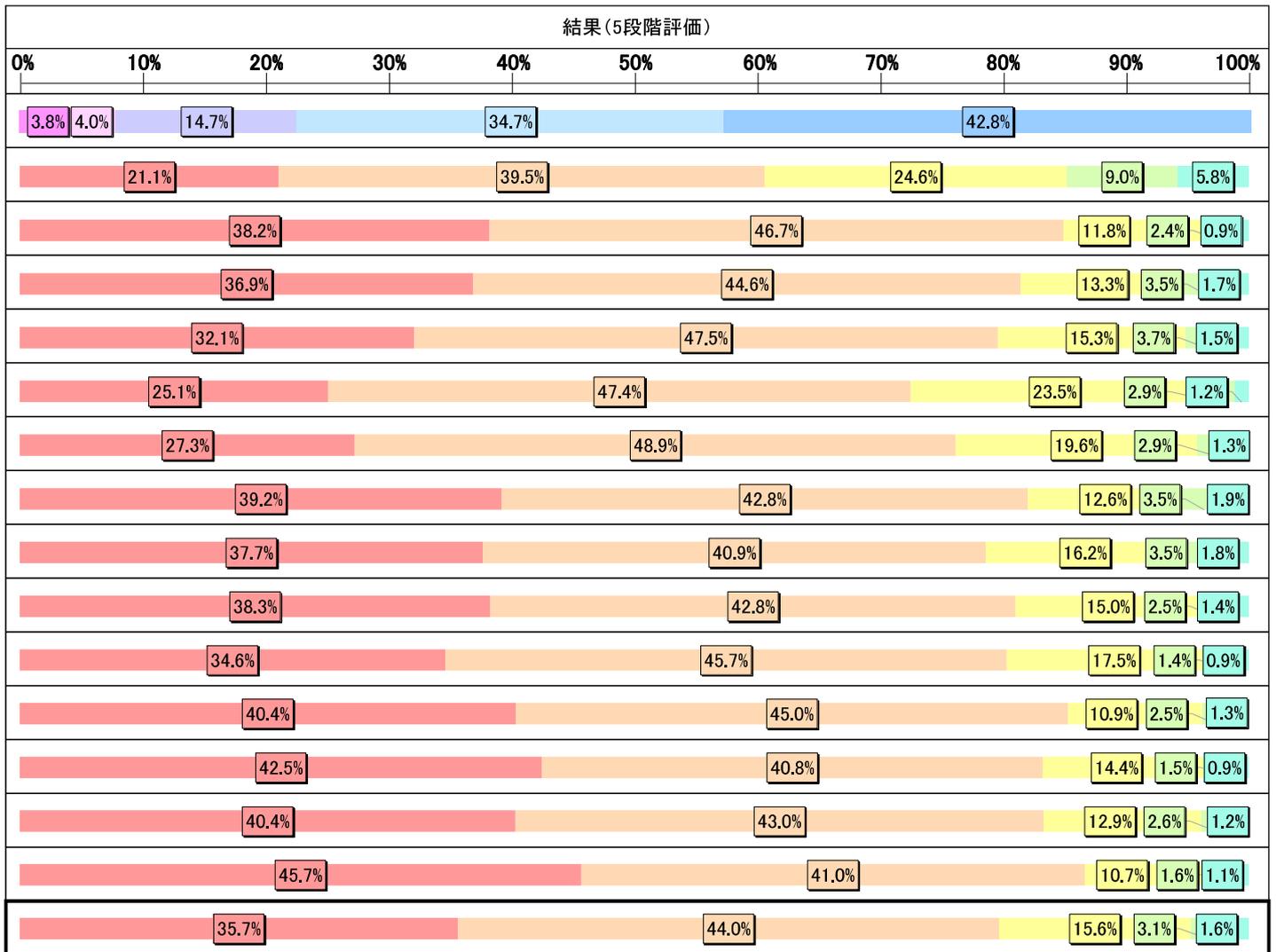
回答率：48.7%

設問			US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3
総合評価			3.9

平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)

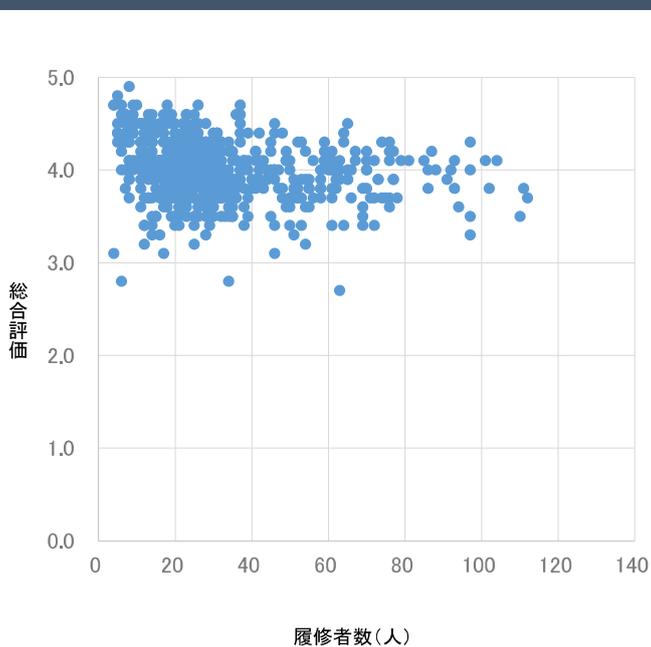


5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満

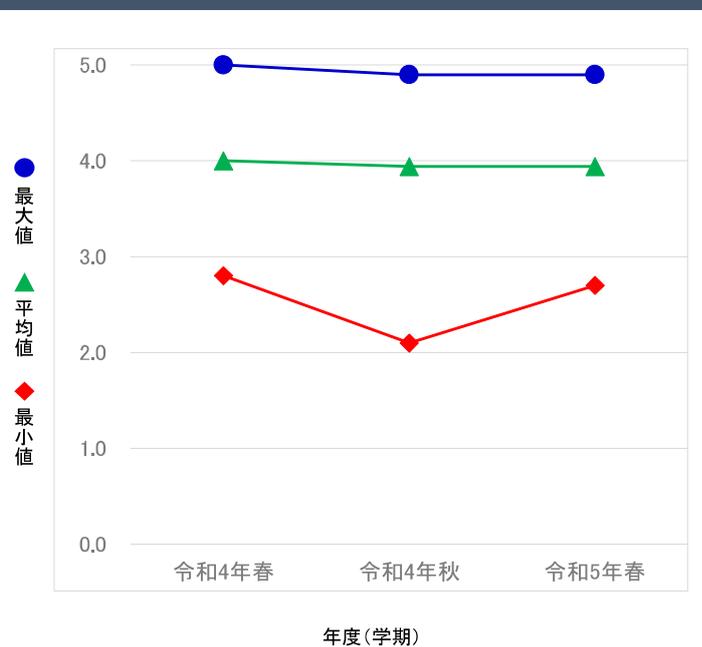


5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない

総合評価の分布(US科目全体)



US科目全体の総合評価の半期推移



US科目 玉川教育・FYE科目群

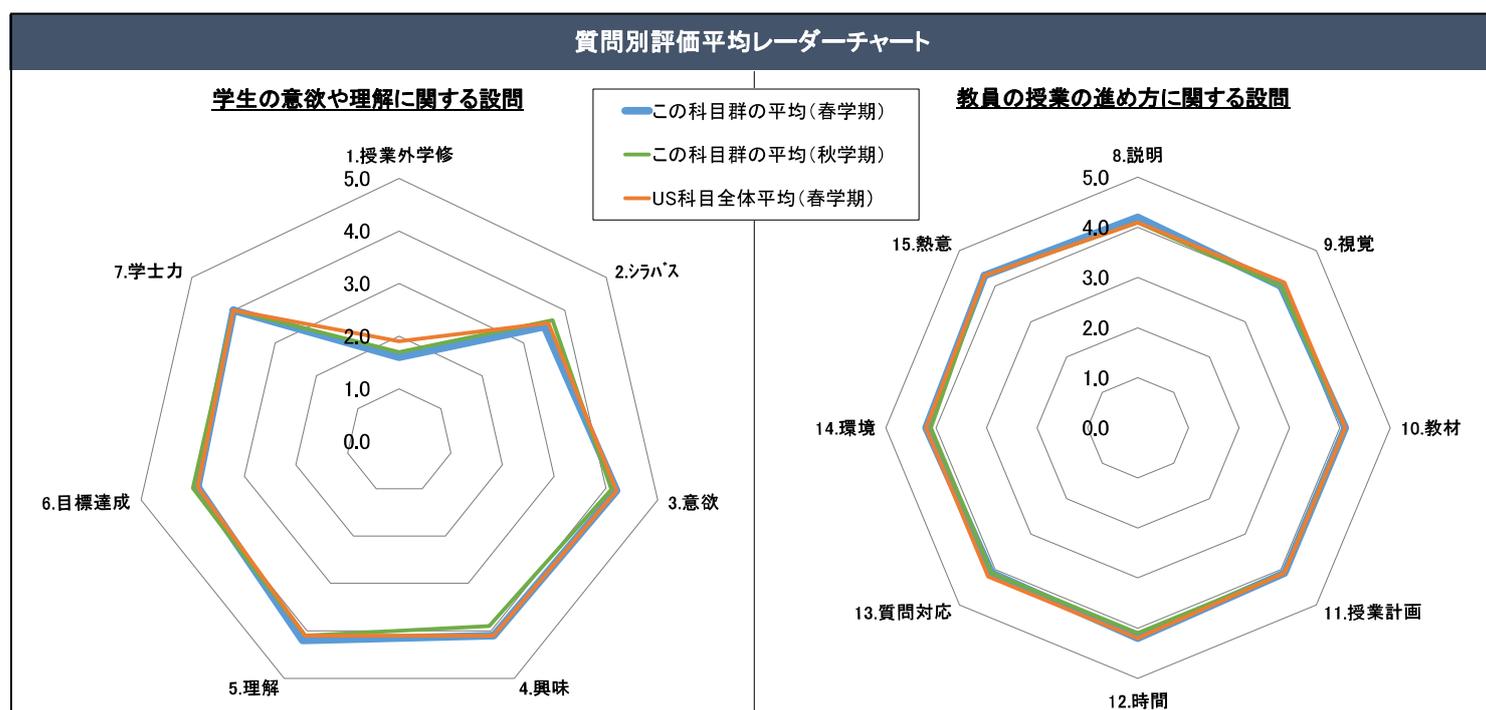
履修者数：5,271名

回答者数：3,121名

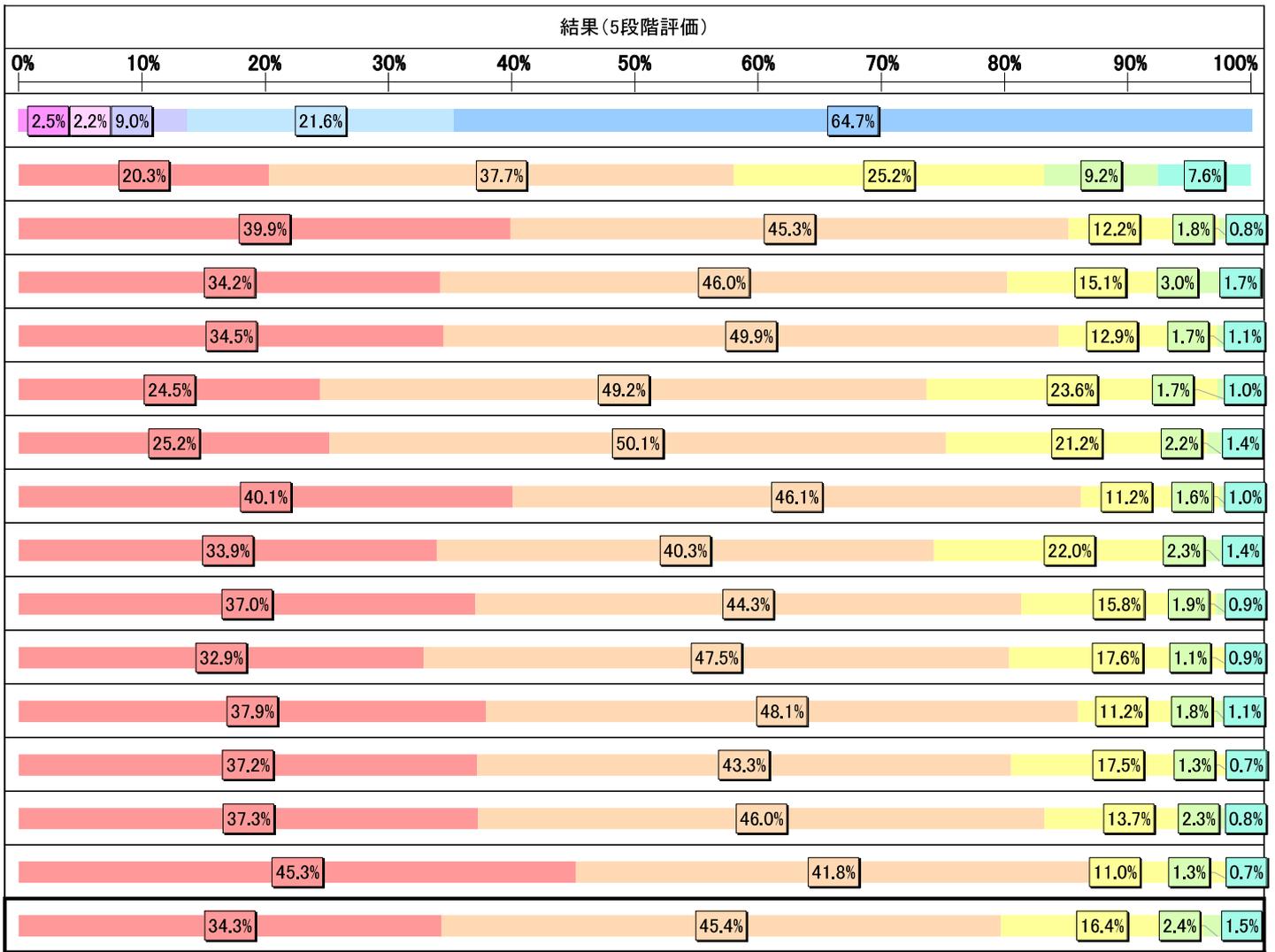
回答率：59.2%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.6	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5	3.6
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.2	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.1
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価			3.9	3.9

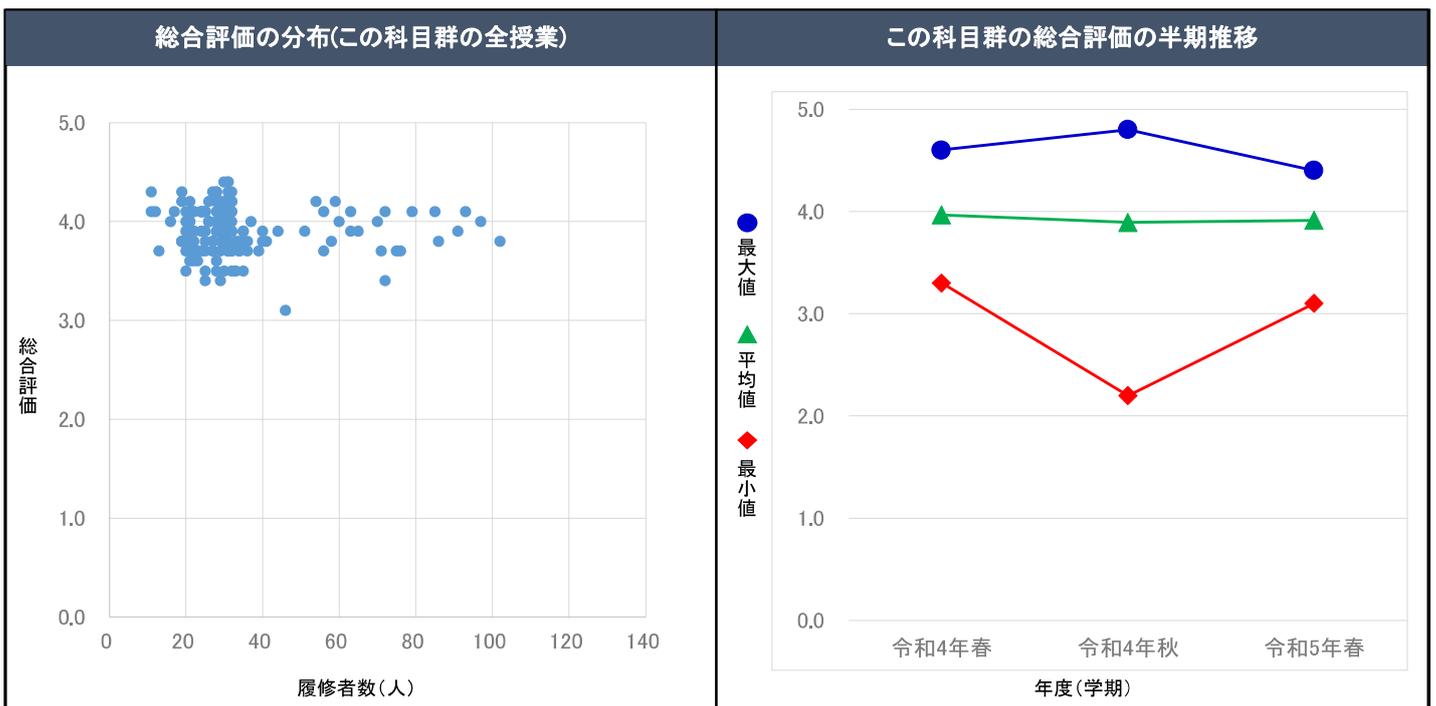
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 人文科学科目群

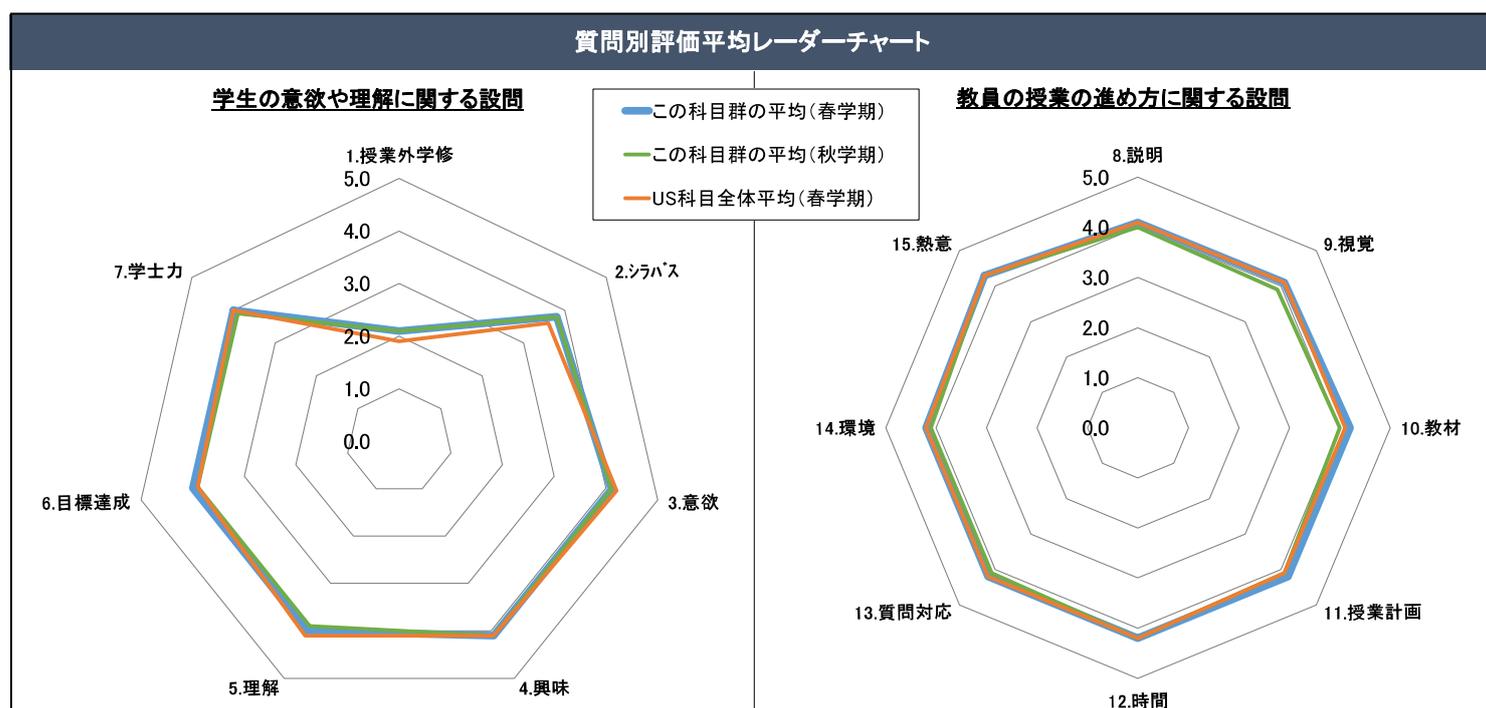
履修者数：2,462名

回答者数：861名

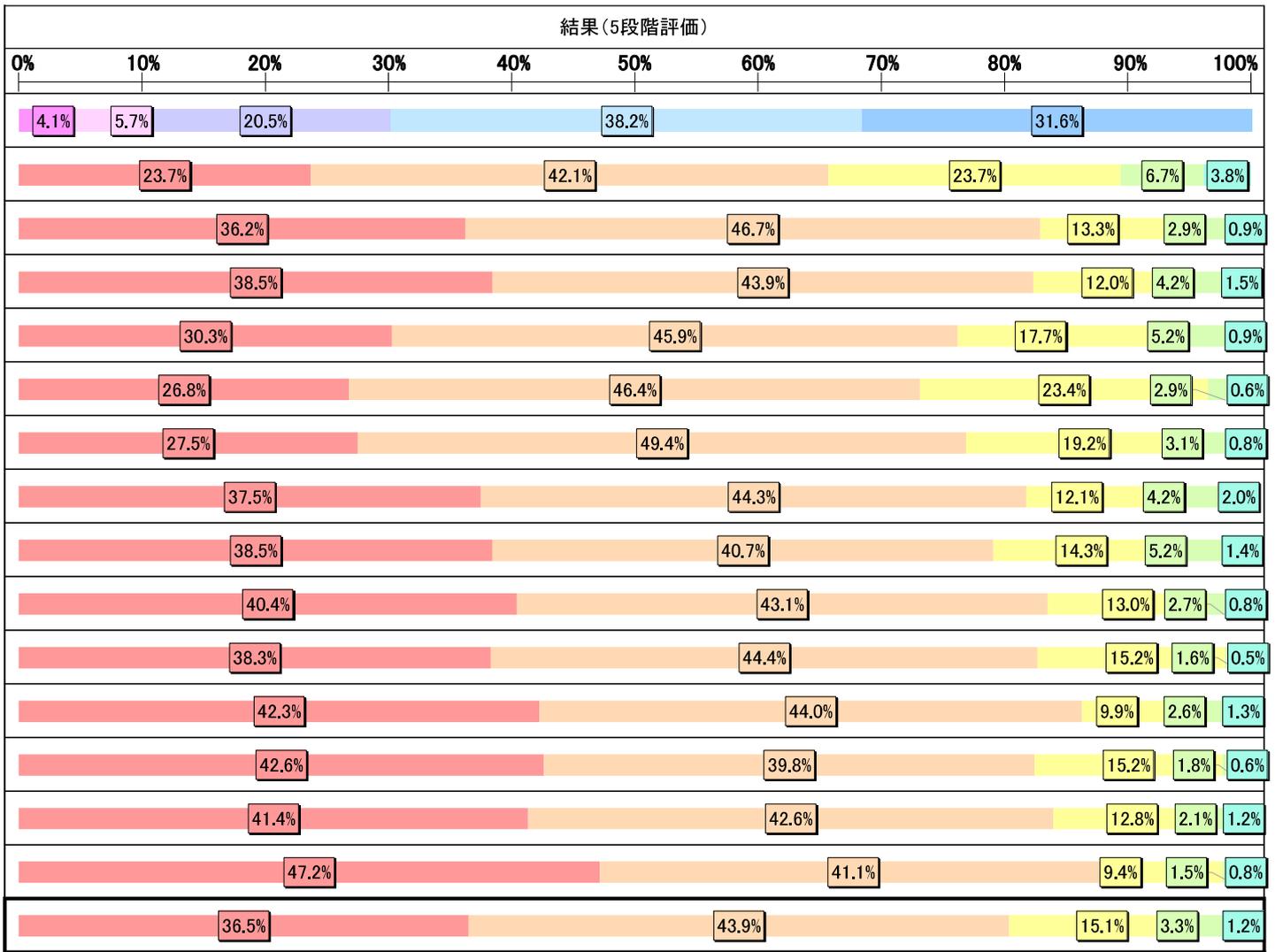
回答率：35.0%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.6
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	3.9
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.1
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.1
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価			4.0	3.9

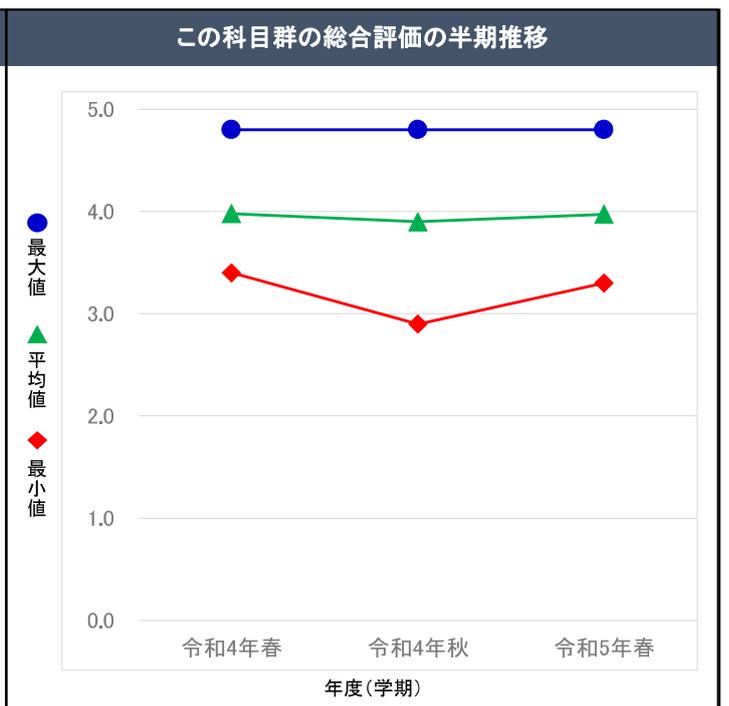
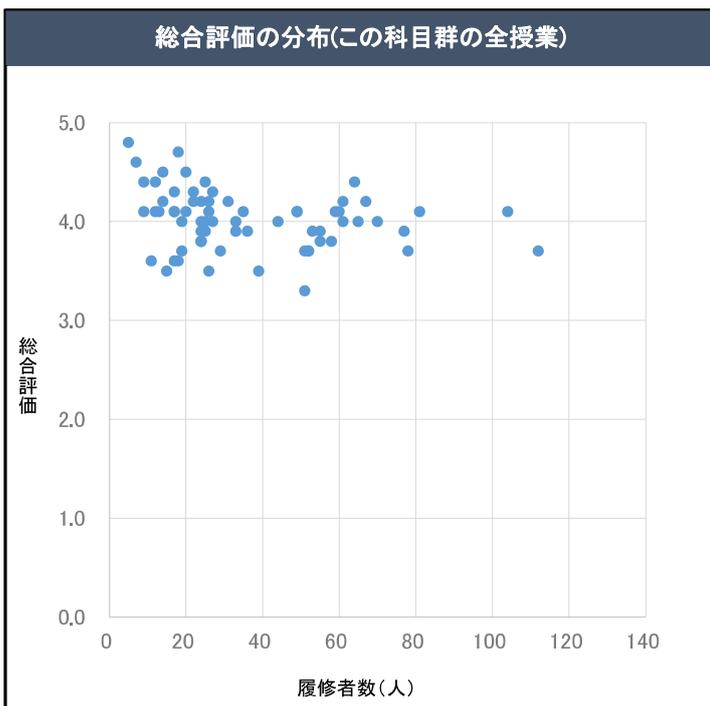
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 社会科学科目群

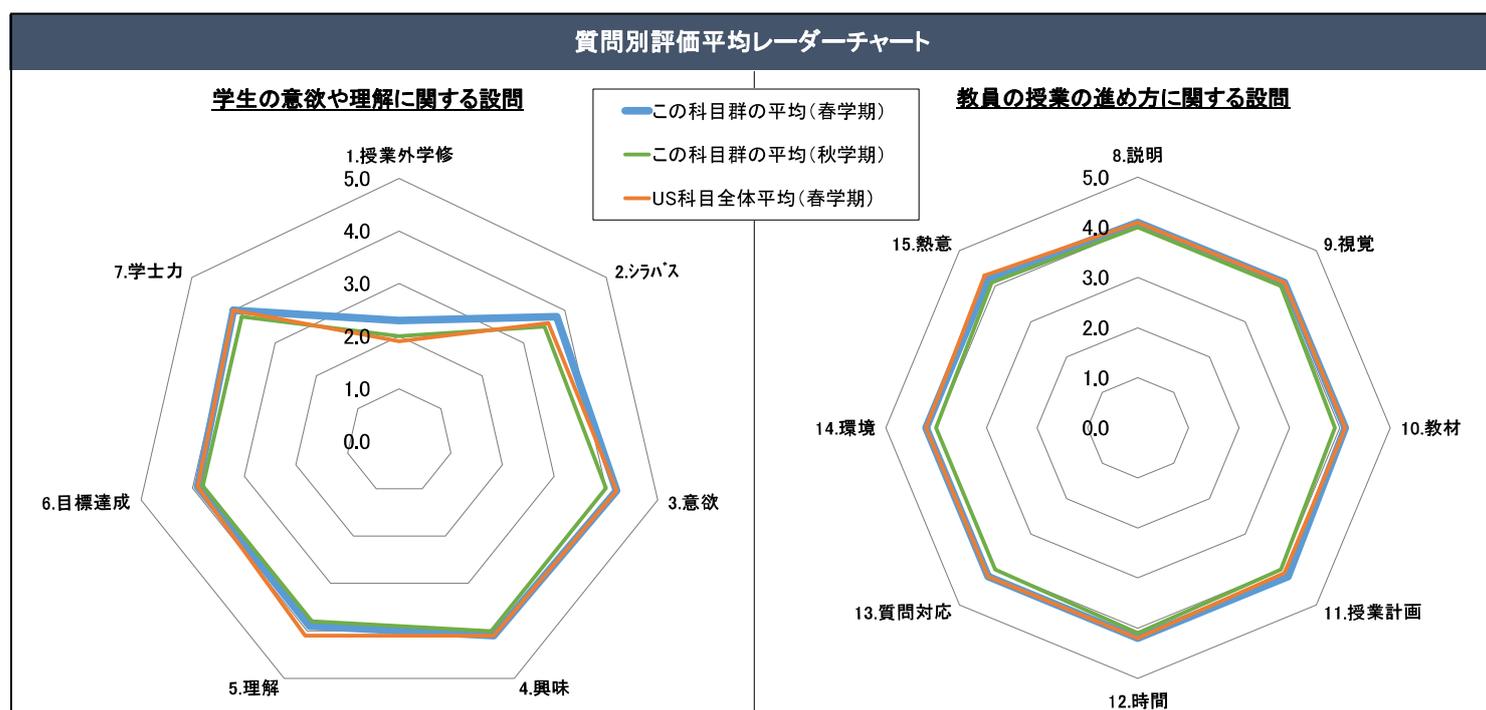
履修者数： 2,222 名

回答者数： 793 名

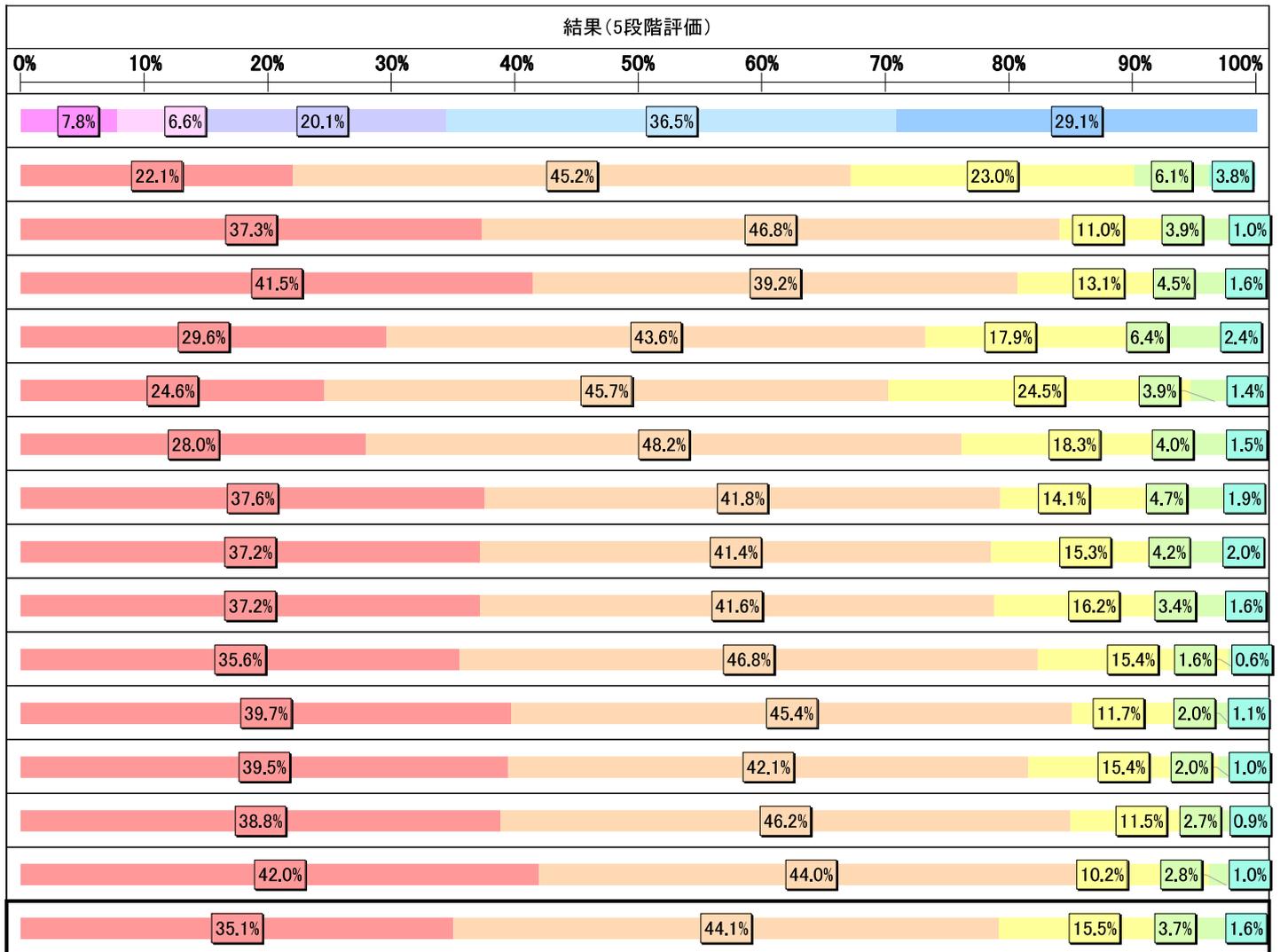
回答率： 35.7 %

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.3	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.6
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.1
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価			4.0	3.9

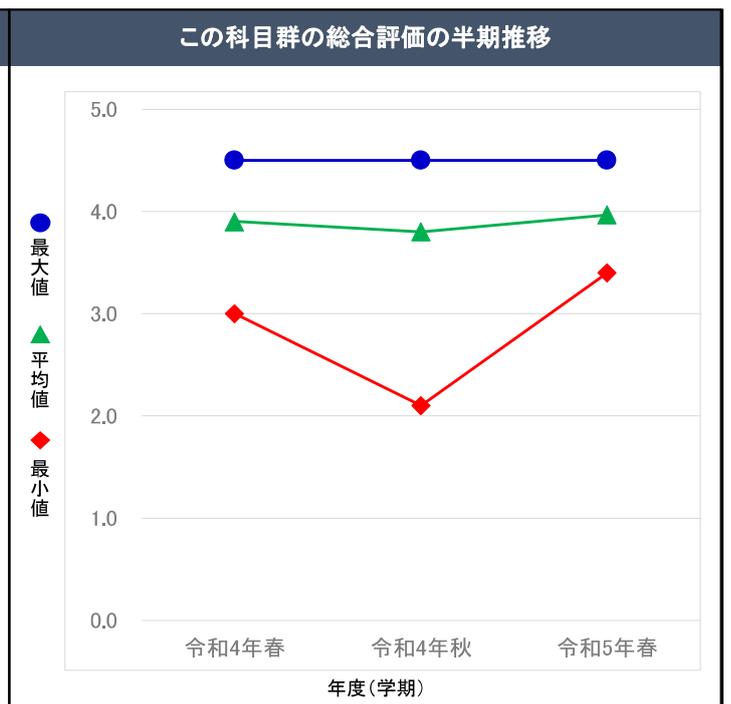
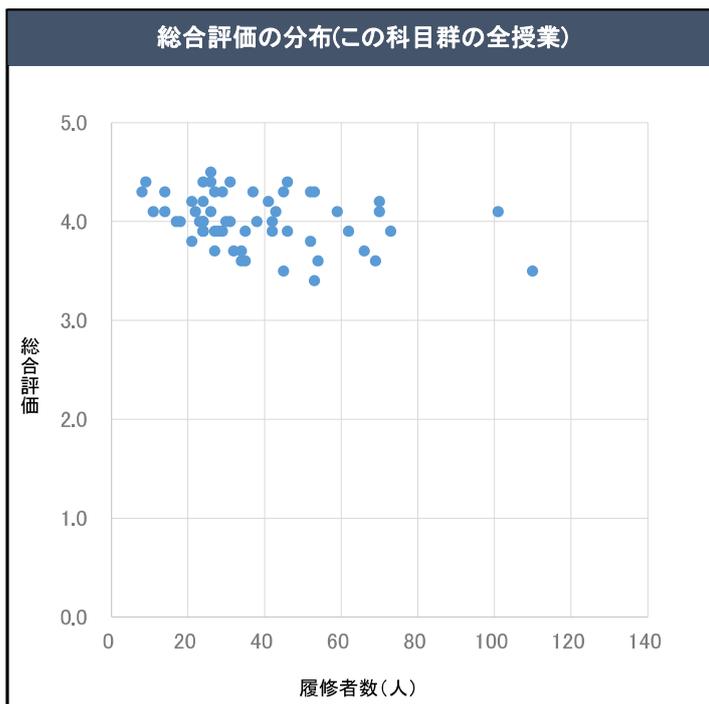
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 自然科学科目群

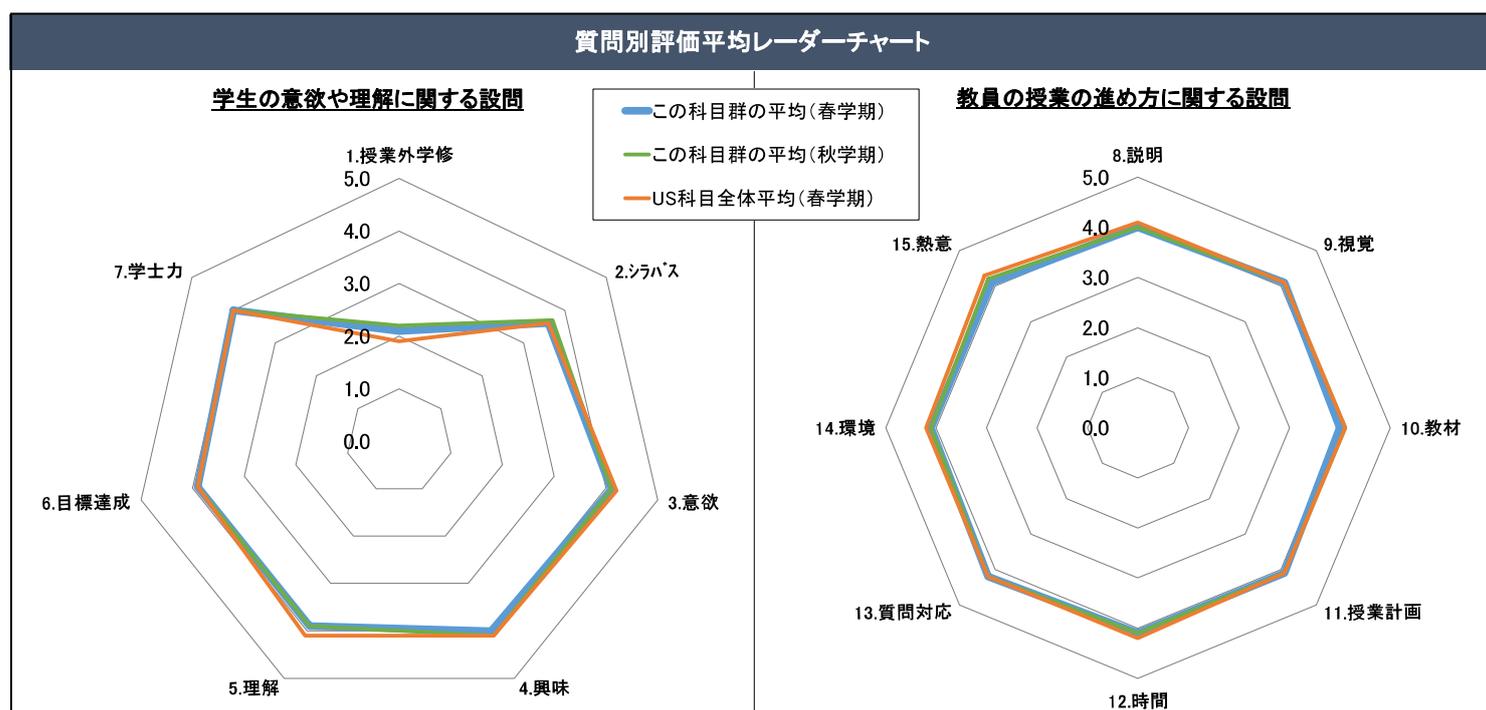
履修者数：3,261名

回答者数：1,769名

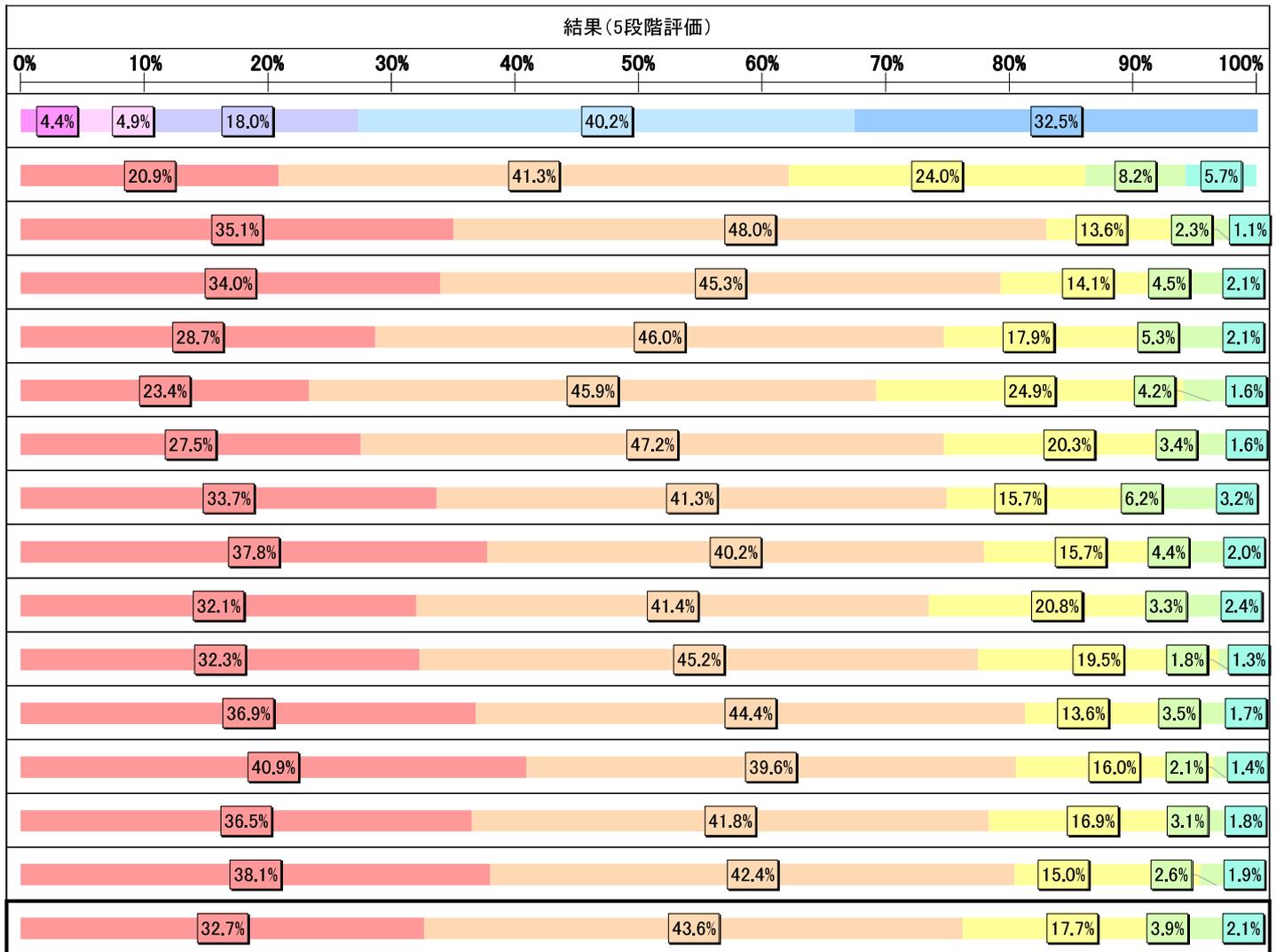
回答率：54.2%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.0	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.1
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.1	4.3
総合評価			3.9	3.9

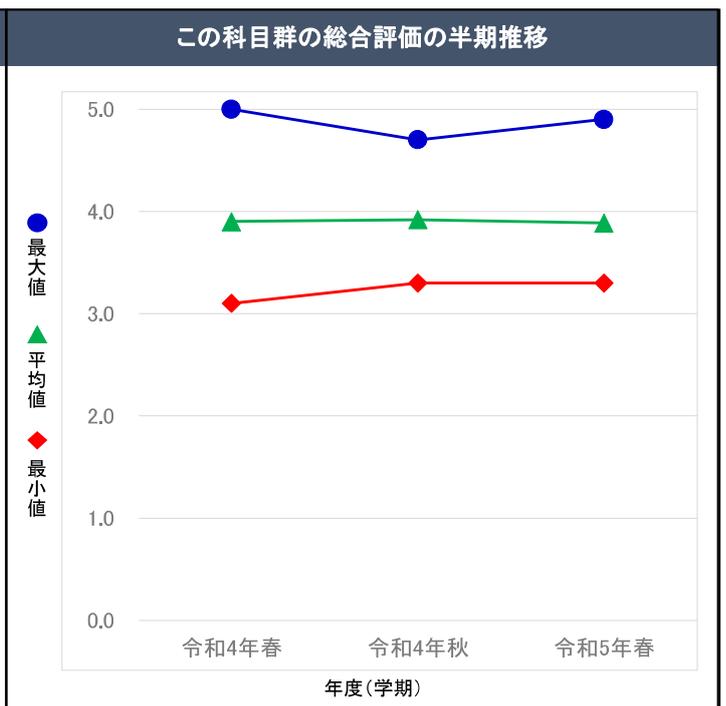
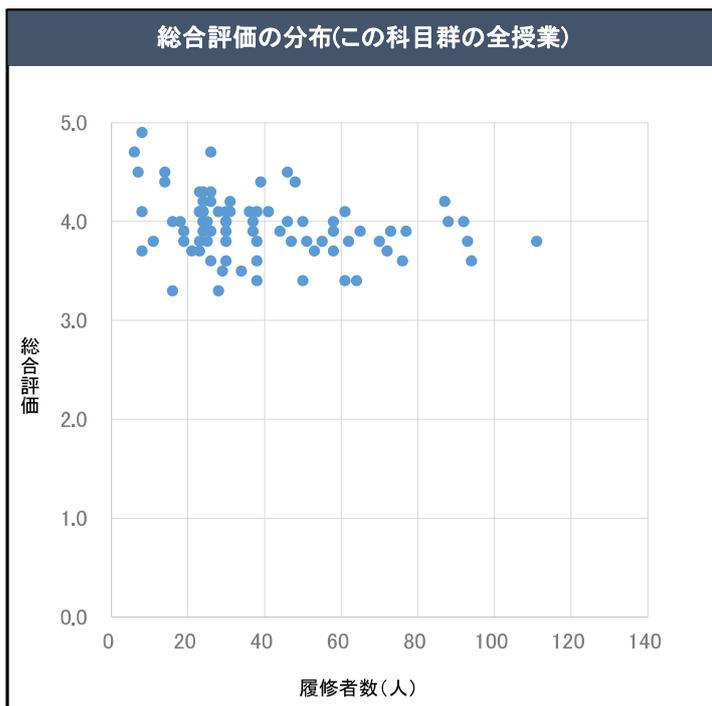
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 学際科目群

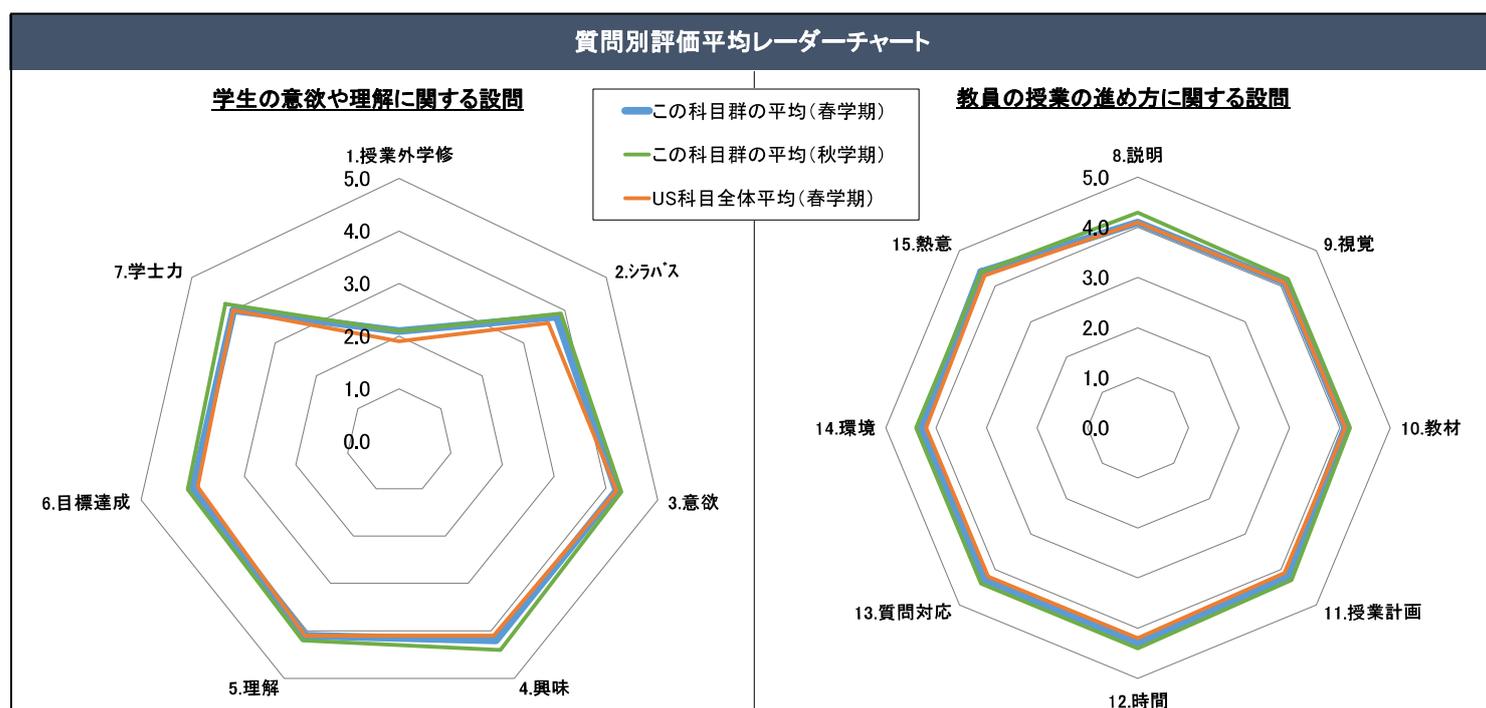
履修者数：1,711名

回答者数：558名

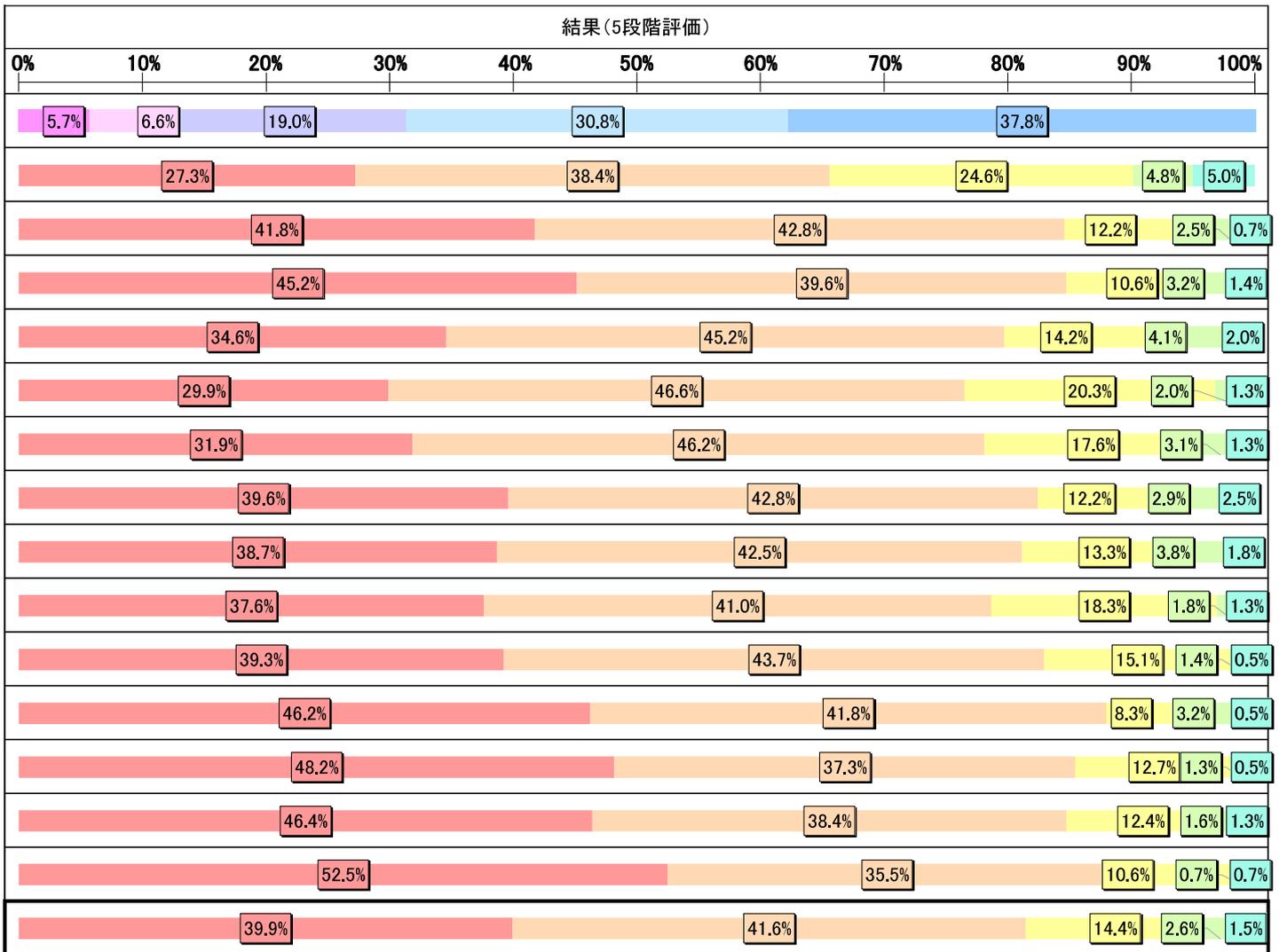
回答率：32.6%

設問			科目群平均	US科目全体平均	
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.2
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.0	3.9	

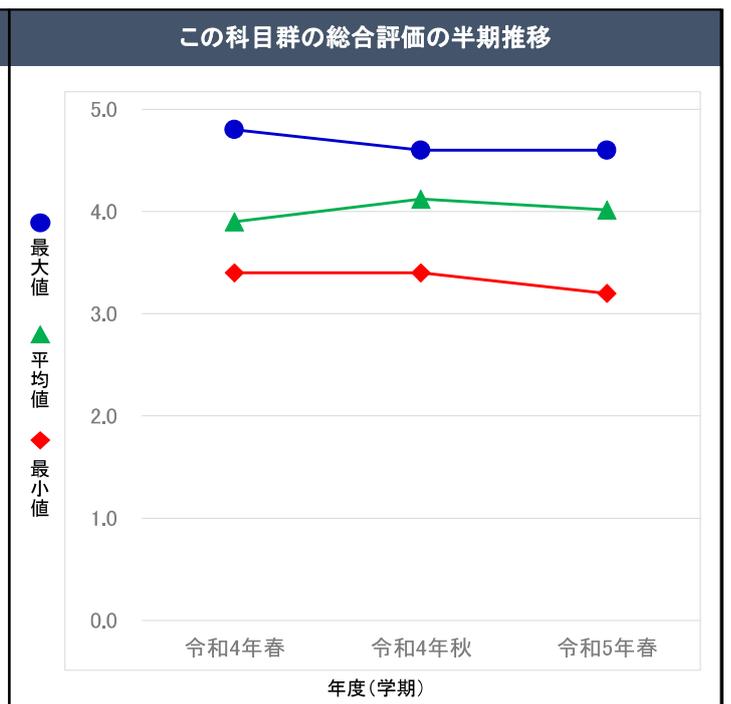
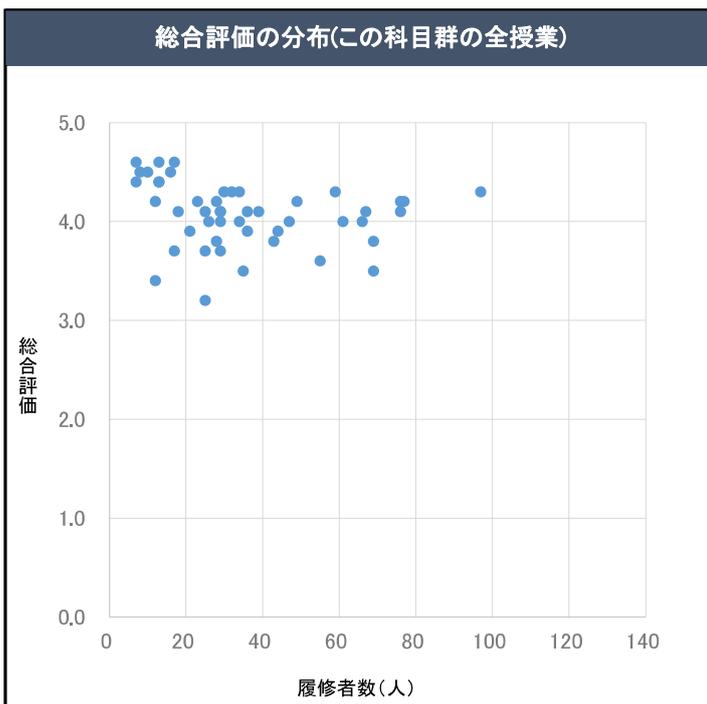
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 言語表現科目群

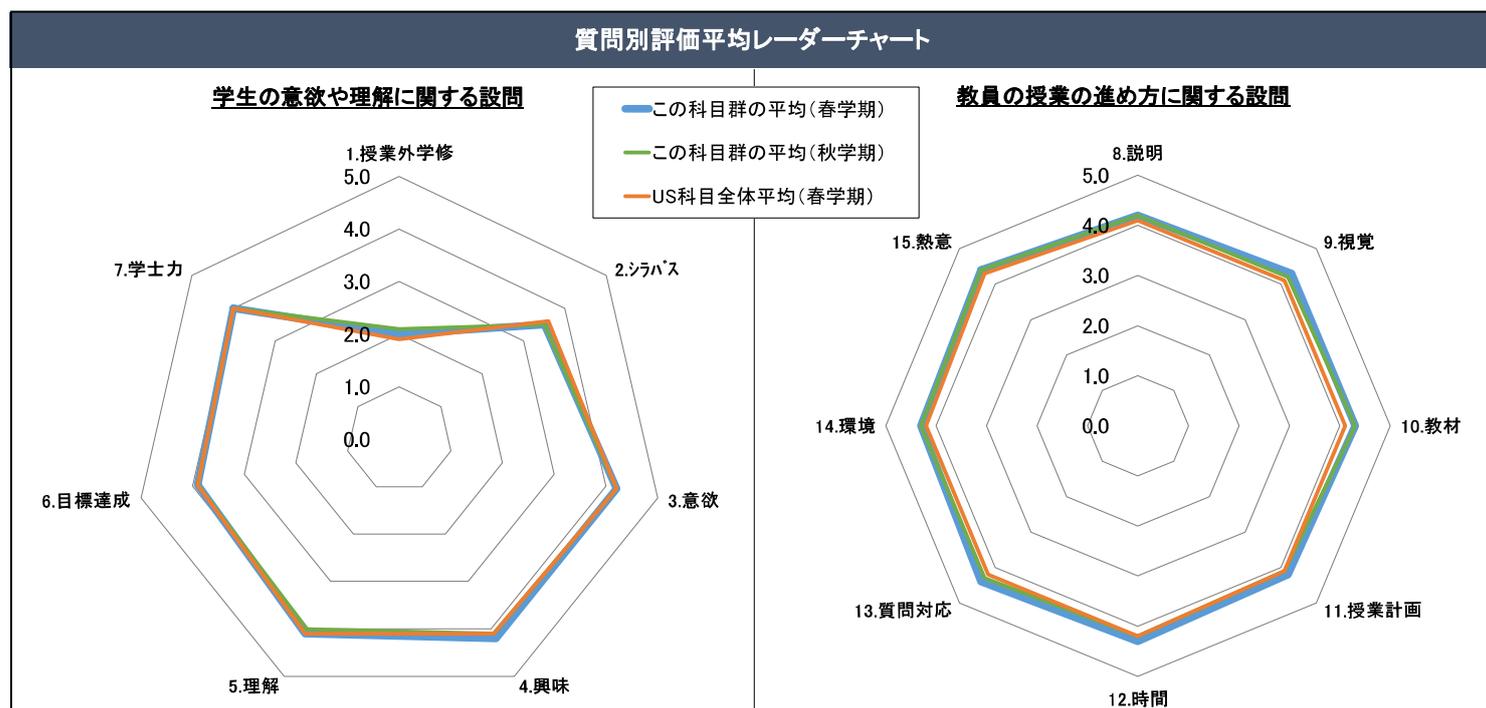
履修者数：3,551名

回答者数：2,145名

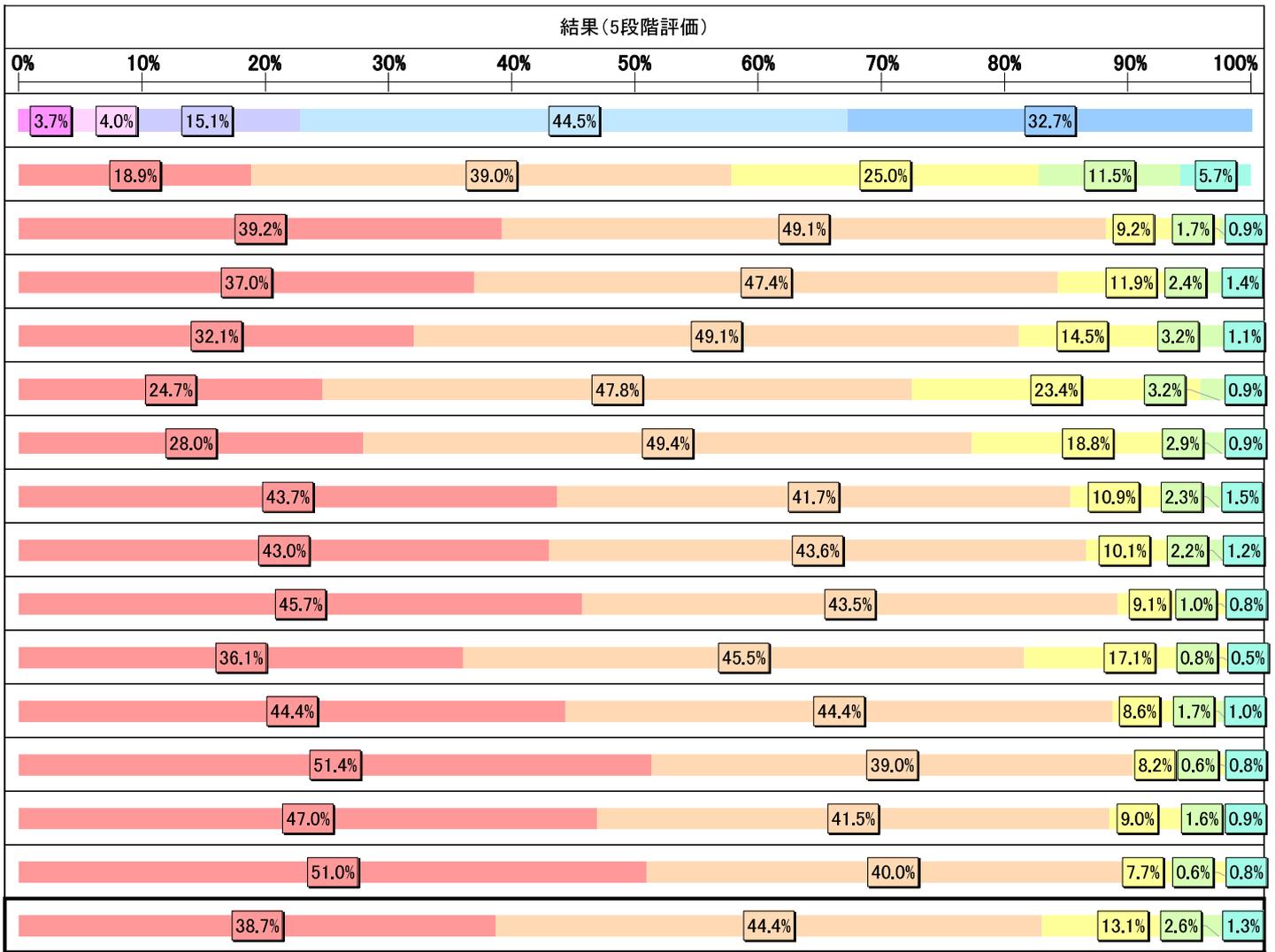
回答率：60.4%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5	3.6
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.1
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.3	4.1
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.1
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.0	3.9

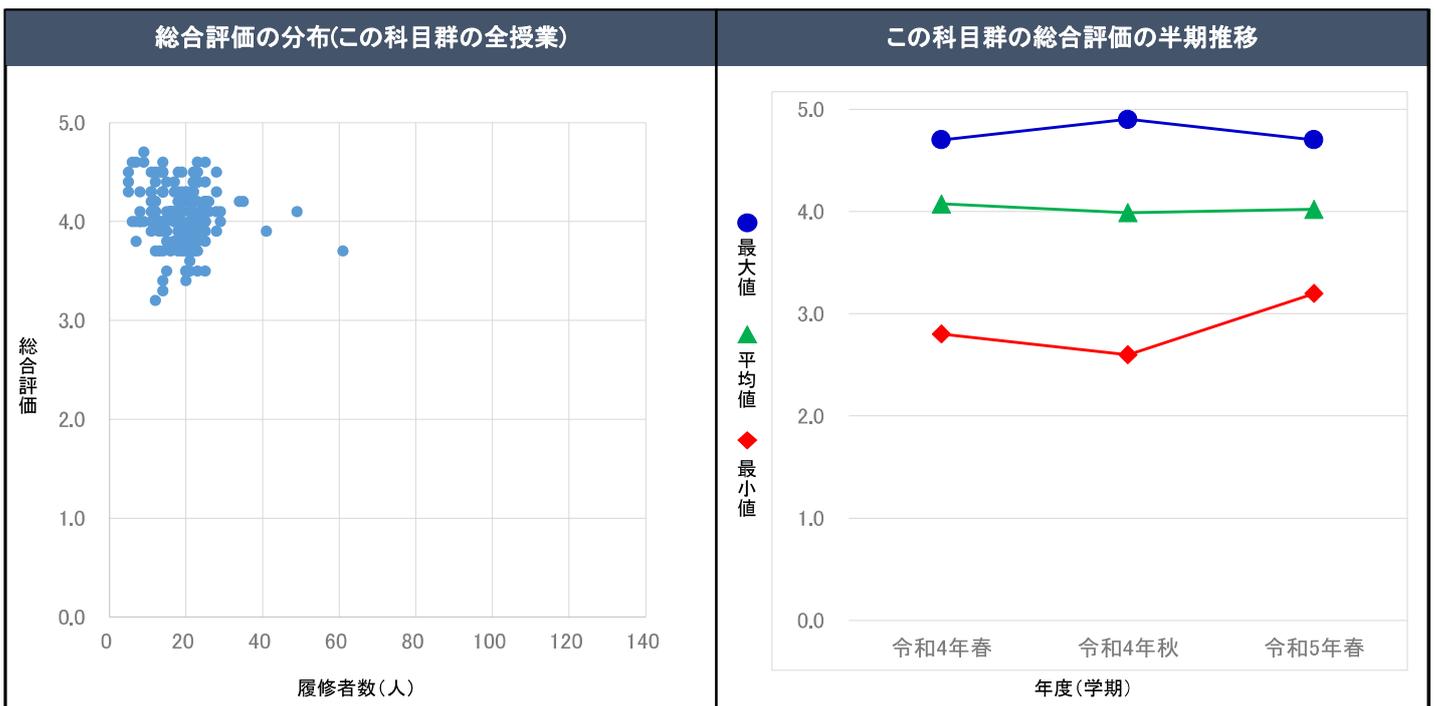
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 教職関連科目群

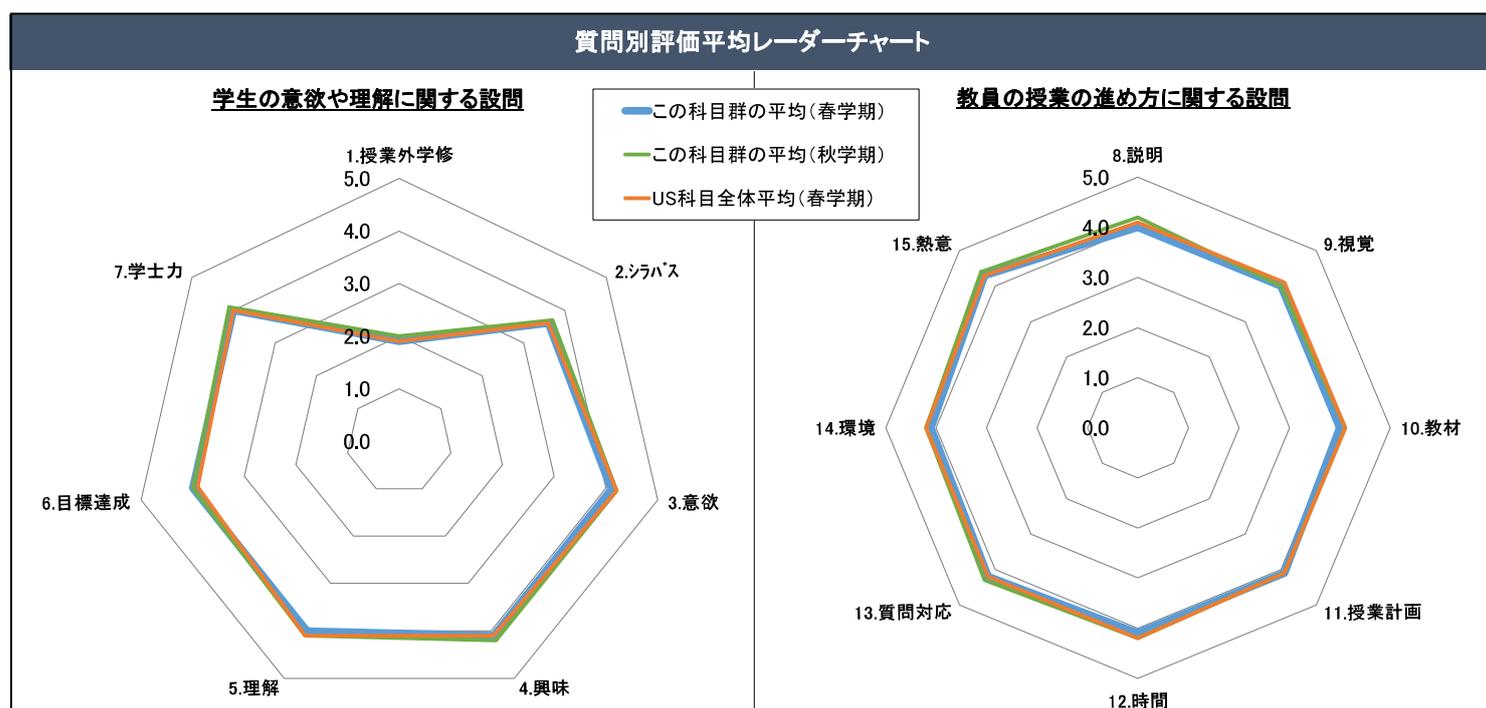
履修者数：2,308名

回答者数：986名

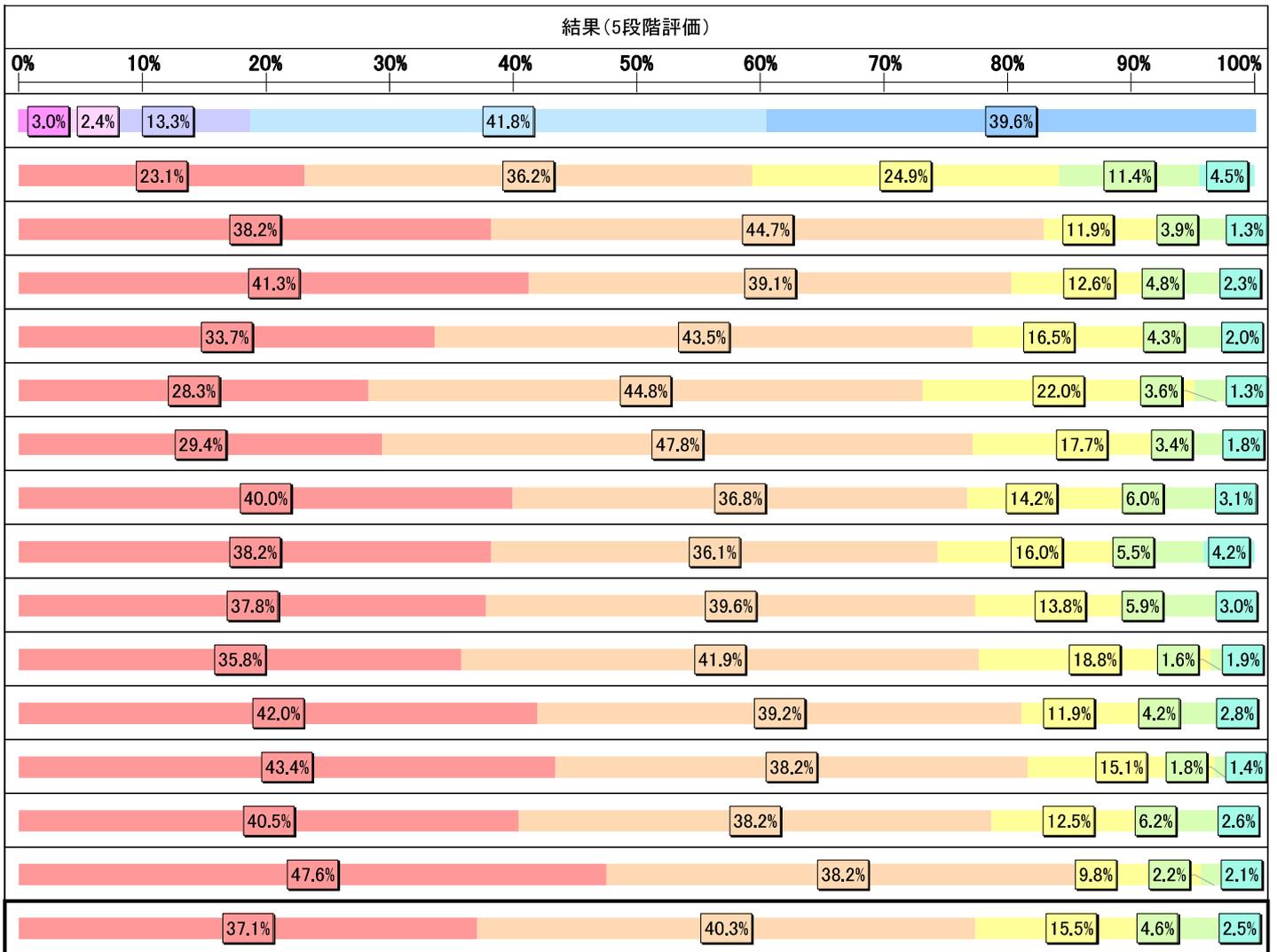
回答率：42.7%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	3.9
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.1
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価			3.9	3.9

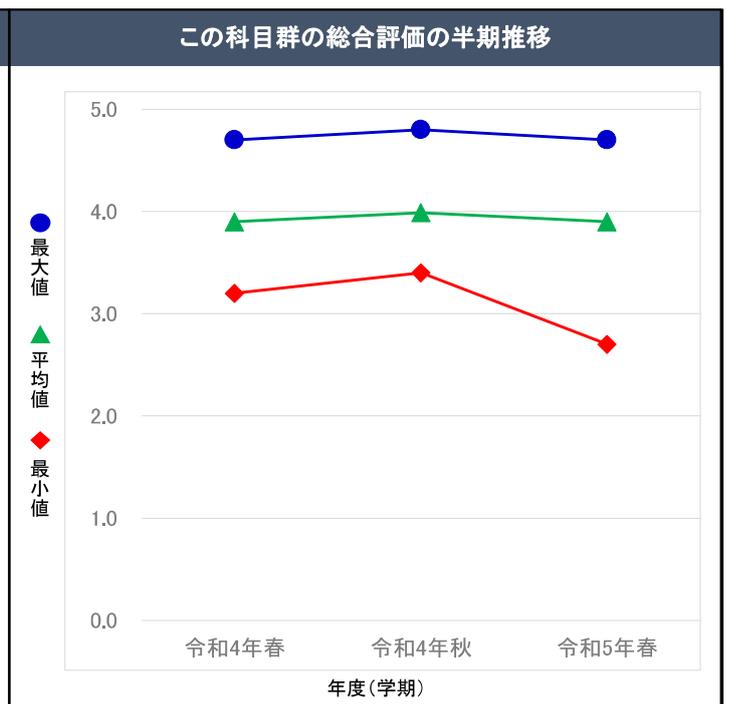
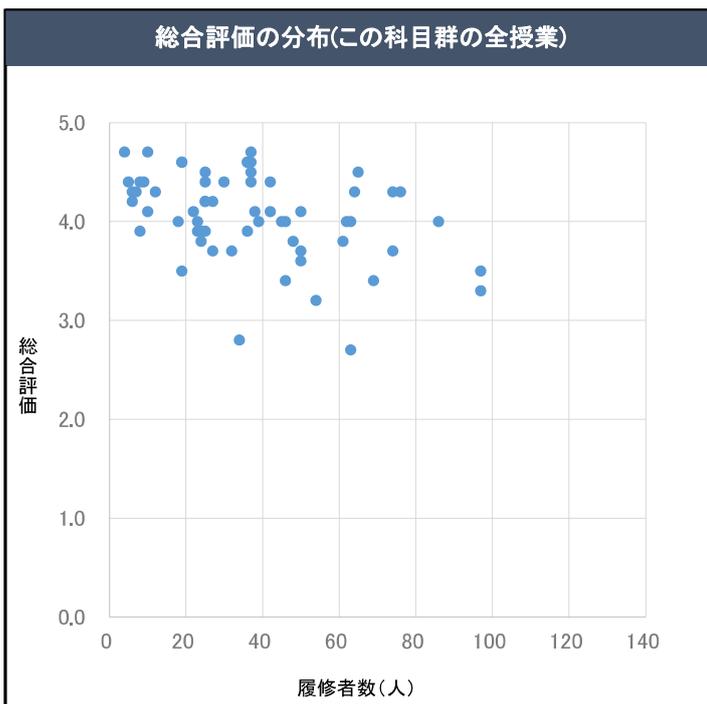
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 資格関連科目群

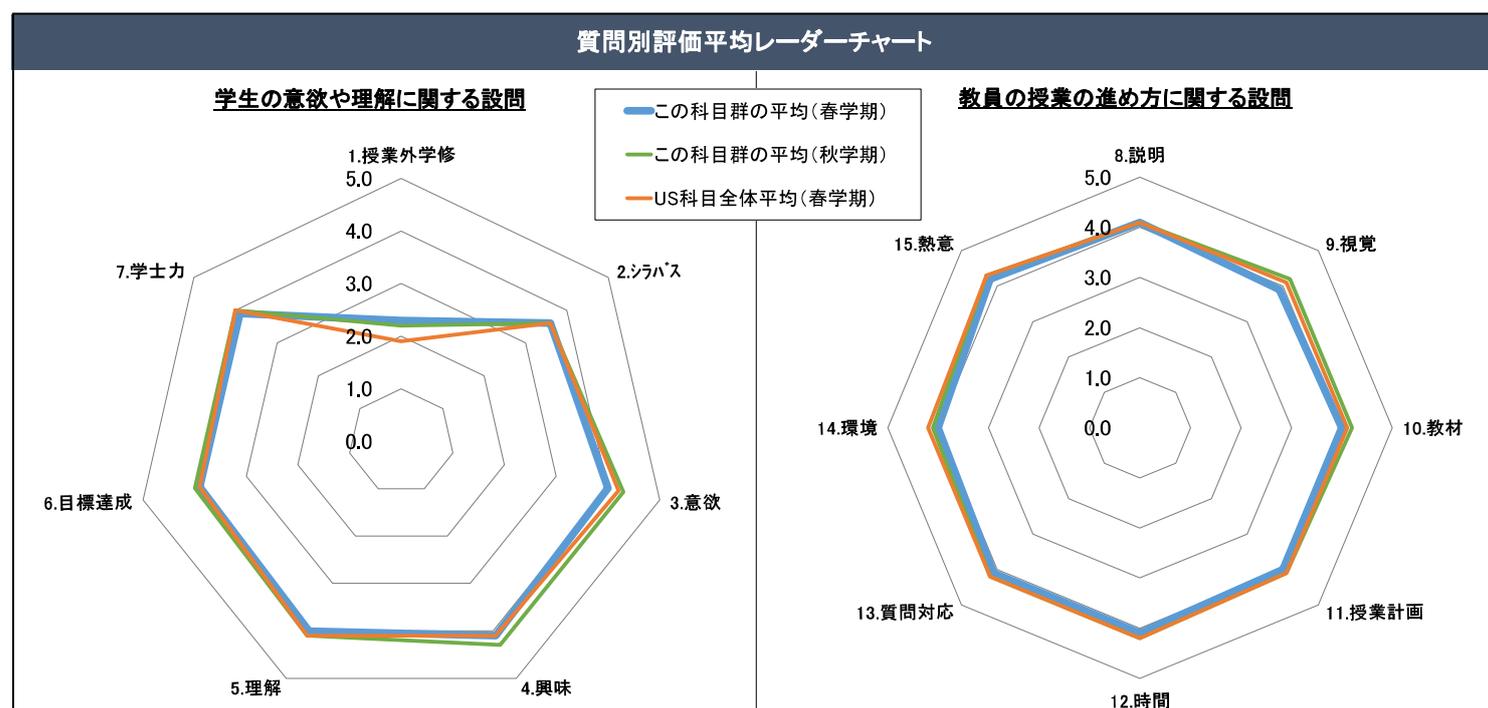
履修者数： 429 名

回答者数： 108 名

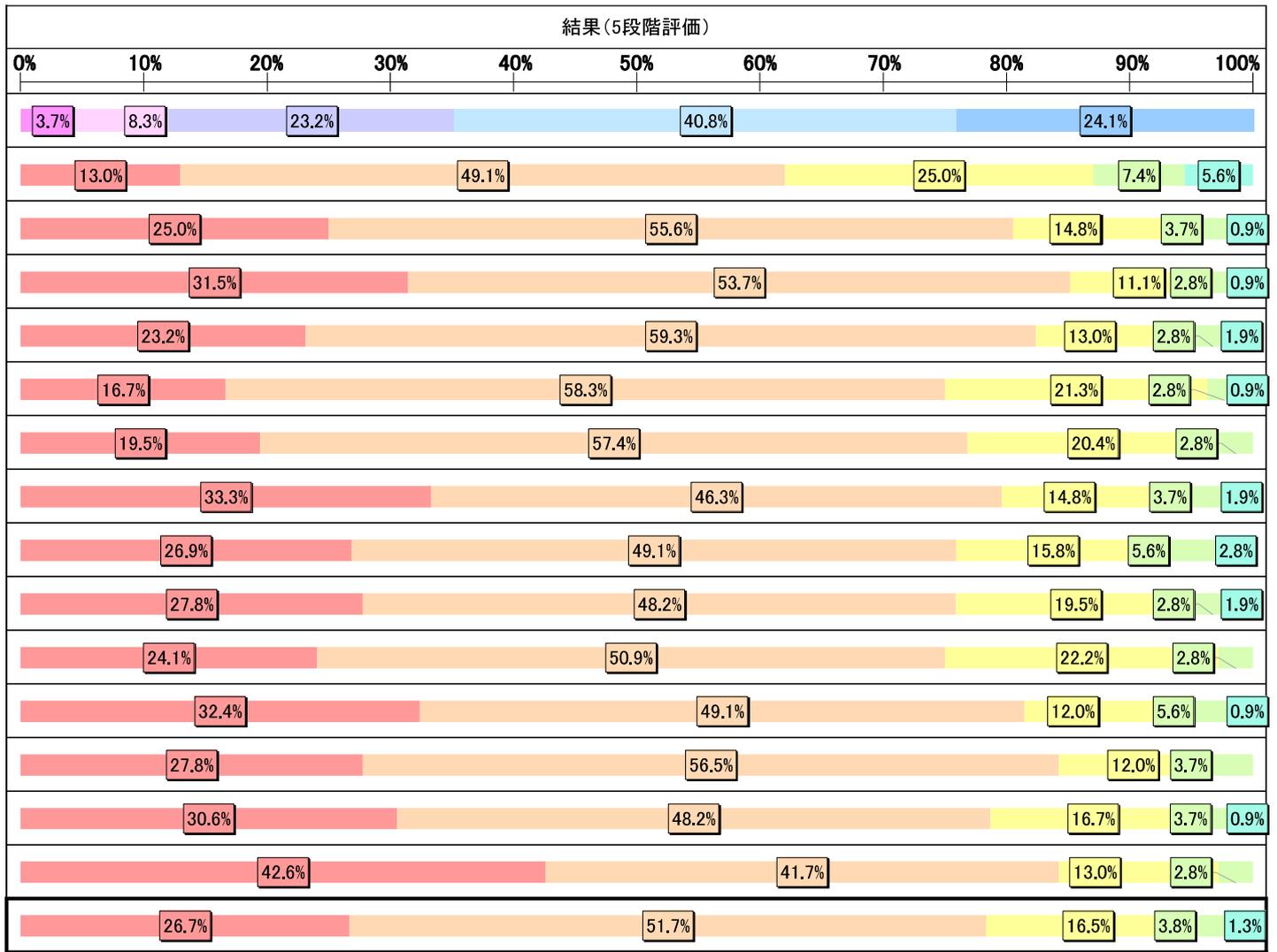
回答率： 25.2 %

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.3	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.0	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	3.9	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	3.9	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.0	4.1
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価			3.9	3.9

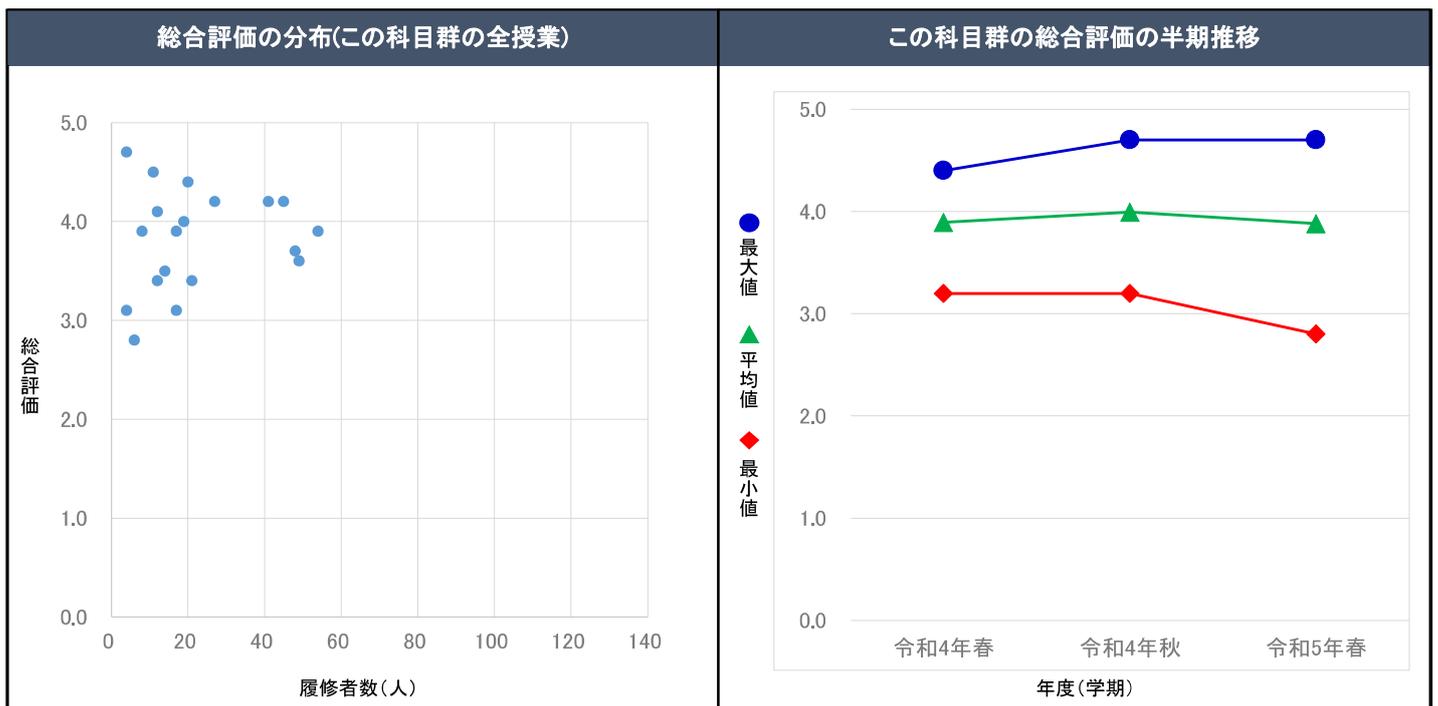
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



授業アンケート一覧 &gt; 授業アンケート結果参照

戻る

期間：2023/08/10（木）09:55～2023/08/16（水）23:59

対象者数(延べ数)：201人 回答者数(延べ数)：34人 回答率 16.9%

## 2023\_授業アンケート【サマーセッションⅠ期】

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

## あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）	比率	人数
4時間以上	5.9%	2人
3時間～4時間未満	2.9%	1人
2時間～3時間未満	32.4%	11人
1時間～2時間未満	38.2%	13人
1時間未満	20.6%	7人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	29.4%	10人
そう思う	35.3%	12人
どちらともいえない	20.6%	7人
そう思わない	11.8%	4人
全くそう思わない	2.9%	1人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	58.8%	20人
そう思う	35.3%	12人
どちらともいえない	2.9%	1人
そう思わない	2.9%	1人
全くそう思わない	0.0%	0人
4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	64.7%	22人
そう思う	26.5%	9人
どちらともいえない	5.9%	2人
そう思わない	2.9%	1人
全くそう思わない	0.0%	0人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	52.9%	18人
そう思う	32.4%	11人
どちらともいえない	5.9%	2人
そう思わない	8.8%	3人
全くそう思わない	0.0%	0人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	32.4%	11人
そう思う	50.0%	17人
どちらともいえない	17.6%	6人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）	比率	人数
とてもそう思う	35.3%	12人
そう思う	50.0%	17人
どちらともいえない	11.8%	4人
そう思わない	2.9%	1人
全くそう思わない	0.0%	0人

## 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		44.1%	15人
そう思う		35.3%	12人
どちらともいえない		11.8%	4人
そう思わない		8.8%	3人
全くそう思わない		0.0%	0人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		44.1%	15人
そう思う		29.4%	10人
どちらともいえない		14.7%	5人
そう思わない		8.8%	3人
全くそう思わない		2.9%	1人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		47.1%	16人
そう思う		35.3%	12人
どちらともいえない		8.8%	3人
そう思わない		5.9%	2人
全くそう思わない		2.9%	1人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		41.2%	14人
そう思う		38.2%	13人
どちらともいえない		11.8%	4人
そう思わない		5.9%	2人
全くそう思わない		2.9%	1人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		47.1%	16人
そう思う		41.2%	14人
どちらともいえない		2.9%	1人
そう思わない		5.9%	2人
全くそう思わない		2.9%	1人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		55.9%	19人
そう思う		26.5%	9人
どちらともいえない		11.8%	4人
そう思わない		5.9%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		50.0%	17人
そう思う		38.2%	13人
どちらともいえない		5.9%	2人
そう思わない		2.9%	1人
全くそう思わない		2.9%	1人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		47.1%	16人
そう思う		44.1%	15人
どちらともいえない		5.9%	2人
そう思わない		2.9%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人

## 自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。

なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

授業アンケート一覧 &gt; 授業アンケート結果参照

戻る

期間：2023/09/01（金）09:00～2023/09/07（木）23:59

対象者数(延べ数)：187人 回答者数(延べ数)：67人 回答率 35.8%

## 2023\_授業アンケート【サマーセッションⅡ期】

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

## あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）		比率	人数
4時間以上		7.5%	5人
3時間～4時間未満		6.0%	4人
2時間～3時間未満		20.9%	14人
1時間～2時間未満		38.8%	26人
1時間未満		26.9%	18人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		25.4%	17人
そう思う		44.8%	30人
どちらともいえない		23.9%	16人
そう思わない		1.5%	1人
全くそう思わない		4.5%	3人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		41.8%	28人
そう思う		46.3%	31人
どちらともいえない		7.5%	5人
そう思わない		3.0%	2人
全くそう思わない		1.5%	1人
4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		40.3%	27人
そう思う		43.3%	29人
どちらともいえない		14.9%	10人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		1.5%	1人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		25.4%	17人
そう思う		50.7%	34人
どちらともいえない		16.4%	11人
そう思わない		6.0%	4人
全くそう思わない		1.5%	1人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		19.4%	13人
そう思う		46.3%	31人
どちらともいえない		29.9%	20人
そう思わない		4.5%	3人
全くそう思わない		0.0%	0人
7. 総合的にみてこの授業で学力がつかまりましたか *各授業の学力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）		比率	人数
とてもそう思う		23.9%	16人
そう思う		56.7%	38人
どちらともいえない		16.4%	11人
そう思わない		1.5%	1人
全くそう思わない		1.5%	1人

## 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		40.3%	27人
そう思う		44.8%	30人
どちらともいえない		6.0%	4人
そう思わない		6.0%	4人
全くそう思わない		3.0%	2人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		35.8%	24人
そう思う		52.2%	35人
どちらともいえない		10.4%	7人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		1.5%	1人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		41.8%	28人
そう思う		44.8%	30人
どちらともいえない		11.9%	8人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		1.5%	1人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		37.3%	25人
そう思う		40.3%	27人
どちらともいえない		19.4%	13人
そう思わない		3.0%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		43.3%	29人
そう思う		40.3%	27人
どちらともいえない		10.4%	7人
そう思わない		3.0%	2人
全くそう思わない		3.0%	2人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		44.8%	30人
そう思う		41.8%	28人
どちらともいえない		11.9%	8人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		1.5%	1人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		44.8%	30人
そう思う		38.8%	26人
どちらともいえない		11.9%	8人
そう思わない		1.5%	1人
全くそう思わない		3.0%	2人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		52.2%	35人
そう思う		38.8%	26人
どちらともいえない		6.0%	4人
そう思わない		1.5%	1人
全くそう思わない		1.5%	1人

## 自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。  
 なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。  
 ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

授業アンケート一覧 &gt; 授業アンケート結果参照

戻る

期間：2023/09/19（火）09:00～2023/09/25（月）23:59

対象者数(延べ数)：191人 回答者数(延べ数)：82人 回答率 42.9%

## 2023\_授業アンケート【サマーセッションⅢ期】

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。

入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。

なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

## あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）	比率	人数
4時間以上	2.4%	2人
3時間～4時間未満	8.5%	7人
2時間～3時間未満	24.4%	20人
1時間～2時間未満	45.1%	37人
1時間未満	19.5%	16人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	24.4%	20人
そう思う	50.0%	41人
どちらともいえない	15.9%	13人
そう思わない	6.1%	5人
全くそう思わない	3.7%	3人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	64.6%	53人
そう思う	29.3%	24人
どちらともいえない	4.9%	4人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	1.2%	1人
4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	62.2%	51人
そう思う	32.9%	27人
どちらともいえない	2.4%	2人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	2.4%	2人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	41.5%	34人
そう思う	54.9%	45人
どちらともいえない	0.0%	0人
そう思わない	2.4%	2人
全くそう思わない	1.2%	1人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	31.7%	26人
そう思う	57.3%	47人
どちらともいえない	8.5%	7人
そう思わない	1.2%	1人
全くそう思わない	1.2%	1人
7. 総合的にみてこの授業で学力がつかえましたか *各授業の学力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）	比率	人数
とてもそう思う	36.6%	30人
そう思う	56.1%	46人
どちらともいえない	4.9%	4人
そう思わない	1.2%	1人
全くそう思わない	1.2%	1人

## 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		61.0%	50人
そう思う		32.9%	27人
どちらともいえない		2.4%	2人
そう思わない		1.2%	1人
全くそう思わない		2.4%	2人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		59.8%	49人
そう思う		35.4%	29人
どちらともいえない		2.4%	2人
そう思わない		1.2%	1人
全くそう思わない		1.2%	1人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		65.9%	54人
そう思う		26.8%	22人
どちらともいえない		3.7%	3人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		3.7%	3人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		52.4%	43人
そう思う		34.1%	28人
どちらともいえない		11.0%	9人
そう思わない		1.2%	1人
全くそう思わない		1.2%	1人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		62.2%	51人
そう思う		30.5%	25人
どちらともいえない		3.7%	3人
そう思わない		1.2%	1人
全くそう思わない		2.4%	2人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		67.1%	55人
そう思う		29.3%	24人
どちらともいえない		2.4%	2人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		1.2%	1人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		68.3%	56人
そう思う		28.0%	23人
どちらともいえない		1.2%	1人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		2.4%	2人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		76.8%	63人
そう思う		20.7%	17人
どちらともいえない		0.0%	0人
そう思わない		1.2%	1人
全くそう思わない		1.2%	1人

Copyright(C) TAMAGAWA University 2009 AllRights Reserved

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。  
 なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。  
 ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

US科目全体

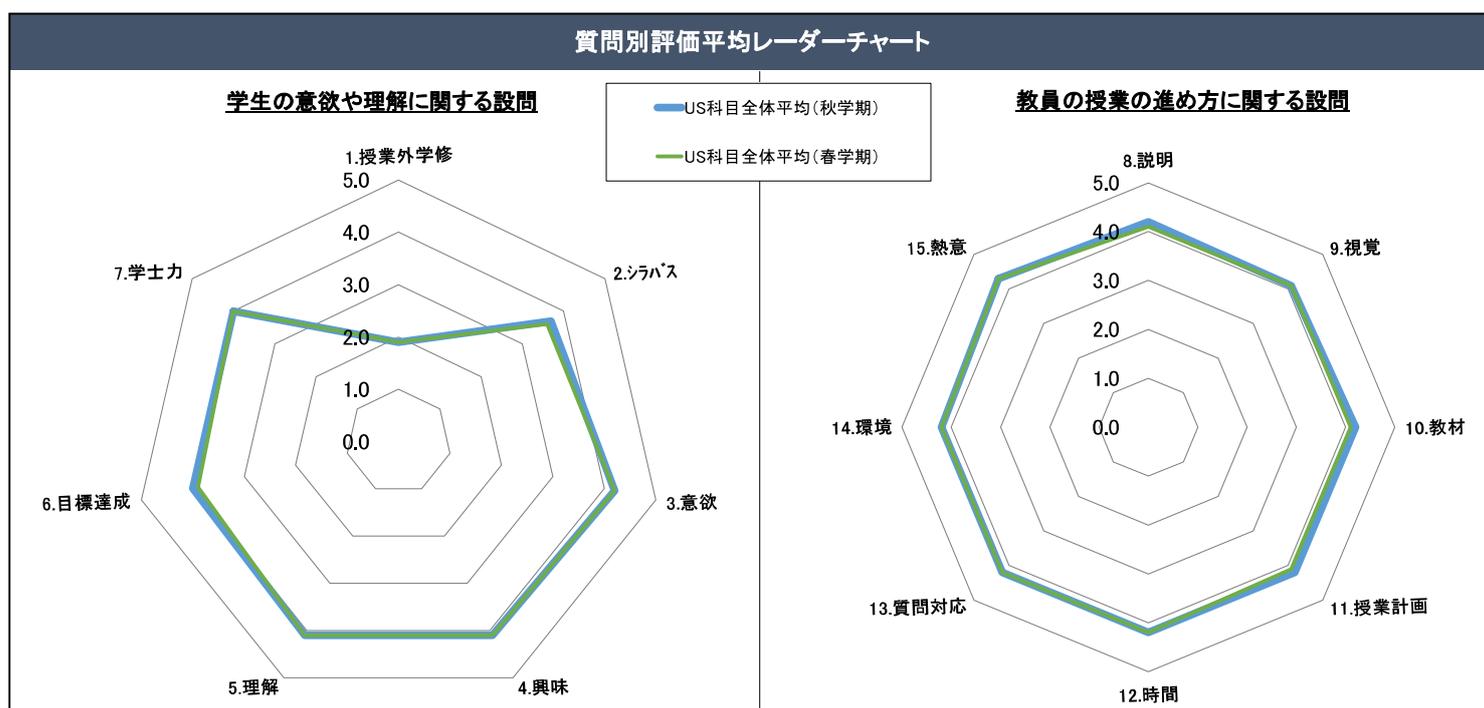
履修者数：18,554名

回答者数：6,997名

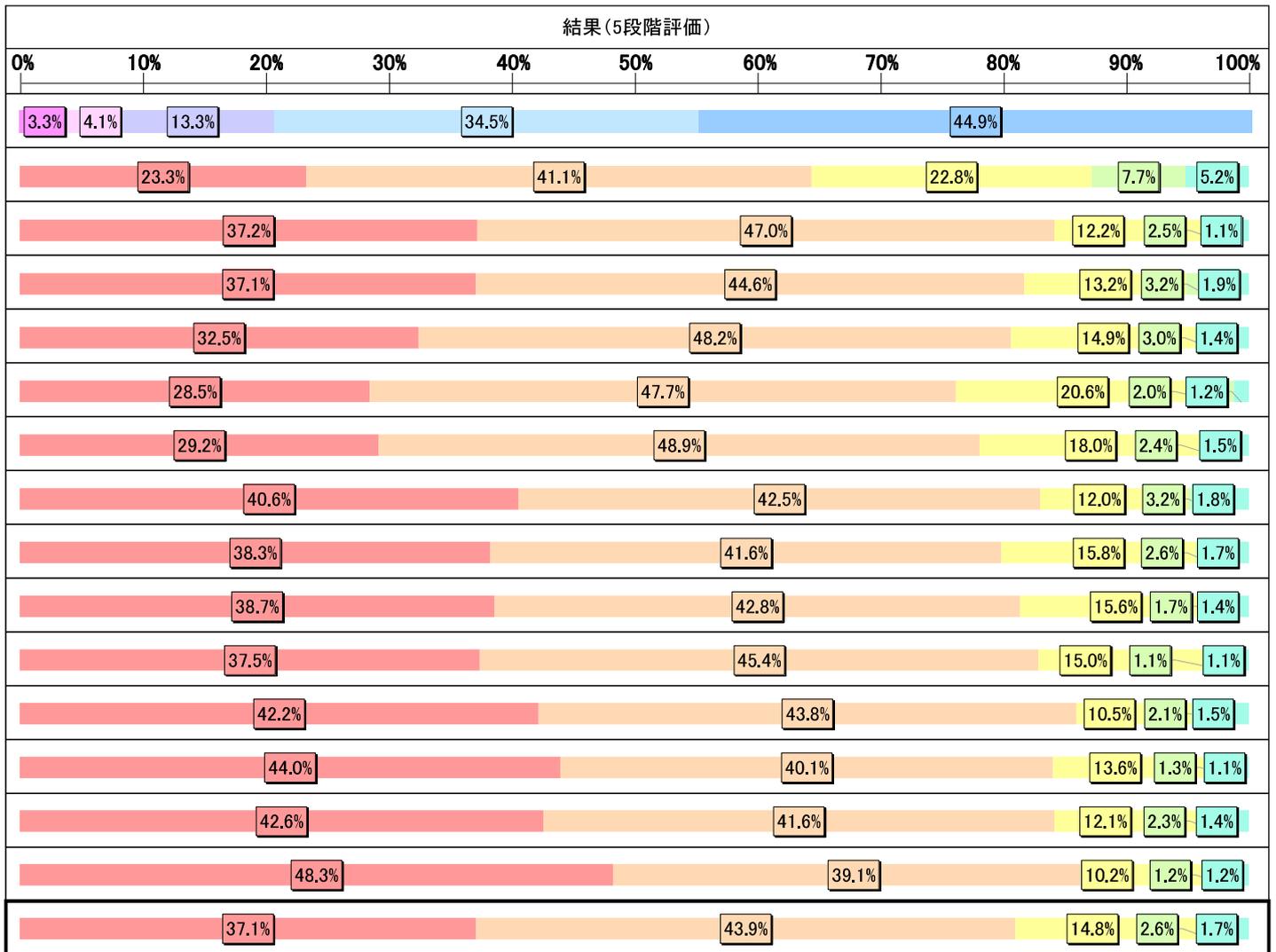
回答率：37.7%

設問			US科目 全体平均
学生の 意欲や 理解に 関する 設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0
教員の 授業の 進め方 に関する 設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3
総合評価			4.0

平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)

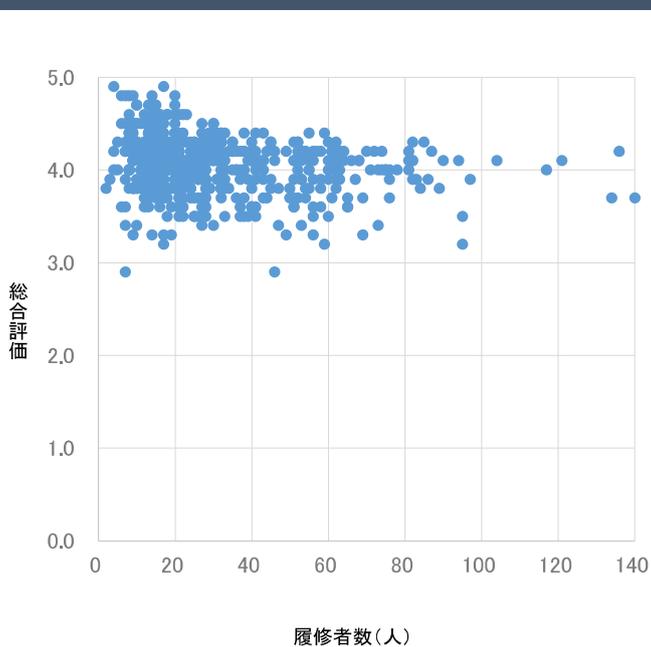


5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満

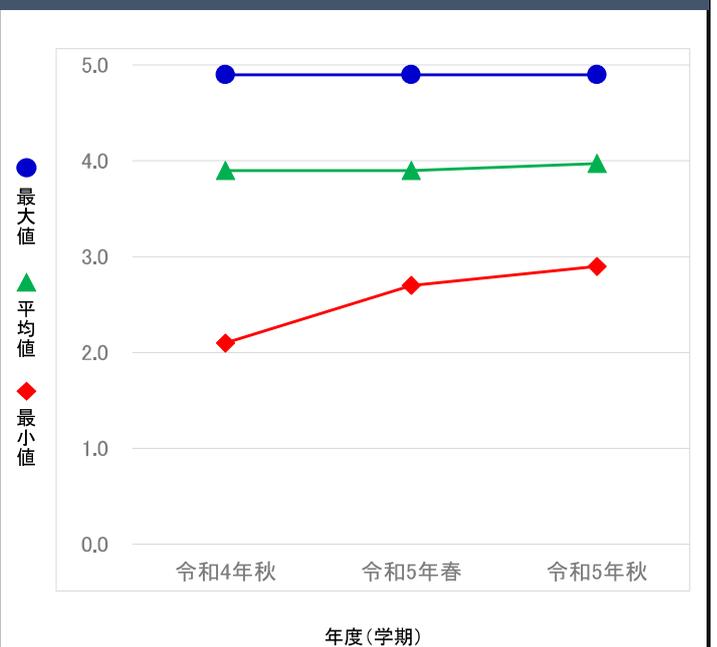


5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない

総合評価の分布(US科目全体)



US科目全体の総合評価の半期推移



US科目 玉川教育・FYE科目群

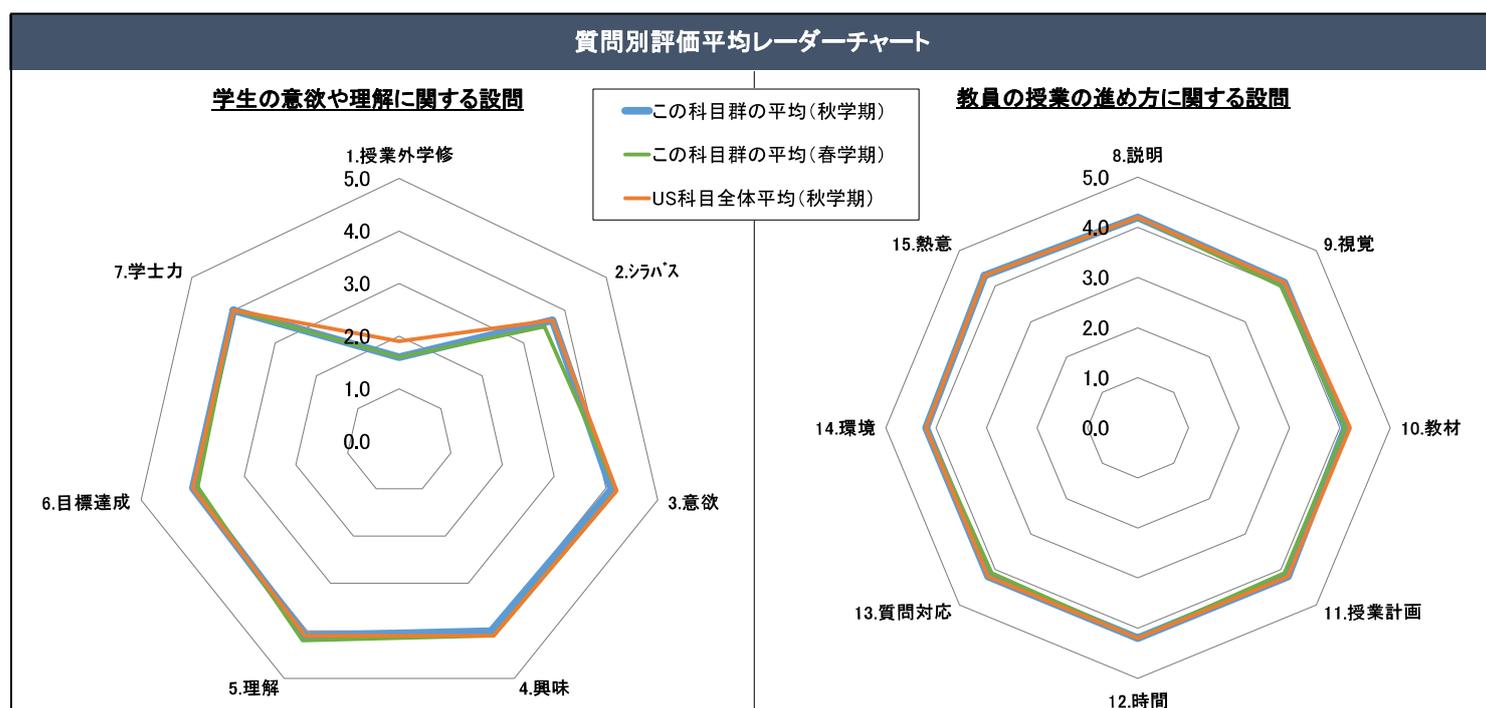
履修者数：5,139名

回答者数：2,152名

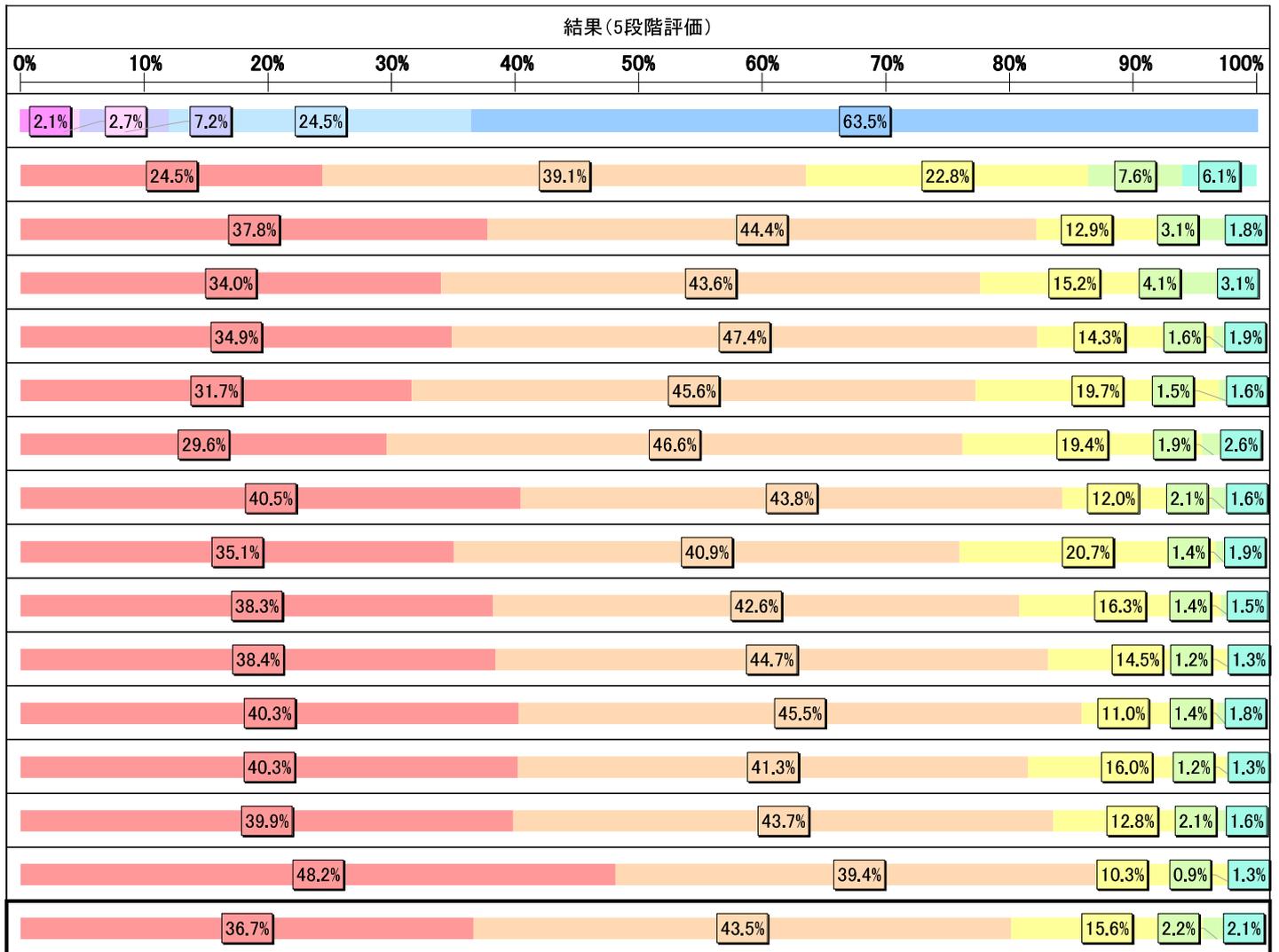
回答率：41.9%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.6	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.0	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価			3.9	4.0

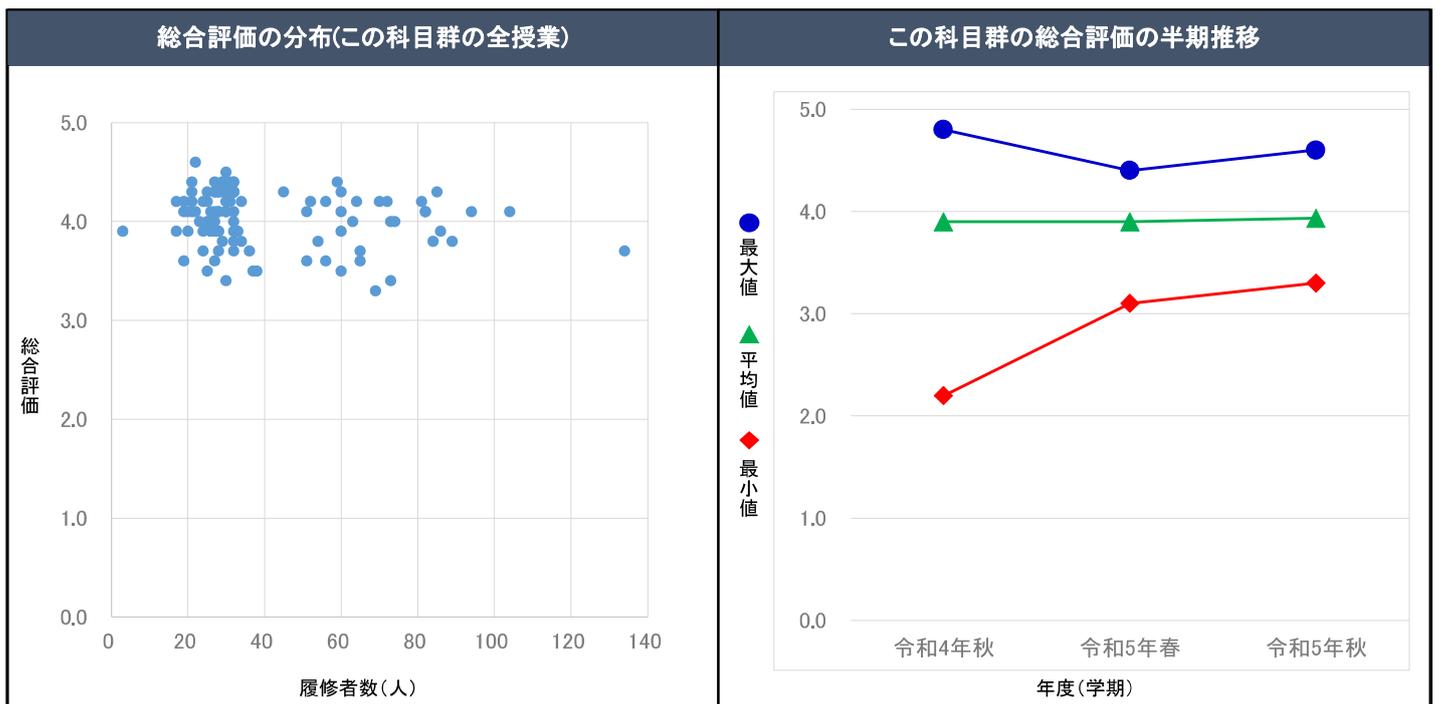
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 人文科学科目群

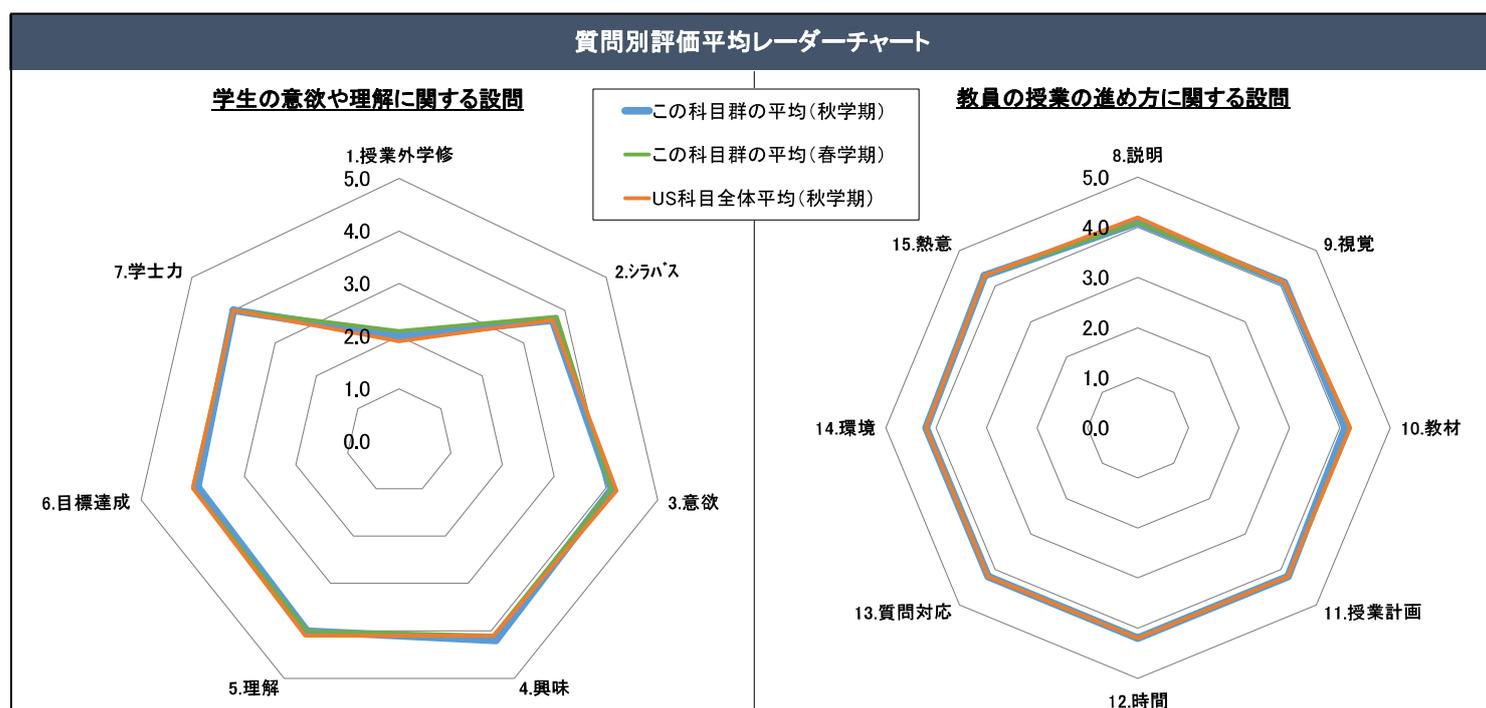
履修者数：2,339名

回答者数：728名

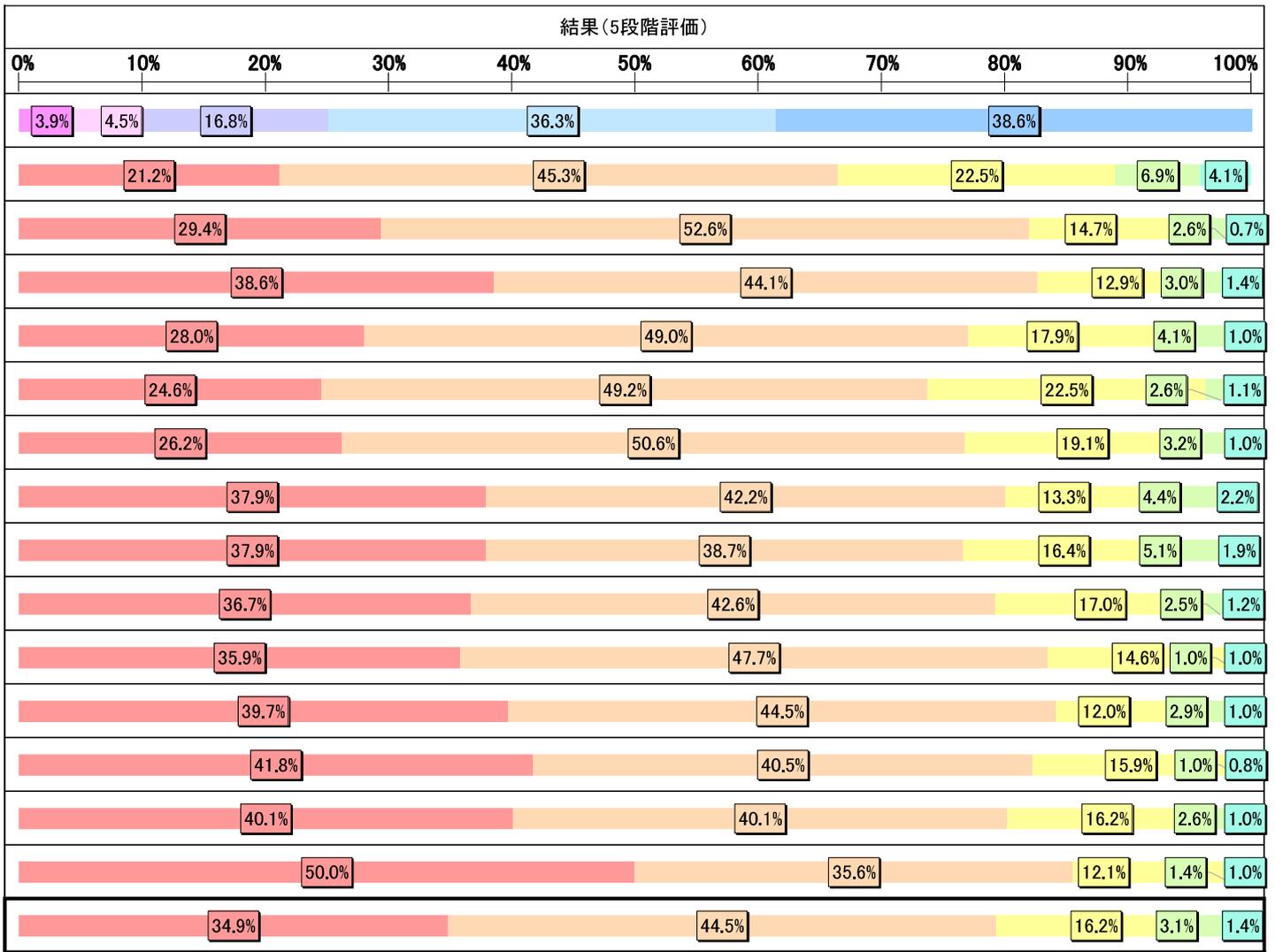
回答率：31.1%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価			4.0	4.0

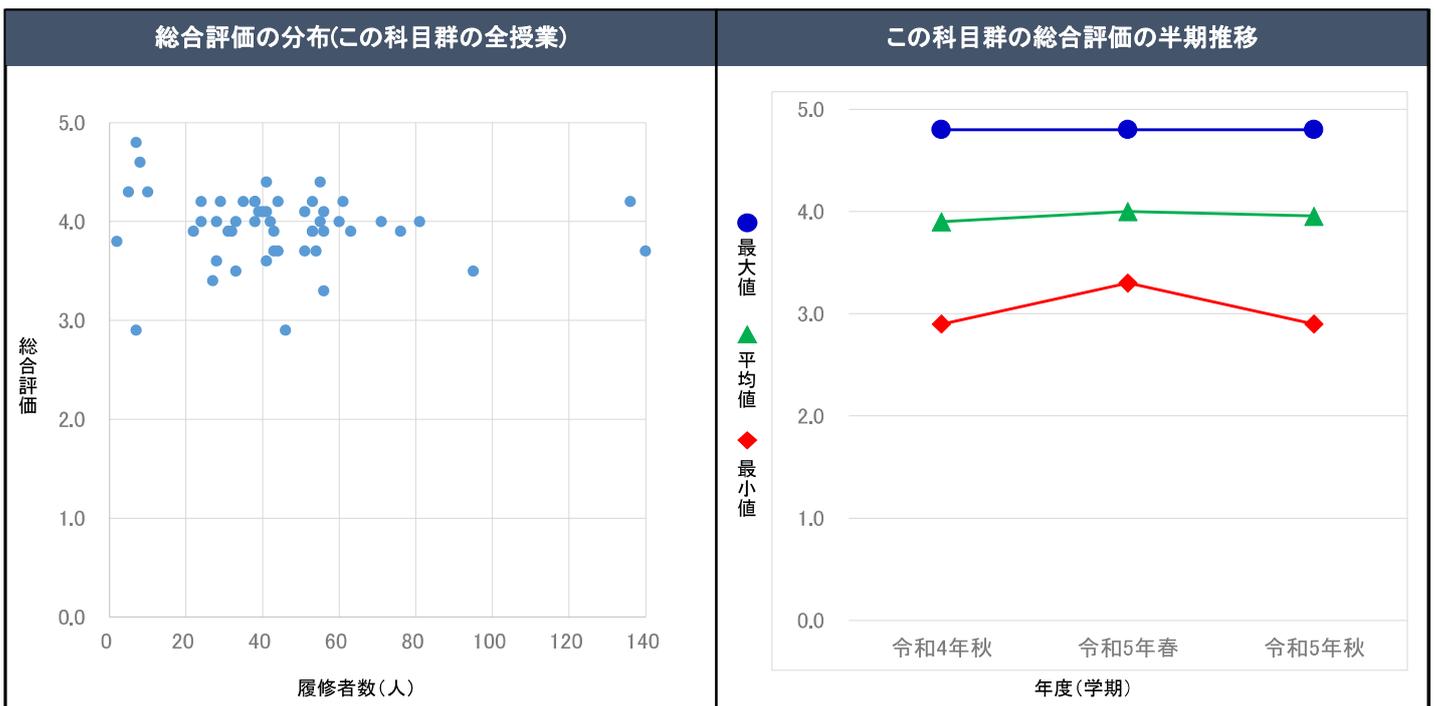
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 社会科学科目群

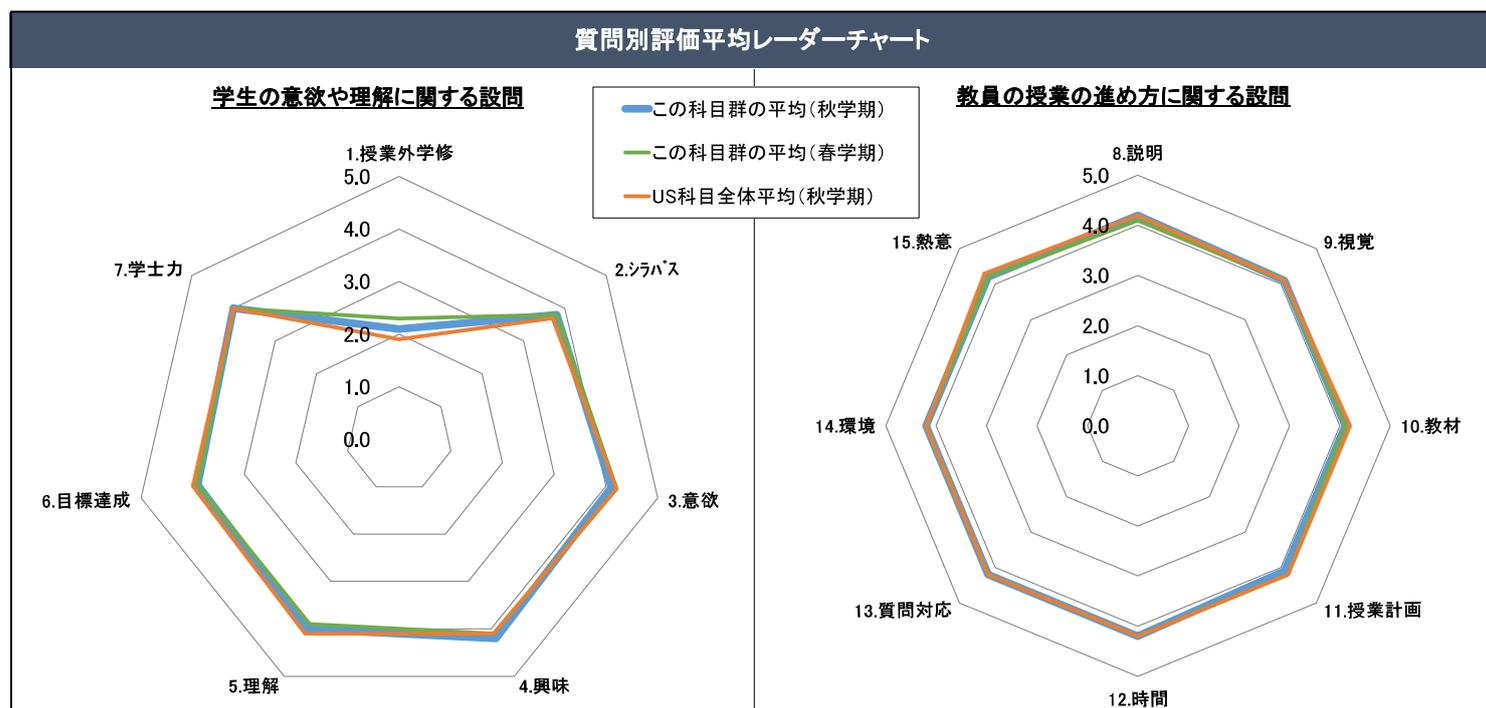
履修者数：1,945名

回答者数：575名

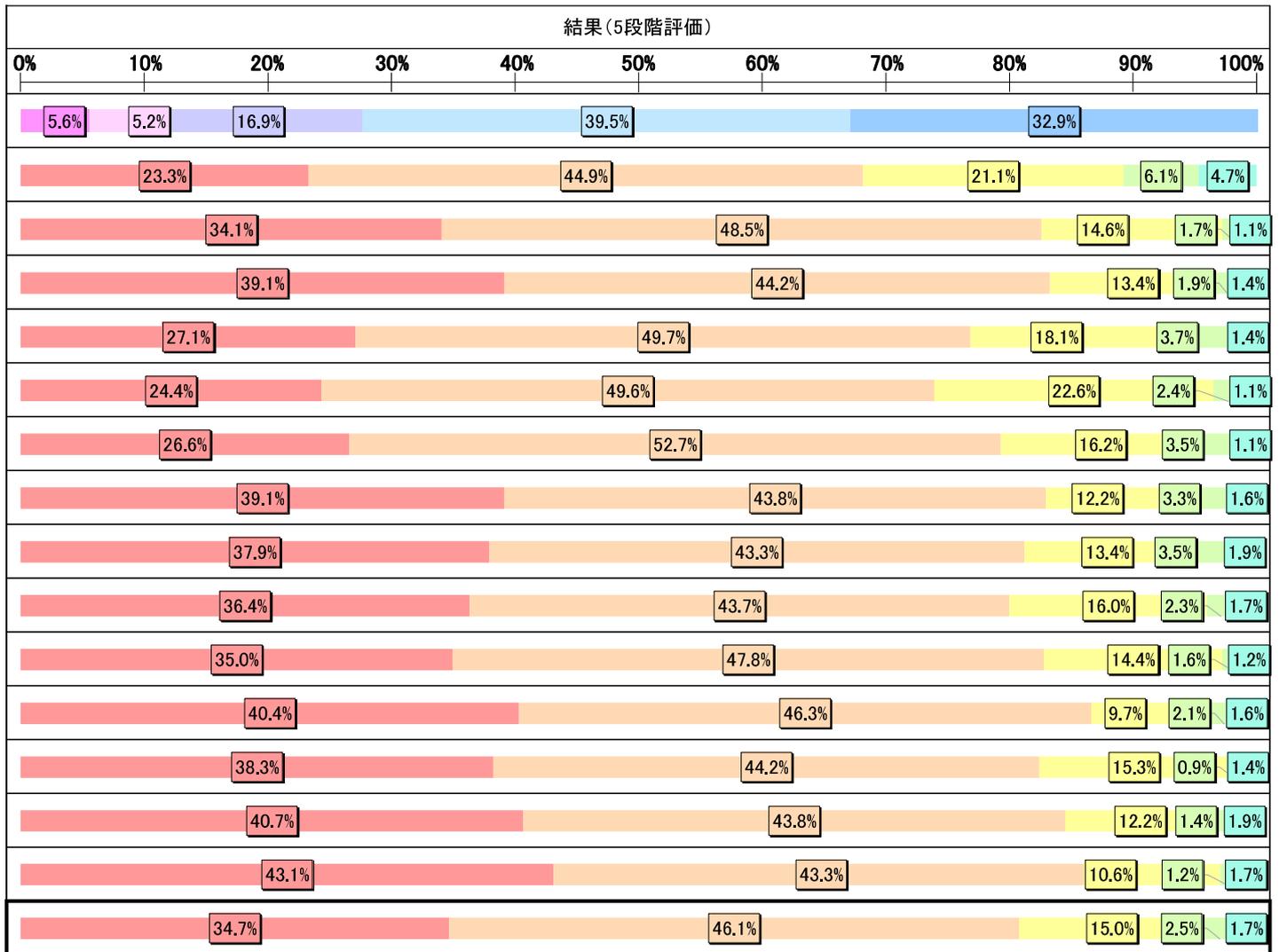
回答率：29.6%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価			4.0	4.0

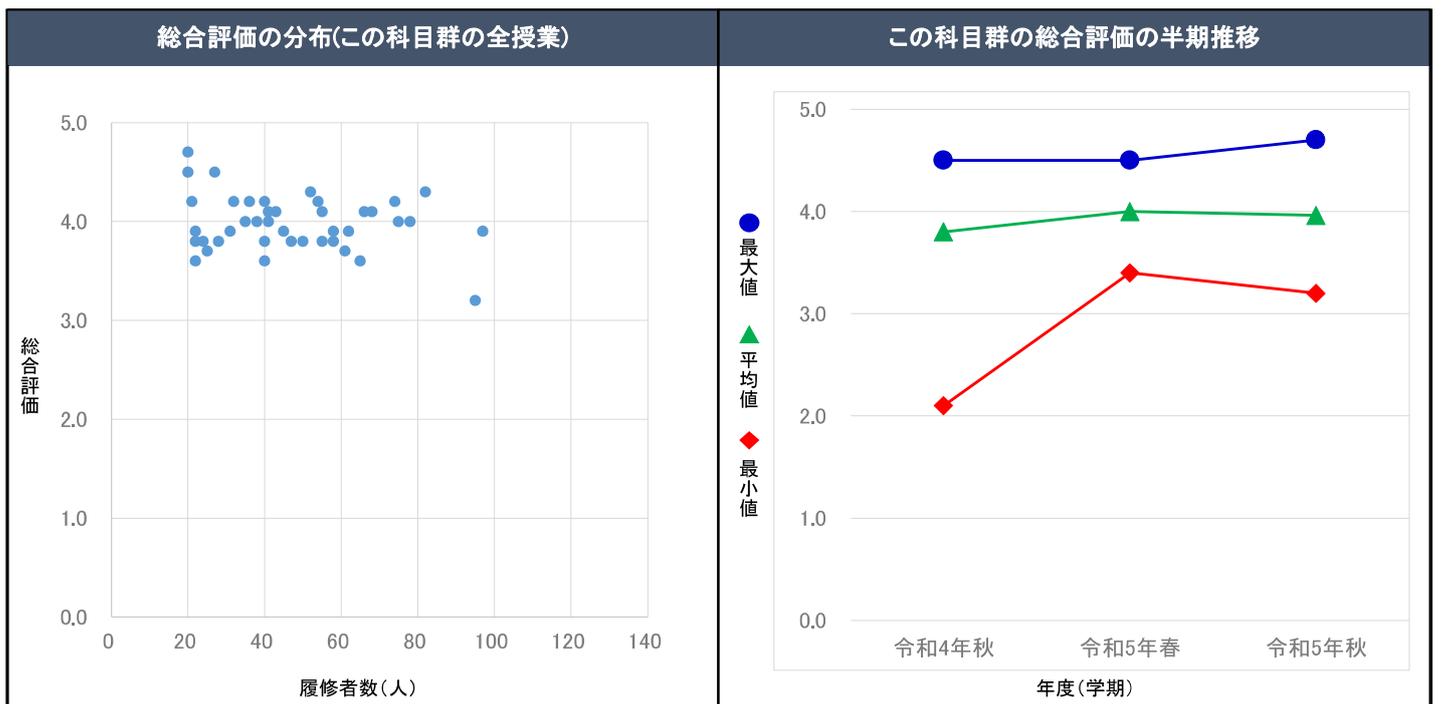
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 自然科学科目群

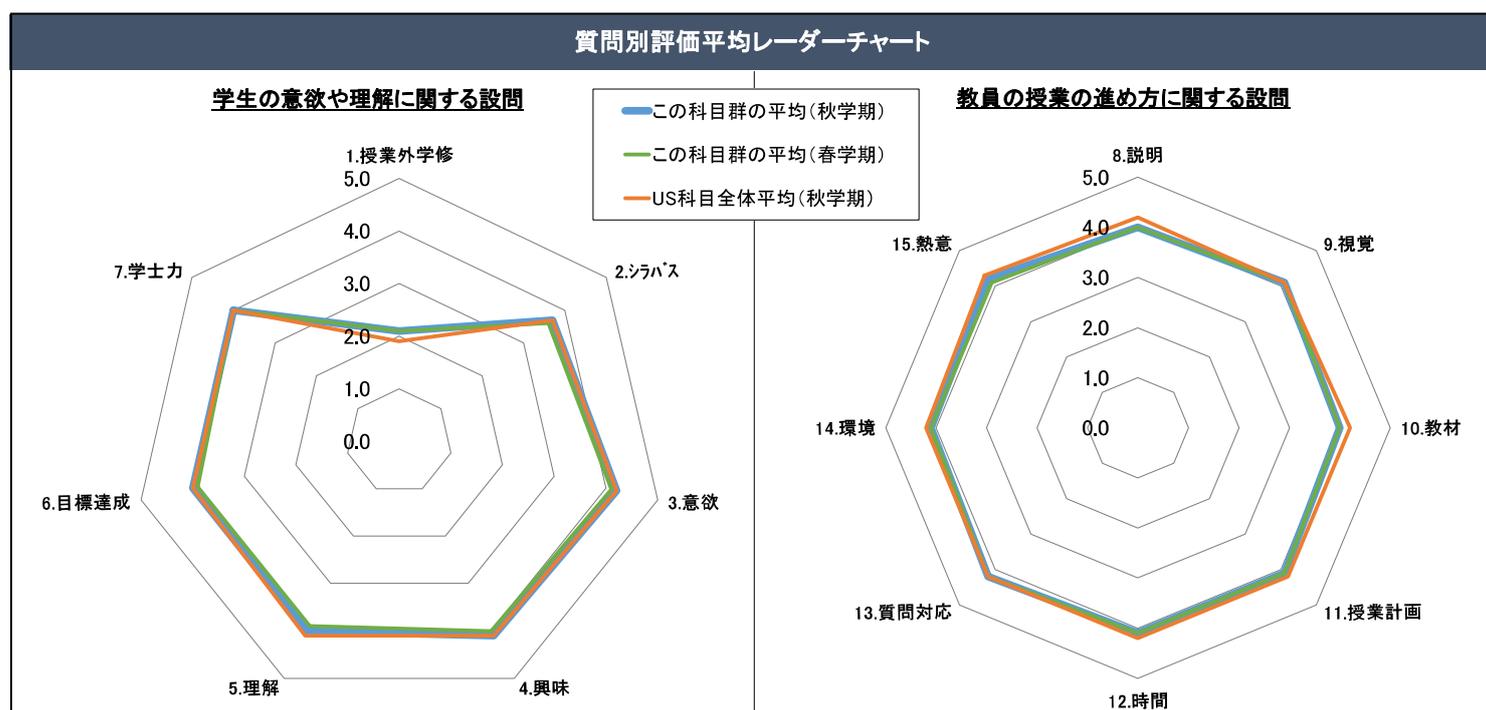
履修者数：1,788名

回答者数：777名

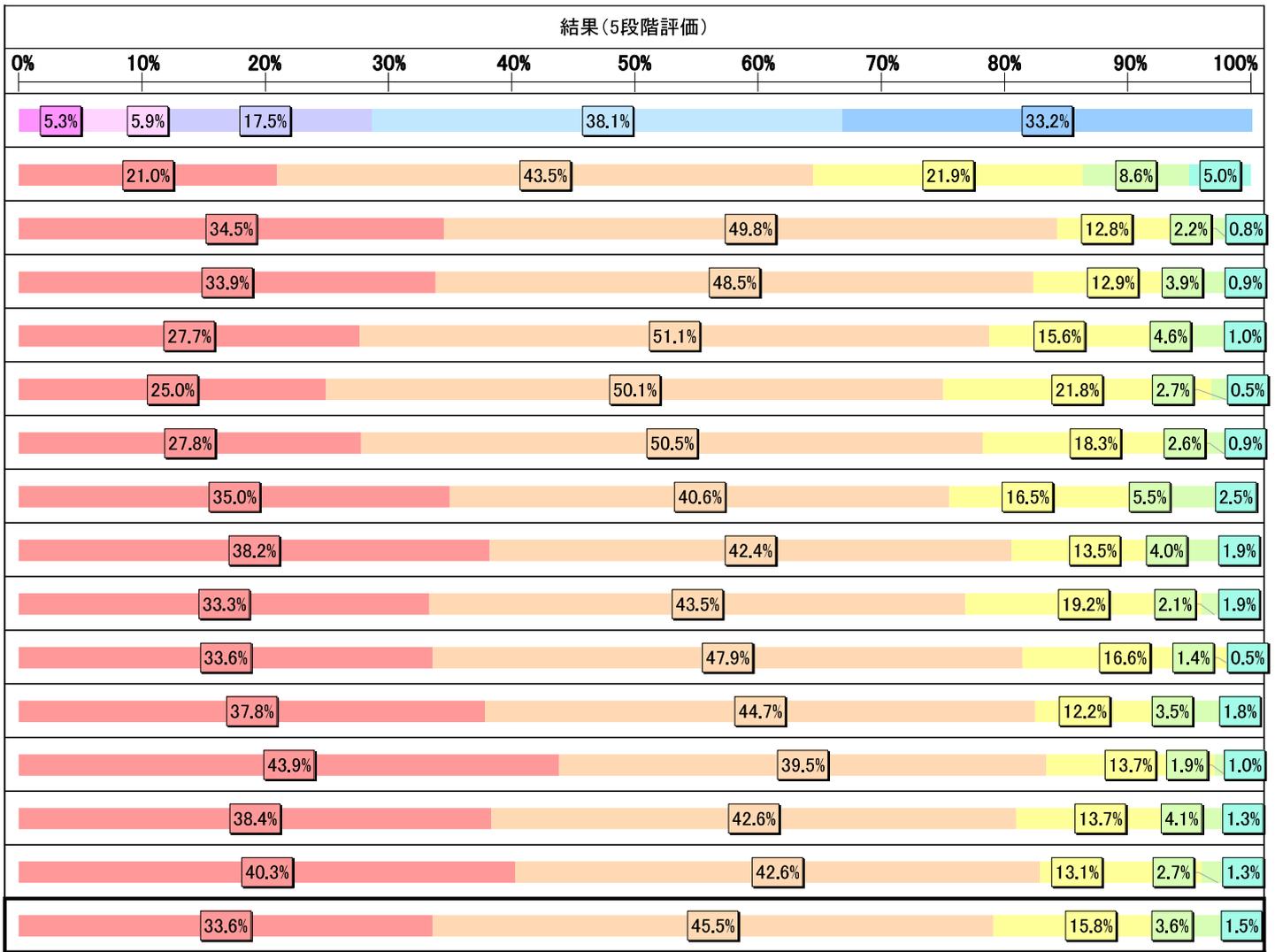
回答率：43.5%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.0	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価			3.9	4.0

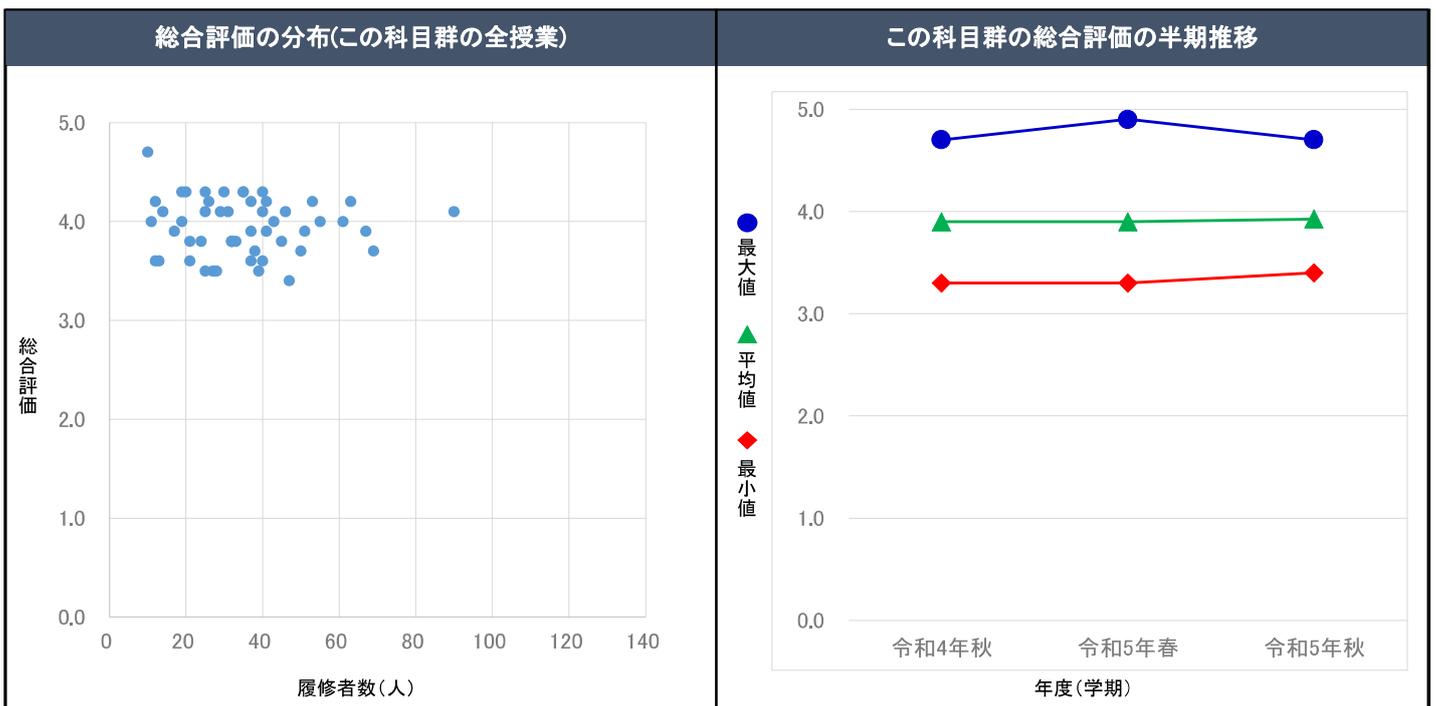
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 学際科目群

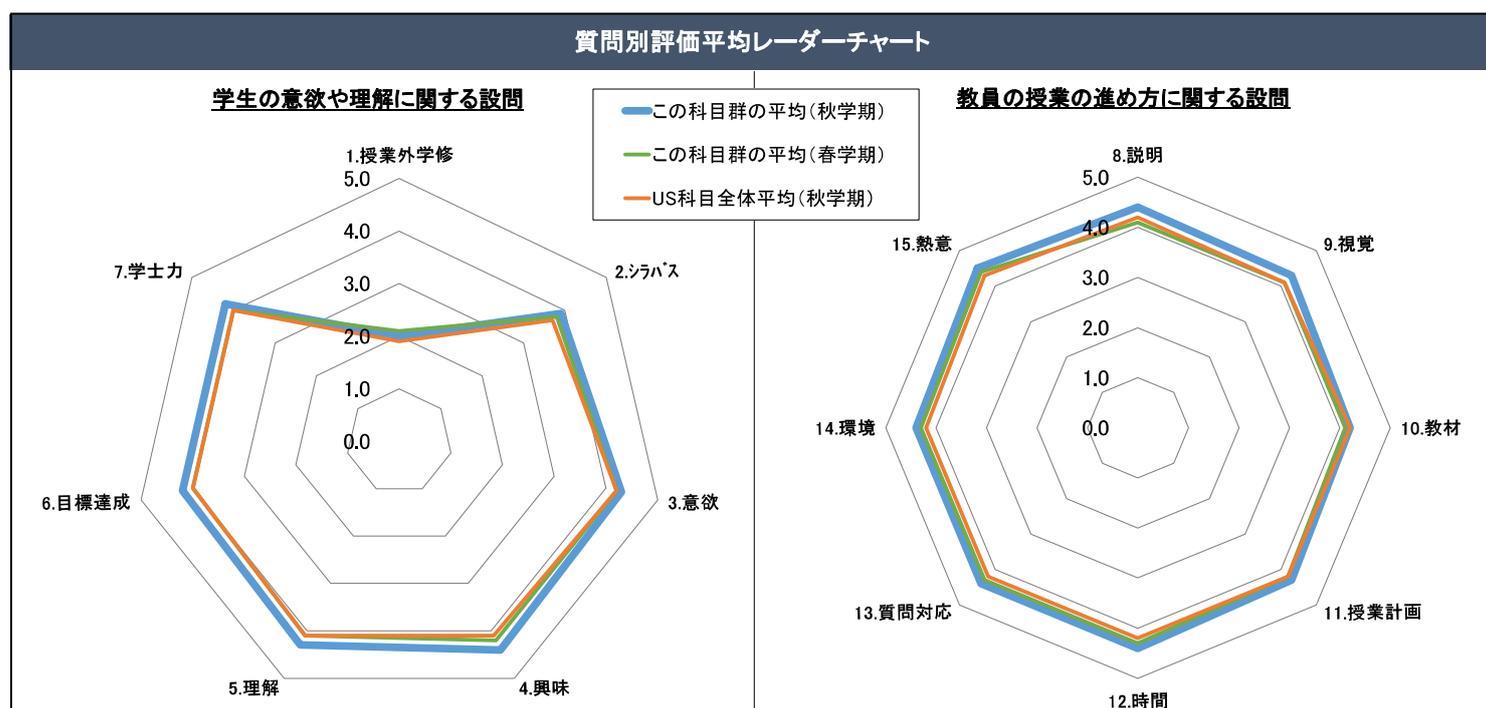
履修者数：1,549名

回答者数：420名

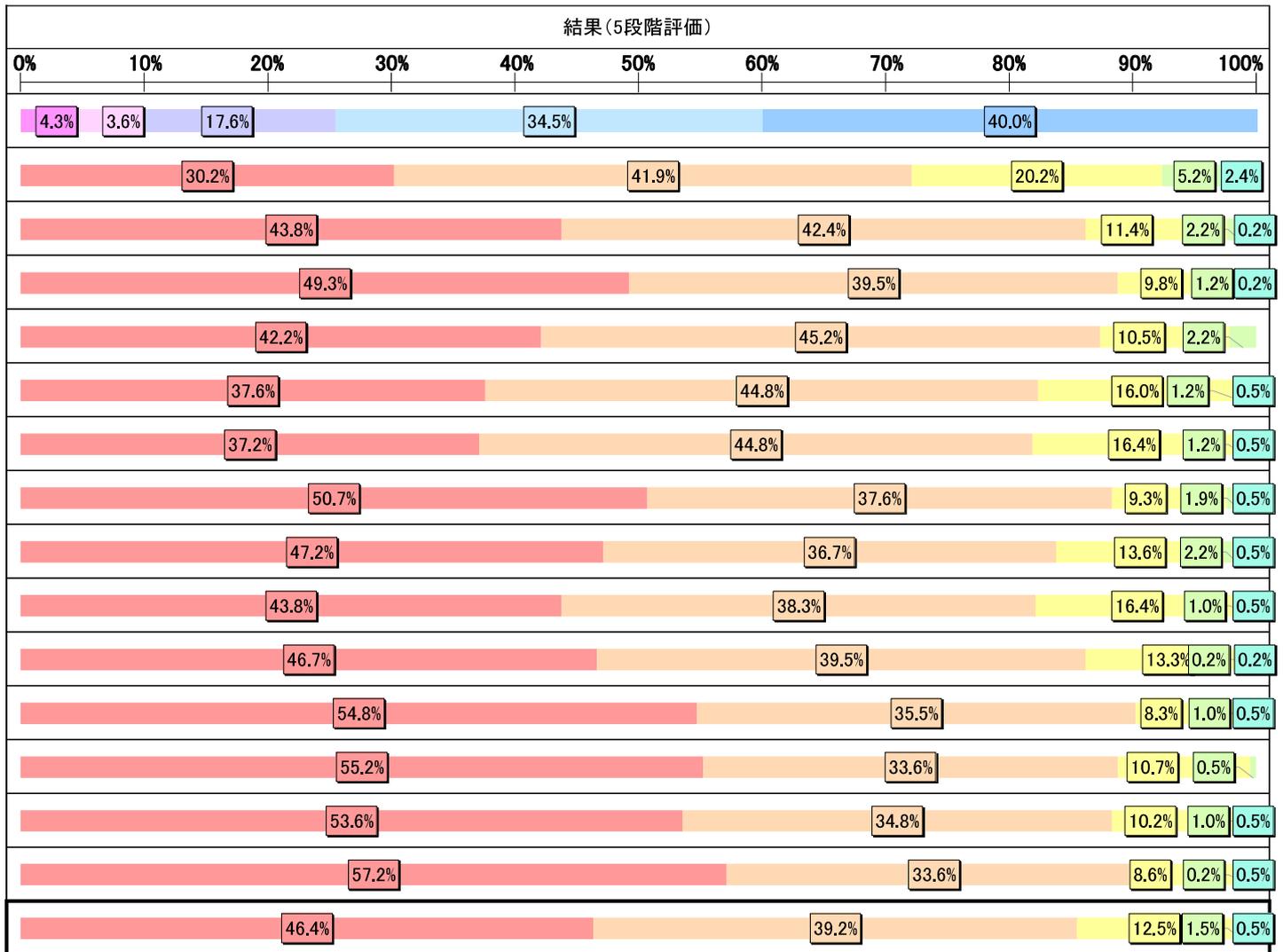
回答率：27.1%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.9	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.4	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.3	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.2	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.2	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.4	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.3	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.4	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.4	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.5	4.3
総合評価			4.1	4.0

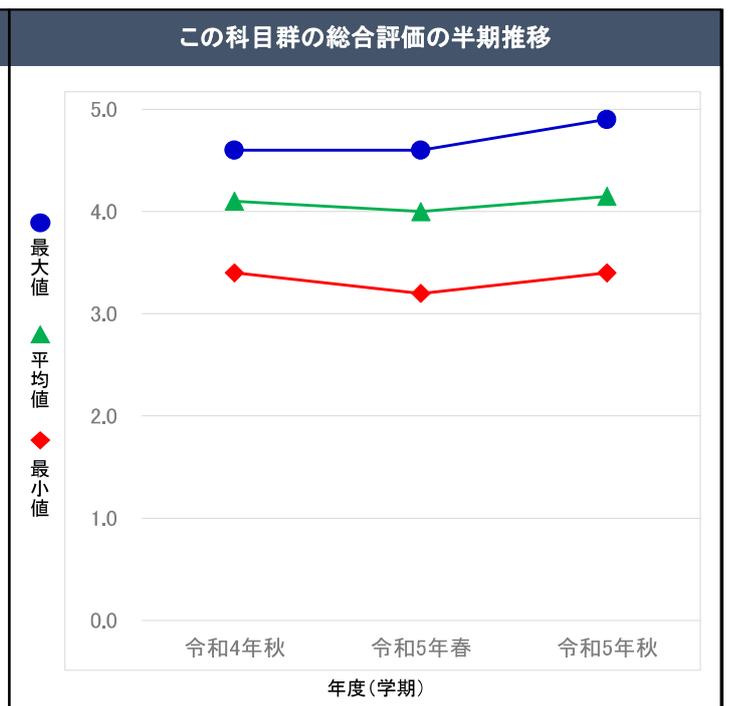
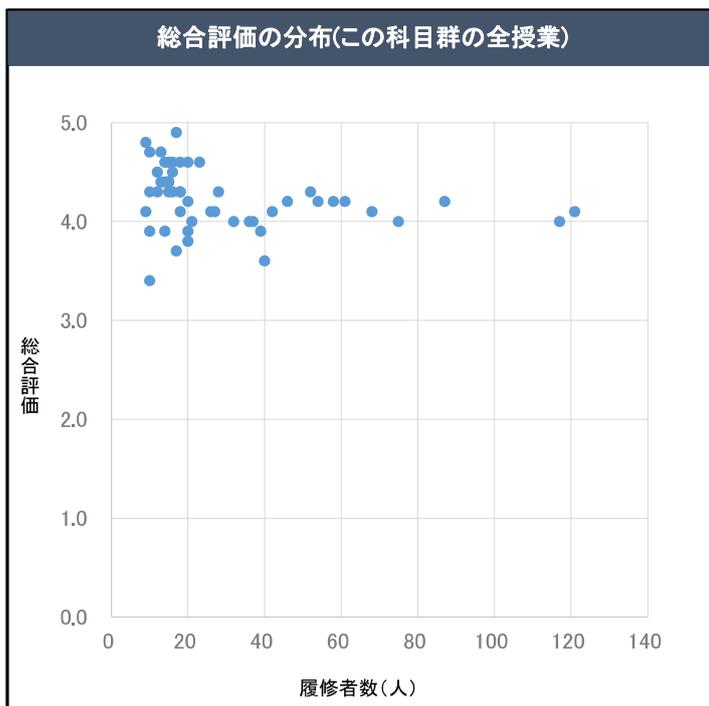
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 言語表現科目群

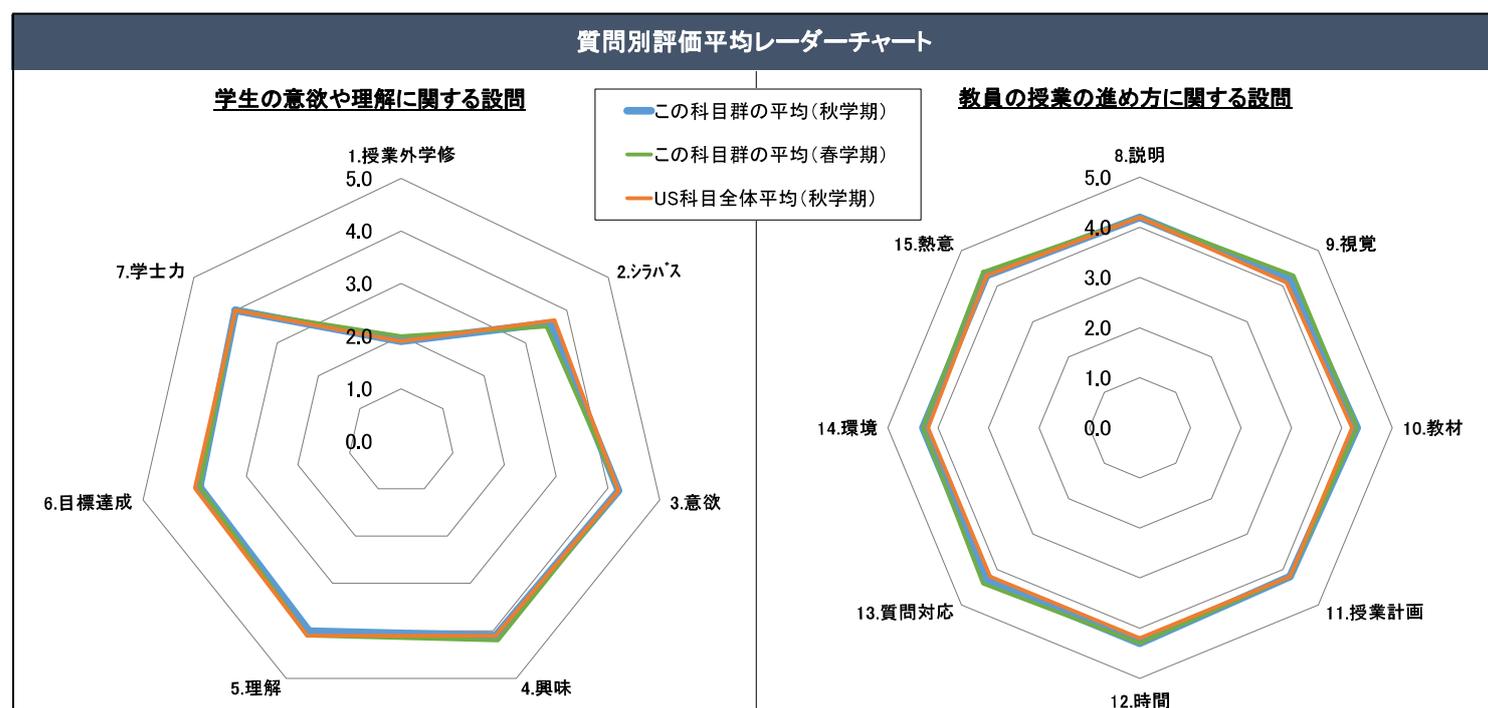
履修者数：3,157名

回答者数：1,459名

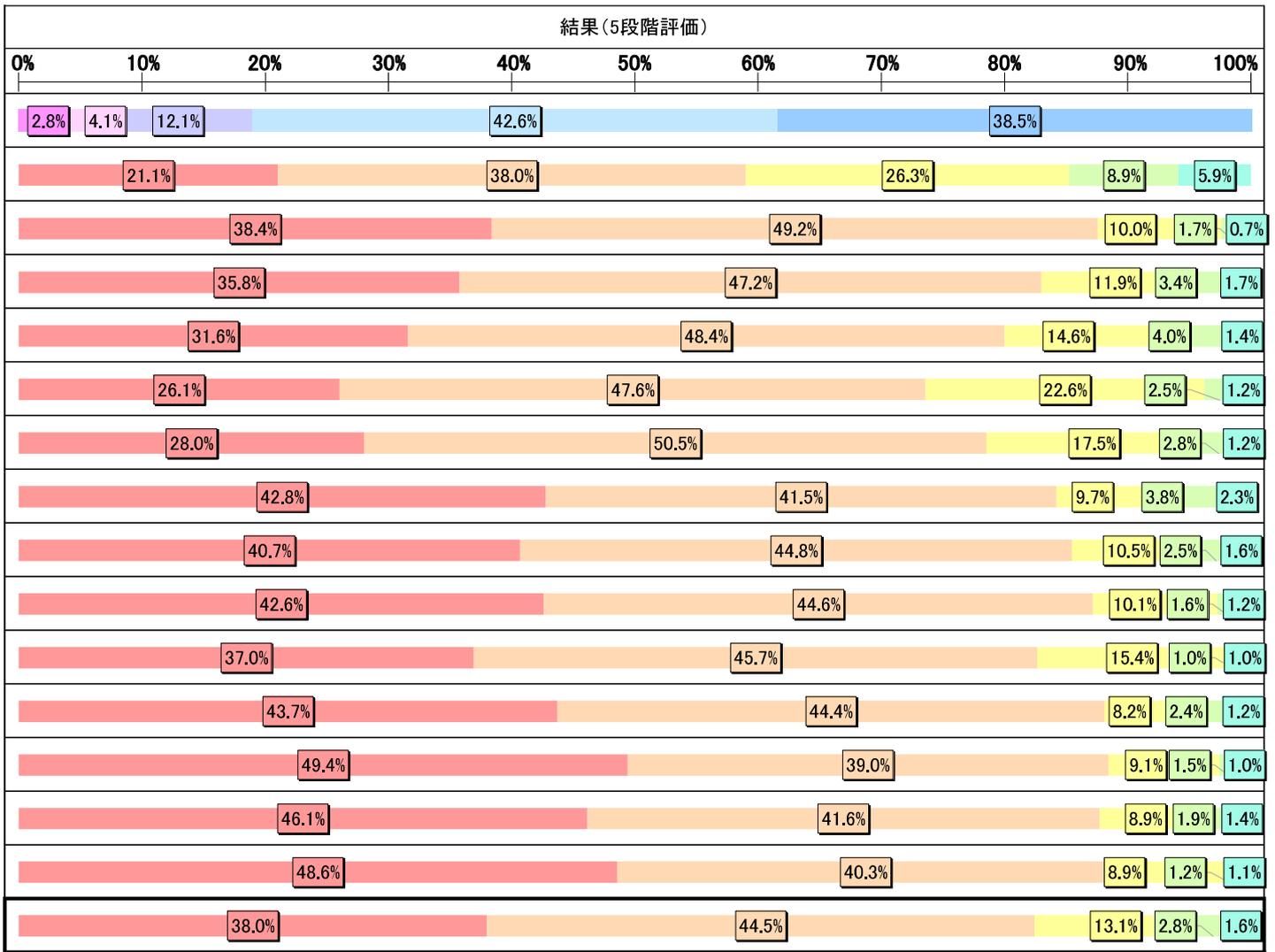
回答率：46.2%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.3	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価			4.0	4.0

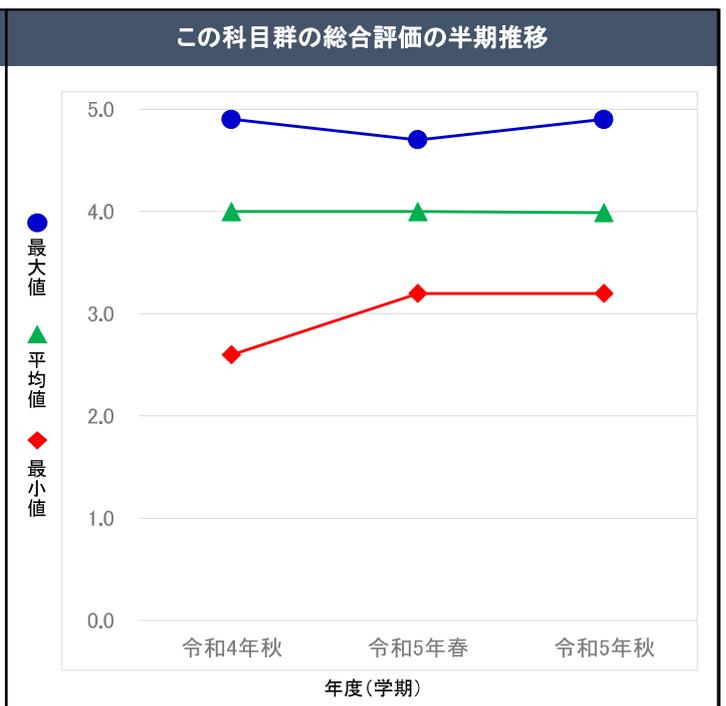
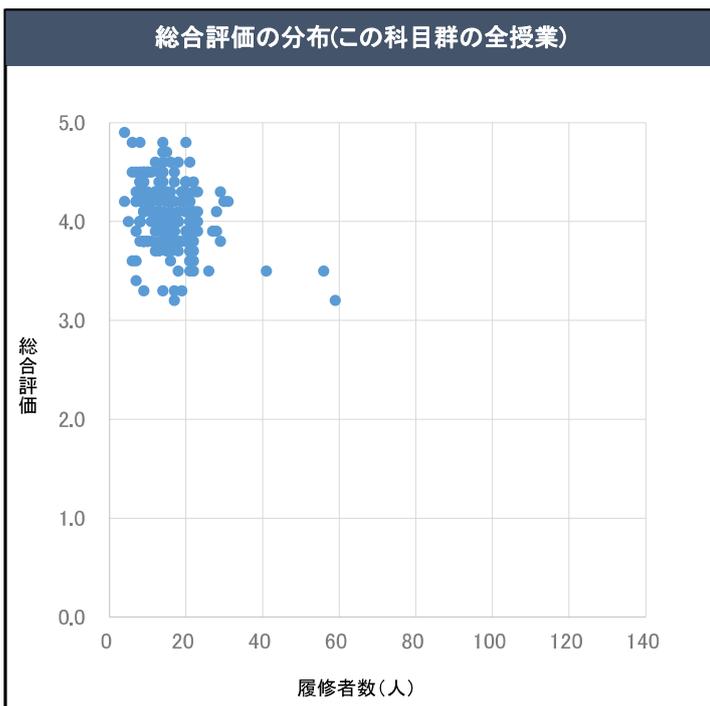
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 教職関連科目群

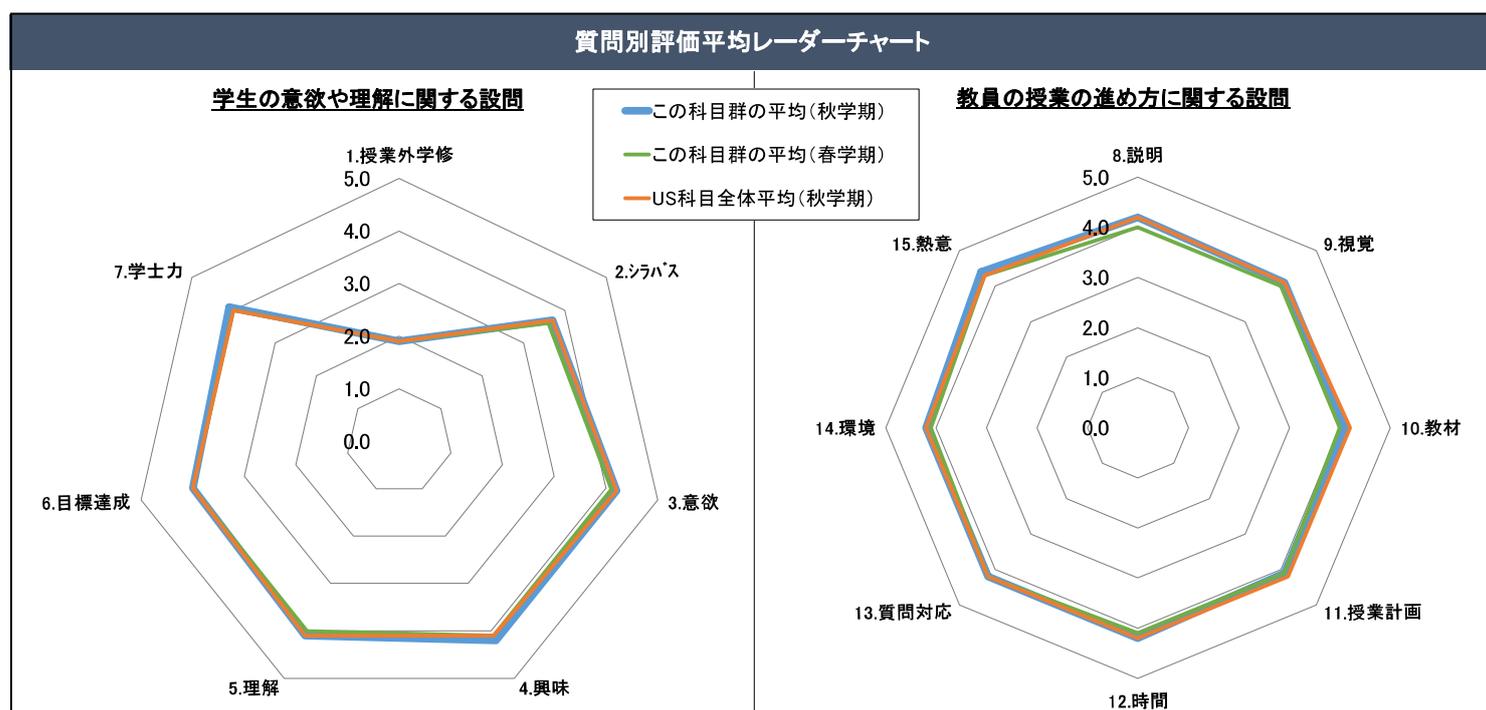
履修者数：1,987名

回答者数：695名

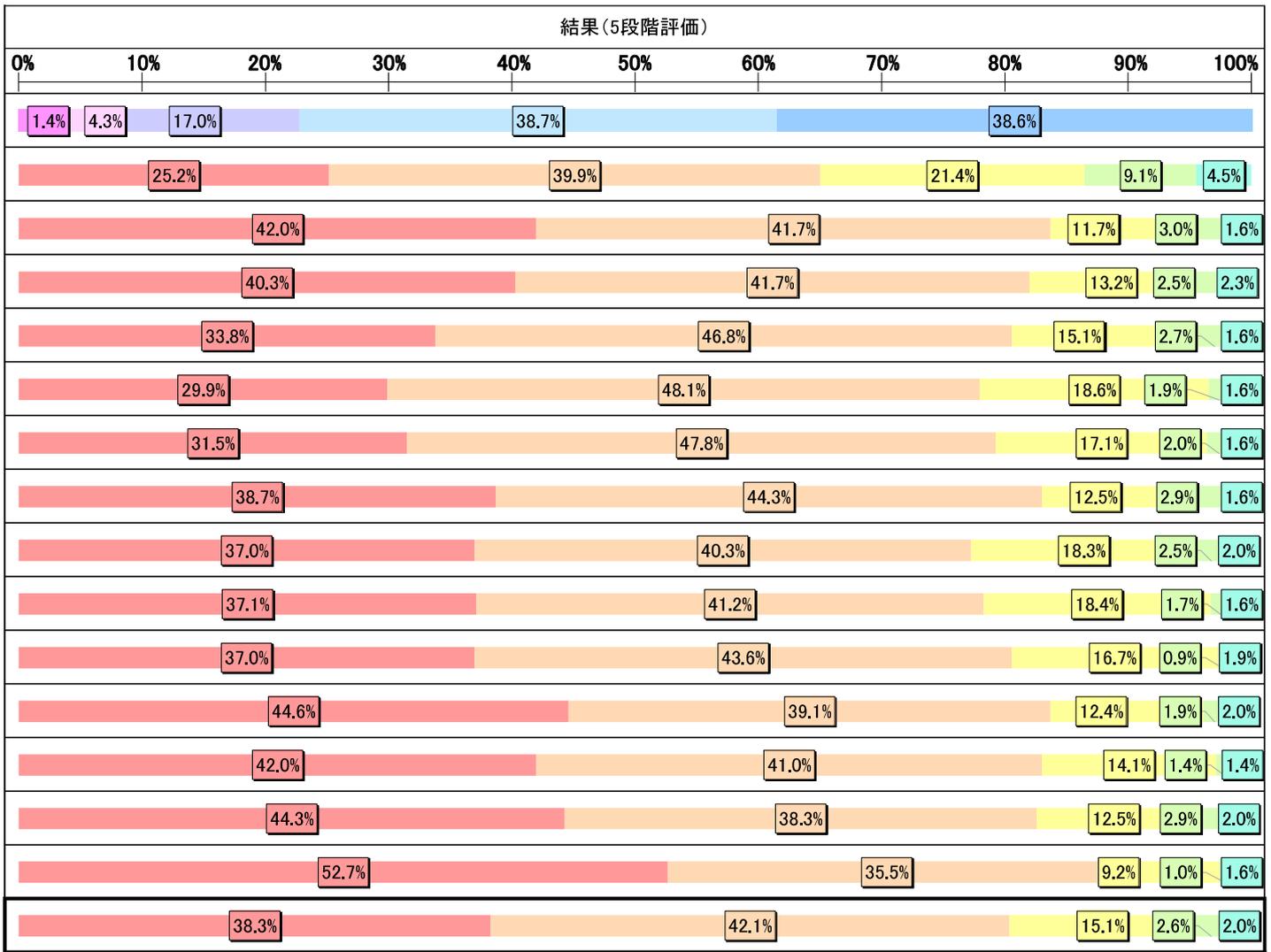
回答率：35.0%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.0	4.0

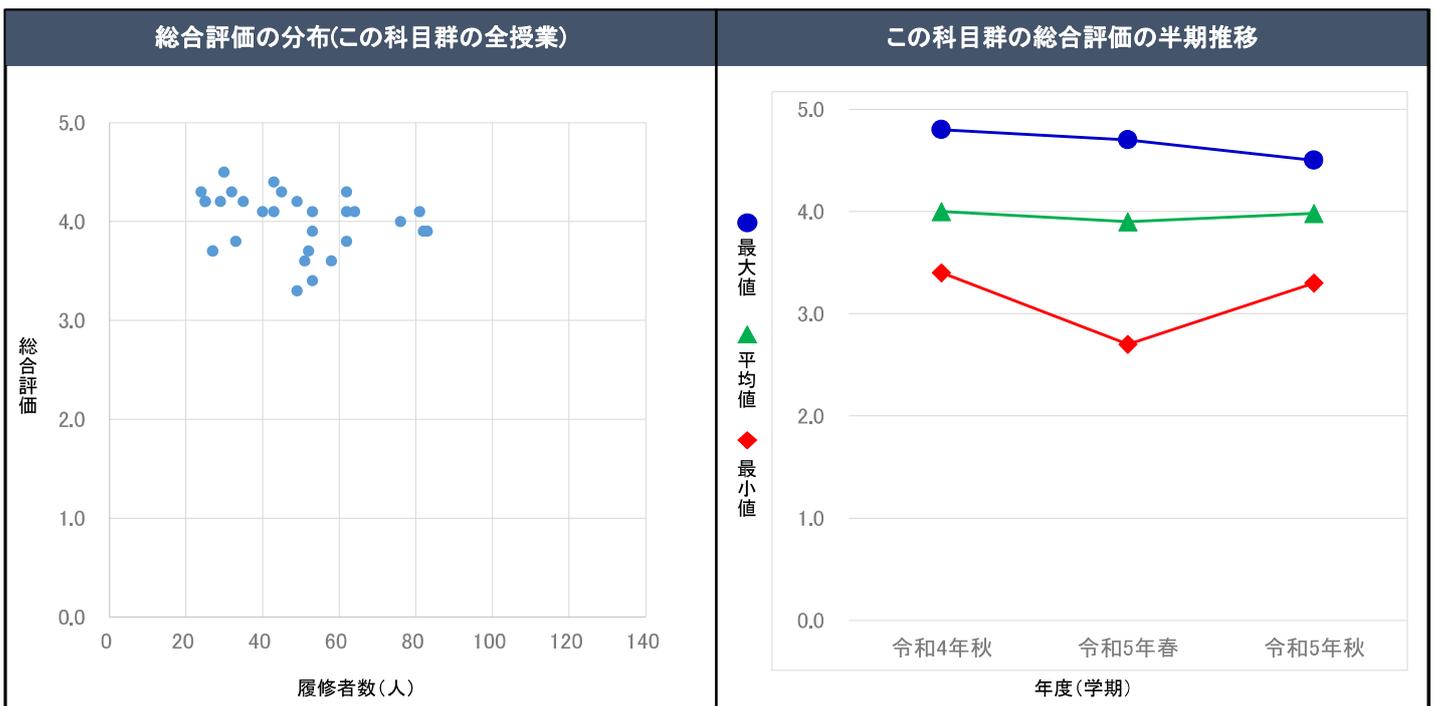
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 資格関連科目群

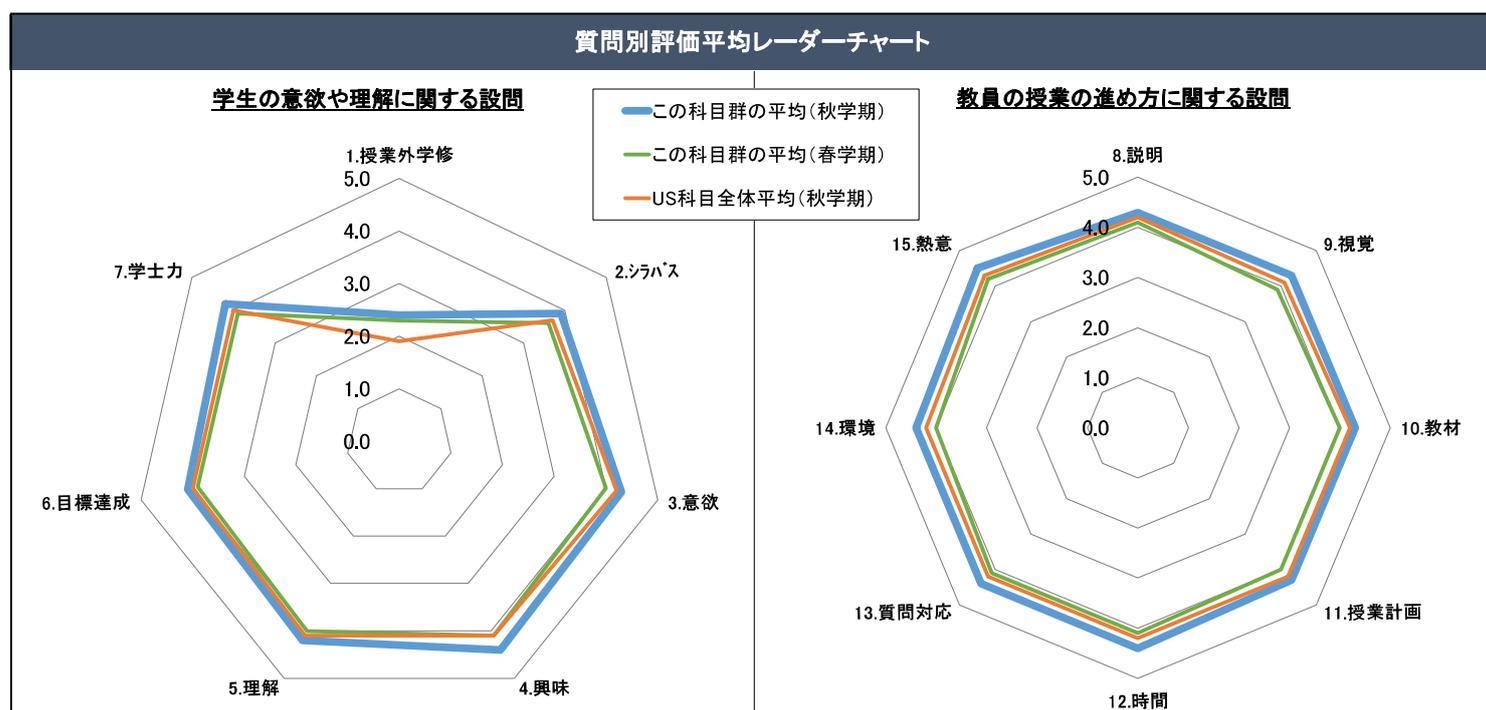
履修者数： 650名

回答者数： 191名

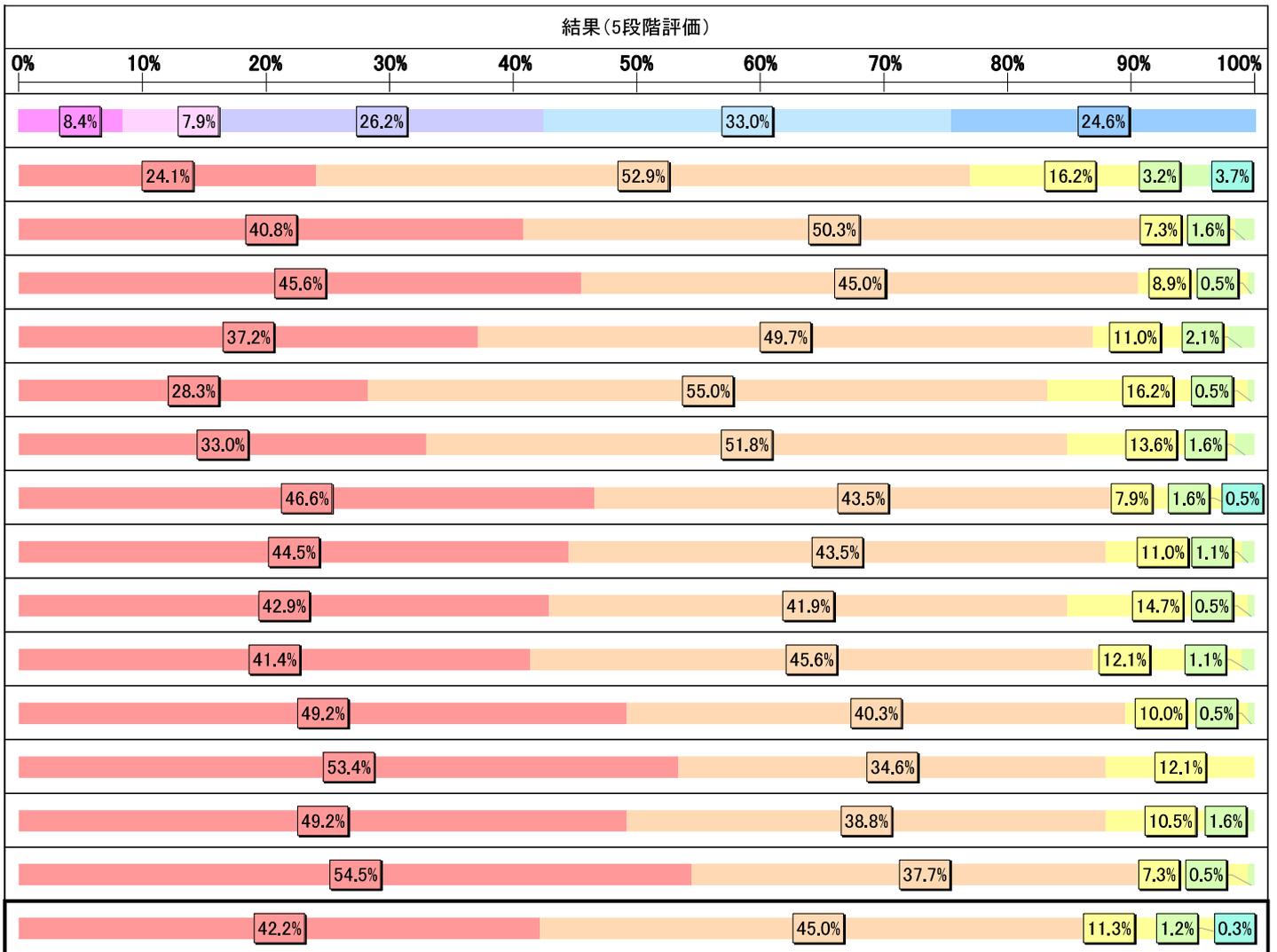
回答率： 29.4%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.4	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.9	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.4	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.2	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.1	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.2	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3	4.1
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.3	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.3	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.4	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.2
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.4	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.5	4.3
総合評価			4.2	4.0

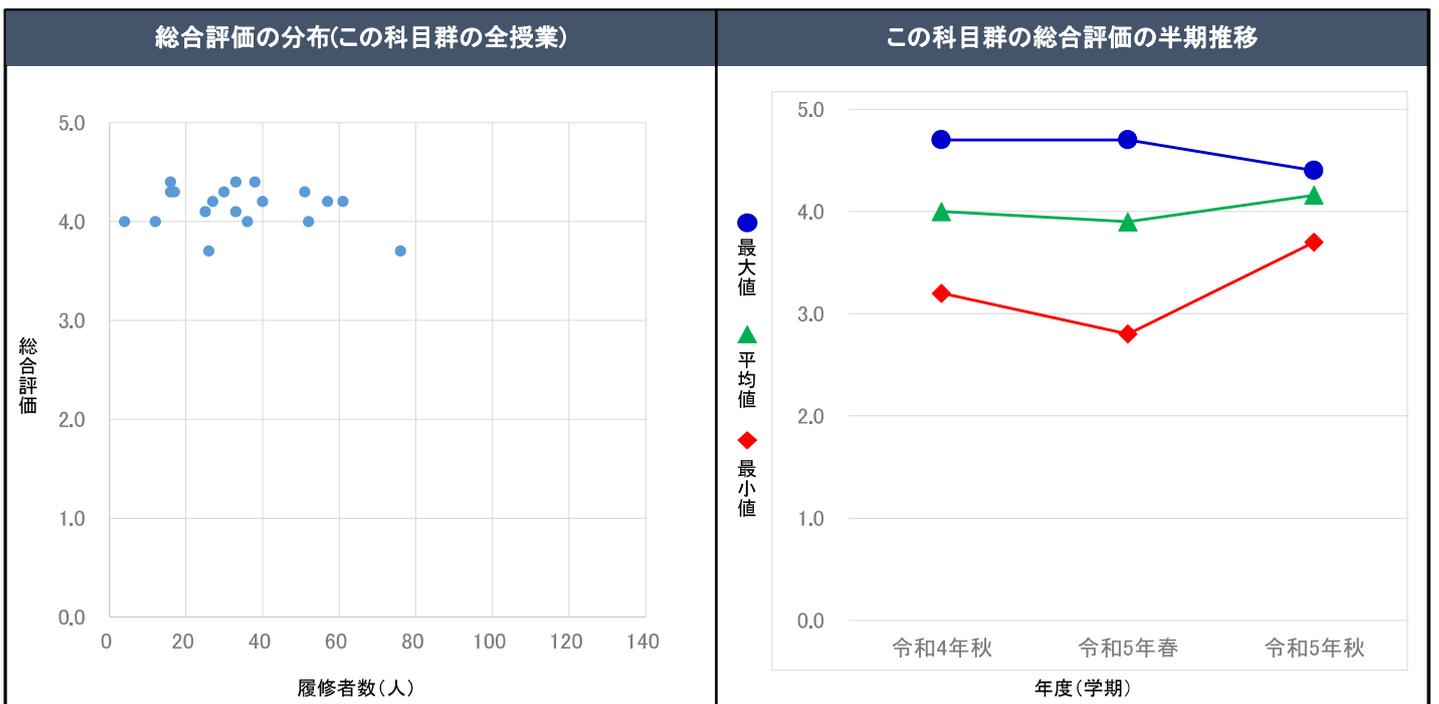
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



授業アンケート一覧 > **授業アンケート結果参照**

[戻る](#)

期間：2024/02/20（火）09:00～2024/02/26（月）23:59

対象者数(延べ数)：196人 回答者数(延べ数)：62人 回答率 31.6%

**2023\_授業アンケート【ウィンターセッションⅠ期】①**

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

**あなたの意欲や理解について**

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
4時間以上		1.6%	1人
3時間～4時間未満		3.2%	2人
2時間～3時間未満		22.6%	14人
1時間～2時間未満		48.4%	30人
1時間未満		24.2%	15人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		25.8%	16人
そう思う		50.0%	31人
どちらともいえない		14.5%	9人
そう思わない		8.1%	5人
全くそう思わない		1.6%	1人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		62.9%	39人
そう思う		30.6%	19人
どちらともいえない		6.5%	4人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人
4. 授業の内容に興味は持てましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		59.7%	37人
そう思う		30.6%	19人
どちらともいえない		8.1%	5人
そう思わない		1.6%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		43.5%	27人
そう思う		41.9%	26人
どちらともいえない		12.9%	8人
そう思わない		1.6%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		40.3%	25人
そう思う		45.2%	28人
どちらともいえない		12.9%	8人
そう思わない		1.6%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載 <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		48.4%	30人
そう思う		40.3%	25人
どちらともいえない		8.1%	5人
そう思わない		3.2%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人

## 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		54.8%	34人
そう思う		30.6%	19人
どちらともいえない		12.9%	8人
そう思わない		1.6%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		53.2%	33人
そう思う		35.5%	22人
どちらともいえない		9.7%	6人
そう思わない		1.6%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		51.6%	32人
そう思う		35.5%	22人
どちらともいえない		9.7%	6人
そう思わない		3.2%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		43.5%	27人
そう思う		40.3%	25人
どちらともいえない		12.9%	8人
そう思わない		1.6%	1人
全くそう思わない		1.6%	1人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		58.1%	36人
そう思う		27.4%	17人
どちらともいえない		14.5%	9人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		56.5%	35人
そう思う		32.3%	20人
どちらともいえない		6.5%	4人
そう思わない		3.2%	2人
全くそう思わない		1.6%	1人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		58.1%	36人
そう思う		29.0%	18人
どちらともいえない		11.3%	7人
そう思わない		1.6%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		59.7%	37人
そう思う		30.6%	19人
どちらともいえない		4.8%	3人
そう思わない		1.6%	1人
全くそう思わない		3.2%	2人

## 自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。

なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

授業アンケート一覧 &gt; 授業アンケート結果参照

戻る

期間：2024/02/26（月）11:00～2024/03/03（日）23:59

対象者数(延べ数)：91人 回答者数(延べ数)：57人 回答率 62.6%

## 2023\_授業アンケート【ウインターセッションⅠ期】②

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。

入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。

なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

## あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）	比率	人数
4時間以上	5.3%	3人
3時間～4時間未満	3.5%	2人
2時間～3時間未満	28.1%	16人
1時間～2時間未満	49.1%	28人
1時間未満	14.0%	8人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	26.3%	15人
そう思う	42.1%	24人
どちらともいえない	22.8%	13人
そう思わない	3.5%	2人
全くそう思わない	5.3%	3人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	36.8%	21人
そう思う	56.1%	32人
どちらともいえない	7.0%	4人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	47.4%	27人
そう思う	42.1%	24人
どちらともいえない	8.8%	5人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	1.8%	1人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	29.8%	17人
そう思う	57.9%	33人
どちらともいえない	12.3%	7人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	26.3%	15人
そう思う	56.1%	32人
どちらともいえない	17.5%	10人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）	比率	人数
とてもそう思う	24.6%	14人
そう思う	57.9%	33人
どちらともいえない	15.8%	9人
そう思わない	1.8%	1人
全くそう思わない	0.0%	0人

教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		38.6%	22人
そう思う		52.6%	30人
どちらともいえない		7.0%	4人
そう思わない		1.8%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		45.6%	26人
そう思う		45.6%	26人
どちらともいえない		7.0%	4人
そう思わない		1.8%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		38.6%	22人
そう思う		42.1%	24人
どちらともいえない		19.3%	11人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		45.6%	26人
そう思う		45.6%	26人
どちらともいえない		8.8%	5人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		49.1%	28人
そう思う		45.6%	26人
どちらともいえない		5.3%	3人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		49.1%	28人
そう思う		42.1%	24人
どちらともいえない		8.8%	5人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		45.6%	26人
そう思う		40.4%	23人
どちらともいえない		12.3%	7人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		1.8%	1人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		49.1%	28人
そう思う		40.4%	23人
どちらともいえない		7.0%	4人
そう思わない		1.8%	1人
全くそう思わない		1.8%	1人

自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。

なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

授業アンケート一覧 > **授業アンケート結果参照**

[戻る](#)

期間：2024/03/11（月）09:00～2024/03/17（日）23:59

対象者数(延べ数)：365人 回答者数(延べ数)：126人 回答率 34.5%

**2023\_授業アンケート【ウィンターセッションⅡ期】**

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

**あなたの意欲や理解について**

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
4時間以上		5.6%	7人
3時間～4時間未満		3.2%	4人
2時間～3時間未満		22.2%	28人
1時間～2時間未満		38.9%	49人
1時間未満		30.2%	38人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		33.3%	42人
そう思う		42.1%	53人
どちらともいえない		17.5%	22人
そう思わない		5.6%	7人
全くそう思わない		1.6%	2人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		55.6%	70人
そう思う		34.9%	44人
どちらともいえない		8.7%	11人
そう思わない		0.8%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
4. 授業の内容に興味は持てましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		48.4%	61人
そう思う		40.5%	51人
どちらともいえない		8.7%	11人
そう思わない		2.4%	3人
全くそう思わない		0.0%	0人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		44.4%	56人
そう思う		44.4%	56人
どちらともいえない		10.3%	13人
そう思わない		0.8%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか <b>(必須)</b>		比率	人数
とてもそう思う		39.7%	50人
そう思う		46.0%	58人
どちらともいえない		13.5%	17人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.8%	1人
7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか <b>(必須)</b>		比率	人数
* 各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載 <b>(必須)</b>			
とてもそう思う		42.1%	53人
そう思う		43.7%	55人
どちらともいえない		11.9%	15人
そう思わない		1.6%	2人
全くそう思わない		0.8%	1人

## 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		54.0%	68人
そう思う		34.9%	44人
どちらともいえない		7.9%	10人
そう思わない		2.4%	3人
全くそう思わない		0.8%	1人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		51.6%	65人
そう思う		36.5%	46人
どちらともいえない		8.7%	11人
そう思わない		2.4%	3人
全くそう思わない		0.8%	1人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		54.0%	68人
そう思う		35.7%	45人
どちらともいえない		7.1%	9人
そう思わない		2.4%	3人
全くそう思わない		0.8%	1人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		49.2%	62人
そう思う		39.7%	50人
どちらともいえない		10.3%	13人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.8%	1人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		54.0%	68人
そう思う		37.3%	47人
どちらともいえない		7.1%	9人
そう思わない		0.8%	1人
全くそう思わない		0.8%	1人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		57.1%	72人
そう思う		32.5%	41人
どちらともいえない		8.7%	11人
そう思わない		1.6%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		54.8%	69人
そう思う		33.3%	42人
どちらともいえない		9.5%	12人
そう思わない		1.6%	2人
全くそう思わない		0.8%	1人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		58.7%	74人
そう思う		34.9%	44人
どちらともいえない		6.3%	8人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人

## 自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。

なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

授業アンケート一覧 &gt; 授業アンケート結果参照

戻る

期間：2024/03/25（月）09:00～2024/03/31（日）23:59

対象者数(延べ数)：114人 回答者数(延べ数)：24人 回答率 21.1%

## 2023\_授業アンケート【ウィンターセッションⅢ期】

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。

なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

## あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）	比率	人数
4時間以上	0.0%	0人
3時間～4時間未満	0.0%	0人
2時間～3時間未満	25.0%	6人
1時間～2時間未満	54.2%	13人
1時間未満	20.8%	5人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	29.2%	7人
そう思う	33.3%	8人
どちらともいえない	29.2%	7人
そう思わない	8.3%	2人
全くそう思わない	0.0%	0人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	75.0%	18人
そう思う	20.8%	5人
どちらともいえない	4.2%	1人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	70.8%	17人
そう思う	25.0%	6人
どちらともいえない	4.2%	1人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	54.2%	13人
そう思う	37.5%	9人
どちらともいえない	8.3%	2人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）	比率	人数
とてもそう思う	54.2%	13人
そう思う	20.8%	5人
どちらともいえない	25.0%	6人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
7. 総合的にみてこの授業で学力が身につきましたか *各授業の学力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）	比率	人数
とてもそう思う	62.5%	15人
そう思う	25.0%	6人
どちらともいえない	12.5%	3人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人

教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)	比率	人数
とてもそう思う	66.7%	16人
そう思う	29.2%	7人
どちらともいえない	4.2%	1人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)	比率	人数
とてもそう思う	58.3%	14人
そう思う	29.2%	7人
どちらともいえない	12.5%	3人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)	比率	人数
とてもそう思う	62.5%	15人
そう思う	25.0%	6人
どちらともいえない	12.5%	3人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)	比率	人数
とてもそう思う	50.0%	12人
そう思う	29.2%	7人
どちらともいえない	20.8%	5人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)	比率	人数
とてもそう思う	70.8%	17人
そう思う	16.7%	4人
どちらともいえない	12.5%	3人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)	比率	人数
とてもそう思う	75.0%	18人
そう思う	16.7%	4人
どちらともいえない	8.3%	2人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)	比率	人数
とてもそう思う	70.8%	17人
そう思う	16.7%	4人
どちらともいえない	12.5%	3人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)	比率	人数
とてもそう思う	79.2%	19人
そう思う	12.5%	3人
どちらともいえない	8.3%	2人
そう思わない	0.0%	0人
全くそう思わない	0.0%	0人

自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。  
特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。  
なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。  
ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

## Ⅱ 大学院 FD 活動報告

### <文学研究科>

#### (1) 講演会・研修会・ワークショップなど

FD 活動計画のとおり、文学研究科の修了生および現役の大学院生に対して、「大学院での学修はどのように役に立っているか」と題したインタビュー調査を行い、文学研究科のカリキュラム等の改善のための資料を得ることを試みた。哲学専攻の修了生 1 名と英語教育専攻の修了生 2 名に対して、オンラインミーティング (Teams) でのインタビューを行った。インタビューの中では、主として以下のような質問を行った。

- ・修士課程在籍中には何を学んだと感じているか。
- ・現在の職業において修士課程での学びが役立っている点はあるか。
- ・修士課程在籍中に、これは学んでおきたかったという点はあるか。
- ・修士課程在籍中に、学び以外の点で、この点をサポートしてほしい点はあるか。あるいはサポートがあつてよかったという点はあるか。
- ・職業生活以外で、修士課程での学びが役立っている点はあるか。

文学研究科の教員はインタビューに参加、または、後日録画動画を視聴した後に、次の項目について、各自がレポートを提出した。

- ・今後の大学院の授業で、新しく取り組みたいことや、より意識していきたいこと
- ・大学院のカリキュラム改編への案
- ・入学者を増やすための取り組みの案

これらの点について、インタビューを視聴した教員から、以下のような報告が見られた。

- ・学部生以上に大学院生は論文というアウトプットを求められる。しかし、インプットを積極的に行っていたインタビューを受けてくれた修了生でさえ、アウトプットを行うことには大きな段差を感じたとのことであった。学部生をみると本や論文を読まない学生が増えてきているため、つついインプットすることに指導の重点を置きがちである。しかし、インプットからアウトプットへとそのプロセスをつなぐ指導も重要であることを認識した。今後はインプットからアウトプットへとつなぐプロセスを支援する指導をしていきたい。
- ・今後の大学院の授業では、学生の興味関心を引き出すようなサポートをするとともに、研究の意義を明確にすることの重要性について考えさせていきたい。
- ・早い段階から修士論文を執筆する意義について意識させ、アウトプットする論文の形式・内容なども含めたモデルを院生に示しつつ、勉学に励むよう指導することを意識していきたい。

(英語教育専攻は、公立学校教員と私立学校教員各 1 名の修了生からインタビュー協力の承諾を得ているが、実施が 3 月末になるため、本 FD 活動報告に含めることができなかった。

両専攻のインタビューは Teams で全教員が視聴できるようにする予定である。)

また、カリキュラムや学生の研究指導などに関して、文学研究科の教員が集まって実践や意見を交換し合う機会（意見交換会）を以下のとおり、2回設定した。

- ・9月21日（木）13時30分～15時00分
- ・3月22日（金）13時30分～15時00分

この話し合いの中で確認した課題等を次年度以降に解決していく予定である。

## （2）調査・研究など

FD 活動計画のとおり、カリキュラム・授業改善のための基礎データ収集の目的で、修了生へのインタビューを行った。内容については、上記（1）で示したとおりである。

## （3）学会発表の成果の検証

今年度は、学生の学会参加が活発に行われた。在籍する6名のうち5名が「大学院学生学会発表・参加報告及び旅費助成申請書」を提出して、助成制度の適用を受けた。これは、全研究科で最も高い適用率である。8月には4名が全国英語教育学会（高松市）に参加、他大学の学生とも意見を交換することができた。規模の小さい本研究科の学生にとって、同じ分野の研究に携わる学生との交流は貴重な経験で、研究への意欲を高める効果があった。同じく8月には修士2年生1名が Asia TEFL（ソウル）で、12月には修士1年生が JAAL in JACET（東京）で、それぞれ研究発表を行った。この他、修士論文提出後の2年生が大学生英語教育論文合同発表会（ICET2024）で発表を行った。学会発表については、文学研究科ホームページに「活動報告」欄を設けて、学生の報告を掲載している。

このように、学会参加が活発に行われたことは今年度の大きな成果であり、中にはすでに令和6年度中の国際学会発表を目指して研究を進めている学生もいる。課題としては、本来学会終了後速やかに提出すべき助成申請書の提出が大幅に遅れたケースがあった。令和6年度はそのようなことがないよう、学生・教員ともに徹底をはかる必要がある。

## （4）学生による授業アンケート

FD 活動計画のとおり、学生による授業アンケートを行った。対象となった授業は文学研究科が提供しているすべての授業であった。全授業において、おおむね評価が高かった。「2. この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。」の項目について、平均値が他の項目と比べてやや低くなっている。これは例年の傾向であり、履修するすべての科目が各学生の研究課題と直接関係するわけではないことから、特に改善を要する点があると捉える必要はないと考えられる。履修者が少ない授業、特に履修者が1名の授業においては、回答した学生の匿名性が確保されないが、学生からは特にその点の指摘がなかったことから、今後も、すべての科目で同様のアンケートを実施する予定である。

今年度は、Bb 上にアンケートを掲示し、回答を得る方式をとった。次年度は、アンケートの配布時期を早め、授業期間終了直後として、学生が迅速に回答するように改善したい。

授業ごとの結果は以下の表のとおりだが、各授業における数値は、以下の4段階の尺度の（小数点第2位を四捨五入した）平均値である。

- 4 とても当てはまる    3 やや当てはまる  
 2 あまり当てはまらない    1 まったく当てはまらない

春学期		アカデミック・ リテラシー	英語教材論 研究	認知意味 論研究	応用言 語学研 究	英語教 育研究	研究指導 I
	回答者数	3名	4名	3名	3名	3名	1名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	3.7	4.0	4.0	3.3	4.0	4.0
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	4.0	3.5	3.3	3.3	3.7	4.0
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	3.3	3.5	3.3	3.3	4.0	4.0
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	3.7	3.5	3.3	3.3	3.3	4.0
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	4.0	3.5	3.3	3.7	3.7	4.0

秋学期		言語教育政 策研究	言語評価・テ スト論研究	研究入門	研究指導 II	多文化社会 研究
	回答者数	5名	3名	2名	1名	1名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	3.6	3.7	3.5	4	3
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	3.0	3.3	4	4	4
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	3.2	3.3	4	4	3
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	3.6	3.3	4	4	3
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	3.4	3.7	4	4	3

(5) その他 (院生に対する研究倫理教育の実施)

昨年度に引き続き、文学研究科の全学生に eL CoRE の受講を義務づけた。年度初めの4月中に学生が受講を終え、1年生は全員が受講証明書を提出した。2年生についてはログインができないという問題が生じたが、それを解決することができず、未受講に終わった。令和6年

度は、学術研究所に助言を仰ぎ、1年次生・2年次生の全員が受講できるようにする必要がある。

また、学生自身が実際にデータ収集を行う際に適切なプロセスを踏んでいるかどうかを確認するため、eL CoREの学習内容、及び関連学会の研究倫理を参考にしながら作成した研究倫理チェックリストを作成（令和5年度中に1か所文言を修正）し、学生に配付した。2年生は、修士論文の提出の際に、チェックを入れたものを一緒に提出した。提出したリストを教員が確認したところ、すべての学生が適切な手順で研究を行っていた。今後は、研究倫理チェックリストを必要があれば改良し、引き続き、学生に配付した上で、研究を行う際に活用していく予定である。

## <農学研究科>

### 活動計画

- (1) 研修会（研究談話会）の実施
- (2) 講演会「コロナ後の大学活動の注意点」
- (3) 研究成果についての検証

#### 活動計画（1）研究談話会の開催

大学院教育は教員の研究活動が教育の質に直結するため、教員の研究レベルの向上がFD活動には不可欠である。高い評価を受けている研究や最先端の技術を取り込んだ研究の紹介は教員にとって大いに参考になり、研究に対する動機付けも高まる。農学研究科では「研究談話会」を企画して、そのような機会を教員や大学院生に提供している。令和5年度は「水生植物の低酸素（冠水）耐性」（講師：生産農学科 中村元香 講師）、「植物病害診断、病原菌の分類学的研究、および伝染経路の解明」（講師：生産農学科 野澤俊介 特任助教）、および「コスモスの花色多様性と、花色に関与するフラボンの構造」（講師：環境農学科 上原歩 准教授）という3演題で講演をしていただいた。毎回、農学研究科教員を始め、農学部教員、大学院生、学部生から20名以上の参加があり、活発な質疑応答が行われた。

#### 活動計画（2）コロナ後の大学活動の注意点に関する講演会の開催

「コロナ後の大学活動の注意点」（講師：保健センター健康院長 庭野裕恵 教授）という演題で、コロナ前のような教育・研究活動が多くなることから野外活動における注意点や安全対策について講演会を開催した。講演では、閉鎖的な環境下で過ごしてきた学生を屋外での実習などの活動に対応させるためのアドバイスをいただき、同時に時節柄起こりやすい熱中症対策についても紹介していただいた。

#### 活動計画（3）研究成果についての検証

農学研究科所属の大学院生には、積極的に自身の研究成果を学会で発表するように促している。学会発表では、研究成果の発表および質疑応答を通して研究内容の充実を図ることやより発展的なアイデアの創造が可能であるが、それだけに留まらず、他の研究者の発表を聴講することで視野が広がることも期待できる。指導教員としては、参加学生からこれらの「成果」を聞き出すことで、研究指導上の改善点などを抽出することが重要となる。今年度は、成果報告が10件あり、そのすべてが学会参会に対して成果が上がったという報告を得た。今年度は「参加による成果」という項目で自由に記述してもらっているため、次年度には発表に対して工夫した点や、学会に参加して気づいた研究上の問題点などについても調査できるようにしたい。

アセスメントポリシーに関わる「満足度調査」結果からは、大学施設について「機器・備品類が古いためうまく動作しない」という意見があり、徐々に新しいものに変えていく必要がある。また、学外で研究を行う院生が多い研究科であるため、調査等の研究活動を行う上で助成金があれば良い、という意見もあがった。本件については研究科のみで検討できるものではないので、関係部署とも相談していきたいと考えている。

## <工学研究科>

令和 5 年度工学研究科 FD 活動として、大学院生による授業アンケートの実施と授業改善の推進、「専門演習 I」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善および大学院教育活動の質向上を目的とした 2 回の FD 研修会を計画に沿って実施した。大学院生によるアンケートについては、各科目の授業アンケートを実施したほか、令和 4 年度修了予定者を対象として令和 5 年 3 月に実施したアンケートを分析した。FD 研修会の内容について、実施計画では「生成 AI に関する情報共有」のみであったが、令和 5 年 12 月 21 日（木）に「生成 AI に関する FD 研修会」の講演が追加された。以下に活動の報告とその成果および課題についてまとめた。

### (1) 大学院生による授業アンケートの実施と授業改善の推進

春学期および秋学期において大学院生による授業アンケートを実施した。対象科目は、工学研究科の大学院生が受講している全科目である。アンケートは Microsoft Forms を用いて作成し、全面的に実施した。大学院生には PC やスマートフォンを用いてオンラインで回答を入力してもらい、その回答は匿名性を確保した上で収集した。

各科目の授業アンケートの結果は、教務担当者会で各科目の結果および全体の集計結果について議論したのち、全体の集計結果は工学研究科会で全教員に報告した。また、授業改善に活用してもらうため、細かなアンケート項目についても授業担当教員にフィードバックした。なお、春学期の集計結果については、令和 5 年度 第 7 回 工学研究科会（令和 5 年 9 月 14 日（木））で報告し、秋学期の集計結果については、令和 5 年度 第 12 回 工学研究科会（令和 6 年 2 月 16 日（金））で報告した。

この活動の成果として、授業アンケートの実施から評価、公表、改善への活用までの一連のプロセスを実施することができた。アンケートの回答率は、春学期が 36%、秋学期が 72.5% であった。集計結果から、回答があった授業科目においては特に問題は見出されず、良好であることが確認された。設問に対するポイントはほとんどが 5 ポイント満点中 4.8 ポイント以上（高いほどポジティブな回答）と非常に高かったことが確認された。しかし、授業外学修時間の項目で、1 回の授業あたりの平均が 3.07 ポイント（5：4 時間以上、4：4 時間未満 3 時間以上、3：3 時間未満 2 時間以上、2：2 時間未満 1 時間以上、1：1 時間未満）と、昨年度と比べ 0.8 ポイントほど（時間にすると 1 時間程度）下がっていた。平均的な学生を 3 ポイントと仮定すると、3 時間未満 2 時間以上の授業外学修時間は十分とは言えず、授業外学修に取り組むための課題などを用意する必要がある結果となった。

次年度も授業アンケートを実施し、授業の改善活動を継続していく。春学期のアンケートの回答率が低かった反省点を踏まえ、秋学期のアンケート実施の際には回答開始時期の前倒し、Blackboard でのアナウンスや授業担当教員への協力の呼びかけなど、複数回にわたりお願いをした。その結果、回答率を大幅に改善できたため、来年度以降も同様の対応をしていく予定である。

### (2) 大学院生による修了生アンケートの実施

令和 4 年度修了予定者を対象とし、令和 5 年（令和 4 年度）3 月に「修了予定者を対象としたアンケート」を匿名により実施した。対象者は修士課程機械工学専攻、電子情報工学専攻、博士後期課程システム科学専攻の修了予定者 10 名であり、そのうち 10 名全員が回答した（回答率 100%：参考）。

これは工学研究科のアセスメント・ポリシーの定める「修了時の学生へのアンケート」に対応するアンケートであり、ディプロマ・ポリシーの評価の役割を担う。アンケート項目は前年度実施のものと同じである。工学研究科の人材養成等教育研究に係る目的に照らし合わせて、工学研究科が研究教育活動を通じて育みたい人物像と重なるか否かを抽出できるように設計をしている。

回答内容はまず教務担当者会で検討された。教務担当者会の分析を添えて、令和5年度第1回第1工学研究科会（令和5年4月1日（土））で報告された。また、令和5年度第3回第1工学研究科会（令和5年5月25日（木））で、アセスメント・ポリシーに基づき令和4年度の研究教育活動を点検した結果を報告する際に、このアンケートの基本統計が改めて報告された。

回答内容では、研究指導教員に対する信頼の高さや今後の生活への意欲の高さをはじめとして、おおむね修了生は満足感をもって玉川から旅立つ様子が、過去の2年度に引き続いて確認された。学会等、外部の公開の場で研究を発表した件数が増加した例をはじめとして、いくつかの項目では良い方向への増加傾向を示しており、肯定感が全体基調である。しかしながら、否定的な回答も当然ある。例を挙げれば、次の通り。(1) 授業アンケート（令和5年度中は「授業評価アンケート」の呼称も用いる）の機能を問う設問に対する回答は他項目と比べていささか弱含みである。授業アンケートについては本報告に項目を設けているので、そちらを参照されたい。(2) 2年間を振り返り返ったうえで満たされない気持ちがあるとする回答も寄せられた。(3) 図書との向き合い方に関する傾向は昨年度に引き続き、芳しくない。(4) 工学研究科の掲げるディプロマ・ポリシーへの関心が他とくらべて低い。

### (3) 「専門演習Ⅰ」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善

工学研究科の必修科目である「専門演習Ⅰ」は、修士課程1年生を対象とし、工学研究科の全教員がその内容と評価に関わる科目である。この科目の狙いは、装置の製作等の実践的な課題による工学の基礎的な知識および技術の修得と、「大学院技術発表会」における発表・質疑応答を通じた技術者および研究者に必要なコミュニケーション能力の向上である。

技術発表会は令和5年9月14日（木）14:20からSTREAM Hall 2019 313教室にて対面での口頭発表形式で開催された。大学院生の発表が11件行われ、参加した教員および他の学生との間で活発な質疑応答が行われた。また、発表に対しMicrosoft Formsを利用した投票方式での審査が行われ、教員20名、大学院生18名、学部生1名の計39名による投票結果により上位3名に大学院技術賞が授与された。さらに、本年度より参加者に各発表に対する質問・コメントなどを記載するシートを配布した。科目の実施概要および発表会の審査結果は、工学研究科会で全教員に報告された。

成果としては、質の高い発表内容が見られ、研究科全体として継続的に大学院生の実践力強化のための教育方法の改善を確認することができた。また、昨年度に課題として挙げられた、「発表時間内の質疑応答だけでは発表者に対するフィードバックが足りていない」という課題を質問・コメントシートを配布することにより、発表内質疑の時間外でのフィードバックを発表者に返すことができた。参加者のシートへの記入は任意ではあったが、協力的な参加者が多かったおかげで発表時間での質疑に加え一人当たり10件程度のフィードバックが寄せられた。これらのフィードバックは各発表者に返却され、追加の質疑については教務担当が用意したMicrosoft Formsから回答させた。これにより、昨年度よりも明らかな学習効

果の向上が得られた。

次年度も、履修者がより早い時期に具体的なテーマを決め、計画を適切に立案し、課題に取り組めるよう、4月当初に予定されている新入生ガイダンスで科目に関する説明をし、内容の充実を検討していく。

#### (4) 大学院教育活動の質向上を目的とした FD 研修会の実施

##### 1) 生成 AI に関する情報共有

・実施日：随時

・場所：Blackboard に My グループ「生成 AI 関連」を設置

・概要

教育における生成 AI の利用に関する情報を Blackboard の My グループ「生成 AI 関連情報」を通じて工学研究科の全教員の間で共有する。

・到達目標

教育における生成 AI の利用に関する最新の情報を全教員が共有する。

・活動内容

教育における生成 AI の利用に関する情報を Blackboard の My グループ「生成 AI 関連情報」を通じて工学研究科の全教員の間で共有された。具体的には、「方針・対応」「活用事例」「FD・イベント」「関連動画」「倫理」「著作権」「雑誌」で項目分けされ、各項目に対して新聞などのメディア、各大学、文科省などからの最新の情報が随時アップロードされた。

##### 2) 生成 AI に関する FD 研修会

・実施日：令和 5 年 12 月 21 日（木） 17:00～18:00

・場所：オンライン（Zoom）

・講師：講師 嶋 是一先生（ソフトウェアサイエンス学科所属非常勤講師）

・概要

ChatGPT が世の中に生まれて一年が経とうとしている。その間に ChatGPT は進化を続け、様々な機能拡張が行われ、より多くの活用範囲が広がり、それに伴って利用上注意しなくてはならない点などが変わってきていく。今回は ChatGPT の基本的な知識とともに、プロンプトを用いた動作、プラグインの活用などの活用事例を、ChatGPT を動かしながら説明する。

・活動内容

① GPT と LLM の基本について

② 提供されている生成 AI サービス（ChatGPT plus, copilot, tldraw, suno などその時の旬の情報を盛り込む）

③ プロンプトと実行環境

④ Advance Data analysis（データ解析プログラム自動作成、自動グラフ作成）

⑤ 開発環境に用いられるツール紹介（LangChain, Llamaindex など）

・評価

教授会の前に実施され、工学部・工学研究科の教員 49 名が参加した。研修会実施後に本研修会に対するアンケートが実施され、アンケートの回答率は 83.7%（41 名

149名)、アンケート結果は以下の通りとなり有益な研修となった。

- ・とても有益であった：63.4%
- ・有益であった：29.3%
- ・あまり有益でなかった：7.3%
- ・まったく有益でなかった：0%

#### (5) アセスメント・ポリシーに基づく点検情報の共有

令和5年度第3回工学研究科会(令和5年5月25日(木))において令和4年度の工学研究科の活動に対する点検結果を報告した。令和5年度は、過去2年分の集計データとの比較がおおむね可能となったことから、研究科会報告の際のフォーマットを更新している。

フォーマットは、基本情報、ディプロマ・ポリシーに係る研究科レベルの点検、カリキュラム・ポリシーに係る研究科レベルの点検、アドミッション・ポリシーに係る研究科レベルの点検の4大項目を立て、その4大項目の下にカタカナ附番で点検項目を立てている。多くの点検項目で、令和2年度と令和3年度の数値を並べており、数値の増減の傾向の把握がしやすくなるように工夫をしている。令和5年度からは、大学院生の研究活動にかかる業績の集計を加えた。ここでは、論文件数、口頭発表とポスター発表、特許等の3分類で集計している。令和6年度のアセスメント・ポリシーの改訂を控えており、継続して教員間で学生の学修成果を十分に情報共有できるような工夫を行う。

アセスメントの全体基調としては、研究発表や論文の件数などが示す研究活動に係る学修成果はおおむね良い水準にあると思われる。科目の履修状況等で大きな問題となりそうな事案などはないことも確認された。

## <マネジメント研究科>

### (1) コースのカリキュラムや授業改善に関する検証

#### 【報告】

例年、課題研究中間報告会の後、大学院生、教職員参加によるFD会を実施している。現状においては、本研究科所属の院生全員がスクール・マネジメントコースの社会人院生である。FD会は、業務と並行しての研究活動への取り組みの難しさなど、各方面から実際の声を聴くことができる貴重な機会となった。

FD会の声を踏まえて、研究科所属教員（科目担当教員及び課題研究担当教員など）でFDワークショップを開催し、カリキュラムのデザインや運営などの教務関連内容から、指導法やアドバイスの仕方などの具体的な教授法に至ることまで議論した。

#### 【成果・課題】

コースカリキュラムについて、スクール・マネジメントコース所属の院生は、学部時に経営学やマネジメントを専門的に学んでいないため、基礎から体系的に学び、2年次の課題研究に備える必要があることを確認した。一方で社会人としても1年目であるため、時間の使い方や意識の持ち方などの工夫が必要である。院生1年目からのマインドに関わる部分は、4月の教務ガイダンスにおいても実施はしているが、今後どのような方法で対応していけばよいかについて、関係部署などと継続的に議論し検討をしていきたい。

### (2) 課題研究セミナーⅠ・Ⅱの指導方法検証

#### 【報告】

マネジメント研究科においては、今年度5名のスクール・マネジメントコース所属の院生が修了した。課題研究は担当決定後、1年という期間でテーマの設定から報告書の作成までを指導しなければならない。限られた時間の中での指導法の工夫について議論した。

#### 【成果・課題】

上述の通り、院生と社会人のバランスをとりつつ課題研究がスタートする。院生については、一人ひとり、職場で理解をいただきながらの研究活動となる。この状況を指導教員が理解した上で、適切なアプローチで課題研究を進めていく必要があることを確認した。今後も教員間で情報を共有しつつ、研究科としての知見を蓄えていきたい。

### (3) 大学院生による授業アンケートの実施

#### 【報告】

春学期及び秋学期終了後に授業に対する記述式アンケートを実施した。回収したアンケートを担当教員へフィードバックし、授業改善に役立ててもらった。

#### 【成果・課題】

全体として、授業に対して大きな不満を抱えていることはなく、問題がないことを確認した。授業アンケートについては次年度も継続して実施し、大学院生からの要望を定期的に把握したい。

## <教育学研究科>

### (1) 【活動計画】 研修会 (FD 委員会) の開催

- ・ 研究科会後に FD 委員会を 8 回開催。(4/26、5/31、6/28、10/25、11/29、12/20、1/12、2/16)

#### 【成果・課題】

- ・ 授業開講期間中、上記の日程で「授業および研究指導體制の改善について」の研修会 (FD 委員会) を行うことで授業改善の意識を教員全体で共有することができた。
- ・ 気になる学生の情報共有などをして、研究指導體制の見直しや改善を討論することができた。
- ・ 大学院 HP のニュースやコラムの内容や執筆者について討論を行い、院生や入学検討者に伝えたいことが伝わるようにできた。

### (2) 【活動計画】 研修会「教員の学び合いを促進するためのヒント」

(講師：教育学研究科 カメダ、クインシー准教授・令和 5 年 6 月 28 日 (水)) の開催

- ・ IB 教育についての解説。さらに授業内で行っている活動を教員に実施し、授業の工夫などを体験する予定。
- ・ 教育学研究科の教員が IB 教育への知見を深めると同時に、カメダ准教授の研究を紹介していただく。

#### 【成果・課題】

- ・ 協働で学び合う学習環境をテーマに、授業で使用しているさまざまな工夫を講義し、実践的に使用できるように学べた。
- ・ A professional learning model supporting implementation of ATLs in IB schools in Japan というカメダ准教授の研究と関連づけて数学の活動を教員同士のグループで行い、実際の授業の工夫も身につけることができた。

### (3) 【活動計画】 研修会「質的研究方法の検討ー当事者記録のデータ活用について」

(講師：教育学部田甫綾野教授・令和 5 年 11 月 29 日 (水)) の開催

- ・ 乳幼児教育研究コースへの入学者が増加したため、学生のニーズを研究科全教員が把握し、その課題について理解を深める。特に、今年度入学生には、代々幼稚園経営をする学生が多く、乳幼児の学問と研究の変遷を学ぶ。

#### 【成果・課題】

- ・ 乳幼児教育研究コースへの入学者が増加したため、学生のニーズを研究科全教員が把握し、その課題について理解を深めることができた。
- ・ 幼稚園経営の側面からの乳幼児の学問と研究の変遷を知ることにより、院生の満足度を高めるような授業内容を共有することができた。

### (4) 【活動計画】 調査「M1 対象の入学 1 ヶ月の学習及び生活調査」(期間：令和 5 年 5 月)

- ・ 研究科に入学して 1 ヶ月経過した頃に、学習への取り組み及び生活状況についてのアンケートを行い、学生の状況を理解する。学習についての意見は授業改善に役立てる。生活についての意見は困っていることの改善を手伝う。

**【成果・課題】**

- ・結果は全ての教員に配付し、研究科全体として討論をした。今後の大学院生としての生活が円滑に進むよう、全体及び個人の意見を抽出し、生活の改善点および授業改善など初期に討論をすることができた。
- ・院生室の使用状況や特に夜間コースの学生の学習の取り組みなどを把握し、希望があるものについては迅速に改善を試み、学習環境の改善をすることができた。

(5) **【活動計画】** 研究「教育学研究科 OBOG フォローアップ研修」の開催

(令和6年2月10日)

- ・IB 修了後に博士課程進学し、博士を取得した1名、乳幼児修了後現場で働く1名、2名の修了生がプレゼンを行い、それをもとに参加者による質疑応答、全体討論などを行う。
- ・修了後の修了生同士のつながりを作り、MLなどを作成し、今後に繋げる。

**【成果・課題】**

- ・予想を上回り約80名の参加があり、アンケート結果にも会について肯定的な意見がほぼ全てであり、継続的に開催することを望まれた。MLを作成し、情報を配信および今後隔年でフォローアップ研修の開催を予定している。
- ・博士課程での研究内容を聞くことで、研究へのモチベーションが高まり、最新の教育事情についての知見を深めることができた。

(6) **【活動計画】** 学期終了後の授業アンケートの実施及び分析

- ・全開講科目を対象 春学期末、秋学期末の実施及び分析。

**【成果・課題】**

- ・集計の結果は全ての教員に配付し、研究科全体として授業改善に取り組み、学生にも必要な部分はフィードバックをした。学生の意見から、全体及び個人の意見を抽出し、授業改善を討論することができた。
- ・アンケート内容を「授業方法に関する意見・要望」と「大学に関する意見・要望」に分けて分析し、希望があるものについては迅速に改善を試み、学習環境の改善をすることができた。
- ・授業への要望については、教員間で話し合いを行い、改善につながるよう討議した。

## <教職大学院>

### (1) 教職大学院 OBOG フォローアップ研修について

本年度は、新型コロナウイルス感染予防対策（3 密、換気、消毒、衝立、3 部屋）をとり、対面で 6 月 24 日（土）、11 月 25 日（土）の 2 回の日程で実施した。

#### ◆令和 5 年 6 月 24 日（土）参加者 59 名

西村 秀之准教授による研究報告

教職大学院 OBOG による実践報告

報告者：現職 14 期：松尾 美樹氏

現職 5 期：福井 みどり氏

#### ◆令和 5 年 11 月 25 日（土）参加者 51 名

成川 敦子准教授による研究報告

教職大学院 OBOG による実践報告

報告者：SM13 期：坂本 龍哉祐氏

現職 5 期：大村 幸子氏

### ① 成果

6 月 25 日（土）に第 1 回フォローアップ研修を対面で行った。

修了生プレゼンテーションでは、松尾 美樹氏と福井 みどり氏に近況報告や SM へのアドバイス等をいただいた。

現職 14 期の松尾氏からは、「玉川の丘で学んだことと、今の私」をテーマに、指導主事の役割や玉川で学んだ国際バカロレア（IB）の概要から、教職大学院の学びと今後の教育の関わりについて報告していただいた。

現職 5 期の福井氏からは、「いのちの学習～牧場体験、ヤギ飼育体験を通して～」をテーマに、ヤギの飼育により子どもたちが主体的に学びに向かい、食といのちの学びを超えて、子どもたちの心の成長につながっていること等について実践報告をしていただいた。

グループディスカッションでは 7 グループに分かれ、SM・現職・修了生・教職大学院の教員等の立場から様々な意見が出て、活発な意見交換が行われた。

西村 秀之准教授からは、「英語の授業について考える」をテーマに、研究報告がなされた。英語に対する苦手意識や、暗記を目的とした英語教育の改善に向け、教科書を 1 年間で 5 回繰り返して学ぶ「5 ラウンドシステム」というカリキュラムを紹介していただき、様々なアプローチから教科書を捉えるという手法について研究報告をしていただいた。

本フォローアップ研修については教職大学院の HP でも紹介している。

[第 1 回フォローアップ研修 | 教職大学院 | 玉川大学 大学院 \(tamagawa.jp\)](https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_22267.html)

[https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching\\_pro/voice/detail\\_22267.html](https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_22267.html)

11 月 25 日（土）に第 2 回フォローアップ研修を対面で行った。

修了生プレゼンテーションでは、坂本 龍哉氏と大村 幸子氏に近況報告や SM へのアドバイス等をいただいた。

SM13 期の坂本 龍哉氏からは、「修了からの 2 年目」をテーマに、初任から現在までの学校での経験や実践をもとに、小学校教員としての働き方や児童との関わり等について報告していただいた。

現職 5 期の大村 幸子氏からは、「魅力ある国語教室を求めて～子供たちと歩んだ 21 年間を

振り返る」というテーマで、子どもの興味関心に繋げた学びの在り方や共同体の中で作り上げる学びという観点での実践について報告していただいた。

グループディスカッションでは 7 グループに分かれ、SM・現職・修了生・教職大学院の教員等の立場から様々な意見の活発な意見交換が行われた。

成川 敦子准教授からは、「知的障害・発達障害のある人の社会的トラブルと学校における危機対応介入支援の在り方」をテーマに、知的障害などを抱える子どもたちの学校や社会における「負のスパイラル」があること、その問題に対して、学校などが有効な援助として Keep Safe プログラムなどを活用し、子ども自身が自分に対しての認知を行うことなどの方法について、研究報告をしていただいた。

本フォローアップ研修については教職大学院の HP でも紹介している。

[第 2 回フォローアップ研修 | 教職大学院 | 玉川大学 大学院 \(tamagawa.jp\)](https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_22709.html)

[https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching\\_pro/voice/detail\\_22709.html](https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_22709.html)

毎年のフォローアップ研修が、教職大学院 OBOG の学びの継続として、また年次の異なる大学院生のつながりを作る場として機能していることが、本年度も引き続き確認された。近々の課題を交流しあうグループディスカッションも好評であった。

また、教職大学院の教員による研究報告は、報告後に意見交換を実施することで、本学の講義の質を高める FD としての効果も引き続きねらっている。

教職大学院 OBOG の実践報告は、現場に出たからの修了生たちが教職大学院での学びをどのように活かしているのか、またどういった点に悩み克服しようとしているのかを、教職大学院の教員が知ることができる貴重な場となっている。グループディスカッションにおいても、教職大学院の講義が OBOG たちのその後の仕事にどのように役立っているか、また今後どのような講義が求められているか等を確認することのできる貴重な機会となっている。この場の議論をもとに、各教員も自分たちの講義の内容と方法との改善に努めている。

また、OBOG からのアンケートについては、昨年度から Google フォームを利用して意図的に蓄積していく取り組みを開始した。

## ② 課題

OBOG の参加者がやや少ない点が引き続き課題となっている。Google ドメインによるメール連絡網や、有用リソースの整備等によって、修了した院生とのつながりが保てる工夫をしていくことが必要である。

### (2) FD 授業研究について

5 月 25 日 (木) (松本 修教授)、11 月 9 日 (木) (西村 秀之准教授) の 2 回の授業研究を実施した。

◆令和 5 年 5 月 25 日 (木) 15:00~16:40 (担当: 松本 修教授)

「教科学習の研究と実践」 指導案を作り直す—中学校英語

教科学習のデザインと実践においては、授業で用いる教材や学習者の実態に関する研究が必要である。その上で、実践の結果を正確に捉え、改善に向けた分析と研究が欠かせない。

今回の授業では、中学校英語科の授業実践を通じて、意見交換を交えながら改善案を策定するなどの共同的な学習が展開された。授業後は、教員による事後検討会を実施した。

◆令和 5 年 11 月 9 日 (木) 15:00~16:40 (担当: 西村 秀之准教授)

### 「児童英語の実践」

外国語教育の目標、考え方を理解し、小学校において実際に英語を教えることを想定した模擬授業を体験することで、実際に外国語活動、外国語科の指導に生かすことができるように学習指導案をデザインするプロセスを学ぶことは、授業改善を行う上で非常に重要な教育を支える視点となる。

今回の授業は、院生が教職専門実習で行った授業実践を基に意見交換を交えながら展開された。授業後は、教員による事後検討会を実施した。

例年通り、協議会においては、①「理論と実践の往還」のための授業づくりや教材開発の具体的な方策について、②SMの実践経験不足を補う指導法について、③現職院生の実践経験を活用した指導法、等々についての議論が一層活発になされた。

#### ① 成果と課題

- ・教員が毎年、授業の研鑽に努めていることが、院生たちに良い印象を与えている。
- ・対面での授業が実施できて良かった。今後も定期的に継続していく予定である。

#### (3) 各教員に対する調査について

- ・FDの一環として、SMや現職院生の学修理解等に関して、各教員に対する所感を調査した。調査結果は教職大学院会で公表され、データをもとに議論がなされた。

#### (4) 相互授業参観について

- ・各教員の授業を可能な範囲で相互に自由に参観し、その際の学びや感想等を記録として残すようにした。互いの学びを蓄積することによって次年度へ活かしている。

#### (5) FD委員会における情報交換

- ・毎月の教職大学院会終了後にFD委員会を開催し、院生に関する諸問題と指導方針、教員間の連携、カリキュラムや組織のあり方について検討している。

#### ① 成果

例年、課題をかかえている院生への教員の対応、学校課題研究の進捗状況やその適切な指導のあり方、院生が学修しやすい環境の構築、課題の出し方についての基本的な考え方の確認等々についての情報交換がなされ、それぞれの場面での方策についてよりよいあり方を検討することができているが、今年は特に大きな問題は見当たらなかった。

#### ② 課題

特に大きな課題はない。今後も定期的に継続していく予定である。

## <脳科学研究科>

### (1) 玉川大学脳科学ワークショップの開催

令和6年2月26日から28日にかけて小田原市天成園 小田原別館にて玉川大学脳科学ワークショップを開始した。脳科学研究科、および関連研究科の教員20名、脳科学研究科の大学院生7名、脳科学研究所の研究員19名、外部講師2名の合計48名が参加した。ワークショップでは、脳科学研究科の教員の研究室紹介、研究員による研究発表、そして全ての大学院生による口頭発表(発表15分、質疑15分)が行われ、大学院生の発表に対して教員全員で評価し、評価結果を確認した上で、今後の研究指導へ反映する内容を確認した。

また大学院生は1日目、および2日目に自身の研究についてポスター発表を行い、研究の説明、および議論を行なった。

さらには2名の外部講師による心理学および脳科学に関する講演会も開催され、大学院生は参加し心理学・脳科学における最先端の研究について学んだ。

脳科学ワークショップでは脳科学研究科の教員、大学院生すべてが参加するため、さまざまな分野からの質問が多く投げかけられた。そのため、他分野の教員や大学院生に理解してもらえるように説明する能力や、議論する能力を磨く貴重な場であった。また2泊3日での開催中、ポスター発表の時間が長く取られているため、期間中に深い議論を行うことができた。そのような経験は大学院生の研究への理解を深めるものであったといえる。またここ数年間はオンラインでの開催であったが、今回はオンサイト開催ということもあり、対面で話をして議論することの重要性を再確認した。

今後の課題については、大学院生の口頭発表の際の質疑応答の時間をもう少し長くすることで(現在は発表15分、質疑15分)、より深い議論ができると考えている。

### (2) ピアレビューの実施

令和5年度中(令和6年2月26~28日)に実施した玉川大学脳科学ワークショップ、および令和5年8月10日に実施した中間発表における大学院生の研究発表を元に擬似ピアレビューを実施した。擬似ピアレビューでは大学院生の発表内容に関して1名の脳科学研究科の教員をエディターの担当に割り当てを行った。ピアレビューでは、まず大学院生が発表の際に出た質問を自らまとめ、それに対する返答の作成を行った。次に、エディターがその返答の内容を確認し、追加の質問を大学院生へ行うことで研究への理解を促した。ピアレビューは年度を越えて5月中には完了する予定である。

ピアレビューを実施することで、ワークショップや中間発表の際に出た質問を文章として記録し、その質問に対して時間をかけて考える機会をつくることは大学院生が自身の研究への理解を深めるのに重要である。またこのような試みは、ワークショップや中間発表がその場限りの発表にならず、教育効果を持続させるために重要な役割を果たしていると考えられる。またピアレビューの内容は研究科会で確認するため、他の教員の指導力の向上にも効果があると考えられる。

課題としては、大学院生によりピアレビューの進展に個人差があるため、ピアレビューの期限をきちんと守る方法を整備する必要がある。

### (3) 研究環境整備に関する需要の調査と整備

研究センター棟および Human Brain Science Hall の大学院生環境の整備を行った上で、今

後の環境整備計画にフィードバックした。

(4) 研究科評価アンケート

履修者が1～2名である科目が多いため、匿名性を確保するために、研究科全体に対する研究科評価アンケートを実施した。

### Ⅲ 教員研修

#### 新任教員研修会

令和6年度採用の新任教員（助教以上）20名に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で22回目の開催となった。

日 時：令和6年3月15日（金）9:30～16:20

場 所：大学教育棟 2014 612教室

対 象：令和6年度採用教員

研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。

専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

#### (1) 研修プログラム内容

09:30	開始／研修説明	教学部教務課
09:35	新任教員自己紹介	新任教員
09:50	講演「玉川大学の教育理念」	小田 眞幸 高等教育担当理事
10:40	休憩	
10:55	大学教員の勤務について	人事部人事課
11:15	教学事項について	教学部 教務課・授業運営課・学務課
12:00	昼食	
13:00	本学の ICT を活用した教育	学生支援センター 学修支援課
13:40	教学システム（UNITAMA）について	教学部 授業運営課・教務課
14:00	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部 情報基盤システム課
14:30	休憩	
14:40	学生支援について	渡邊 透 学生支援センター長
15:00	講演「これからの大学教員に必要なこと」	伊従 記章 教学部長
15:50	質疑応答	
16:00	各種事務手続き	教学部 教務課
	①写真撮影（キャンパスカード用）	人事部 人事課
	②契約内容の説明等	
16:20	研修会終了	

【動画視聴】	コンプライアンス方針	監査室
	個人情報保護方針	総務部 総務課
	ハラスメント防止研修	人事部 人事課（顧問弁護士）

【任意研修】 キャンパス・ツアー 3月26日（火）13:00～15:30

(2) 配付資料・参考資料

資料	担当
令和6年度新任教員研修会<研修プログラム>	教学部 教務課
令和6年度新任教員研修会 名簿	
玉川大学の教育理念	小田 眞幸 高等教育担当理事
大学教員の勤務について Web 勤怠操作ガイド 私学共済制度 新規加入者向けリーフレット WELBOX 会員に関する案内	人事部 人事課
学校法人玉川学園組織機構、玉川大学の概要、担当業務等について 学校法人玉川学園組織機構図(令和6年4月1日施行) 教学部の役割(学校法人玉川学園組織事務分掌細則) 教員ハンドブック『学部運営組織』抜粋資料	教学部 教務課
ご着任にあたって 研究室・内線番号 各種事務手続きについて 令和6年度 個人研究費説明会について	教学部 学務課
令和6年度 新任教員研修会 教務事項 「授業を通して修得できる力」のコモン・ルーブリック 令和6年度 年間授業計画 令和6年度授業実施について 高等教育機関所属教員対象 4月1日教授会・研究科会	教学部 授業運営課
玉川大学の ICT を活用した教育	学生支援センター 学修支援課
教学システム UNITAMA について ー 掲示、担当授業、履修、出欠管理、シラバス、ポートフォリオー UNITAMA 教員業績について ～目的と操作方法～	教学部 授業運営課・教務課
WebNotes について	総務部 情報基盤システム課
学生支援について	学生支援センター
これからの大学教員に必要なこと	伊従 記章 教学部長

### (3) 実施の成果

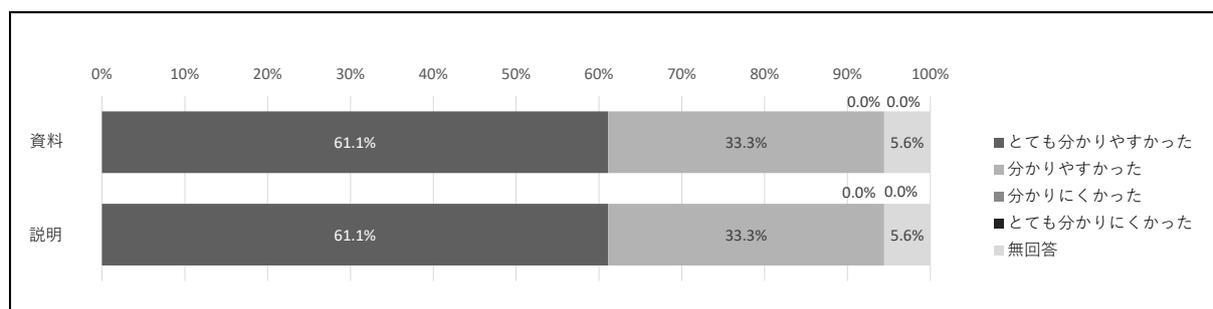
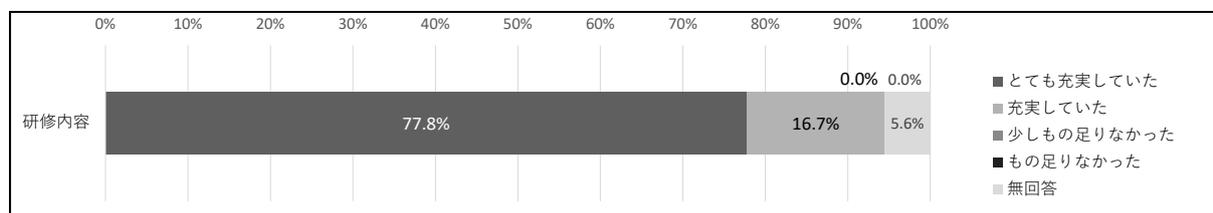
本学における教育について参加者に理解を促すため、2つの講演「玉川大学の教育理念」、「これからの大学教員に必要なこと」を実施した。これにより、専任教員としての業務に必要な教学事項や学生指導だけではなく、大学で働く教員に期待されていること、本学で求められる教育が何かを伝えることができた。

また、大学教員の勤務や教学事項、ICT等について担当部署より説明し、勤務や業務について採用後に必要となる知識を提供することができた。なお、「玉川学園のコンプライアンス方針について」、「学校法人玉川学園における個人情報保護の取組みについて」、「ハラスメント防止研修」は動画視聴による研修を実施し、教育・研究機関に勤務する教職員としての自覚を促すことができた。

キャンパス・ツアーについては、任意参加の研修であったが、20名中13名の参加があり、約2時間半をかけて、大学教育棟2014や小原記念館、Sci Tech Farm TN Produce(LED農園)、Human Brain Science Hall、DTS(ドキュメントテックステーション)などを巡り、本学の理念や教育に関わる施設への理解を深めた。

受講者から提出された研修受講報告書では、以下のとおり研修内容、資料、説明の肯定回答がいずれも94.5%であり、参加者のニーズに沿った充実した内容の研修を実施することができたと考えている。

#### <研修受講報告書 —内容、資料、説明について—>



「本研修について、受講して良かった点がありましたら、ご記入ください」という受講報告書での質問に対しては、以下の回答があった。

- ・事前に大まかな情報を知ることが出来て大変有難い。
- ・大学内のシステムが事前にわかり、少し安心した。共済や研究費のことなど、メールだと問い合わせ先がわからない点について、担当者の方に直接質問することができたので、良かった。

- ・授業や事務に関するシステムの説明はすごく参考になった。また、学生支援について現状と事例をお話しいただいたところも良かった。
- ・システムの使い方や、大学の現状などを事前に知ることができたのが良かった。また、事務の皆様がたいへんフレンドリーかつ丁寧で今後も質問などしやすい雰囲気が伝わってきて安心できた。
- ・新年度からの活動について具体性を持ってさまざまな事柄を俯瞰することができた点は参加する意義があった。また、他の学部の先生などと顔を合わせる良い機会となった。ICT 関係の説明については、今後の研究室立ち上げのためのソフトウェアのライセンス導入などの参考になると感じた。
- ・スタッフの方々が親切丁寧だった。
- ・研修会では、他の新任教授に会い、玉川大学の教育理念について学ぶことができたので、とても役に立った。また、すべての手続き（写真撮影、アカウント設定、契約など）が1日、1箇所ですていただけたのも助かった。
- ・玉川大学で大事している全人教育の理念や、それを実現するためのカリキュラム構成の工夫、授業実施時の留意点や学習環境デザインについて詳しく知ることができた。
- ・建学の精神や教務、事務的なことなど玉川大学のことを広く知ることができ良かった。
- ・玉川大学の教育理念や組織について、勤務について等、全般的にお話をいただき、4月から着任するにあたってのイメージを持つことができた。また、同じ学科に所属となる新任の先生方ともご挨拶ができ、安心した。
- ・本学の教育理念が再確認できたことで、自身の教育カリキュラムデザインの方向性を定めるきっかけとなった。
- ・玉川大学の教育理念をより詳しく知ることができてよかった。
- ・幼稚園から大学生・大学院生までが広く学ぶ環境において、子供が先生のふるまいを見ているということに気づくということは、とても大切なことだと思った。また、学校行事の意味を学生に説明できるという観点も大変勉強になった。多様な学生と接していくにあたり、学生の名前を呼ぶときの配慮の仕方や、UNITAMAの使い方についても大変勉強になった。
- ・玉川大学の建学の精神や教育理念、勤務条件、学園の組織、学生支援のことなどを改めて包括的に認識できたことがいちばんよかった点だと思う。
- ・学生支援についての研修がとてもためになった。

受講報告書の回答結果からも本研修会の目的・到達目標は、達成できたと評価できる。次年度に向けて、より本研修会の質が向上するよう改善に努める。

## 参 考 资 料

## 参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

---

### 第 1 回大学 FD 委員会

- 日時 : 令和 5 年 5 月 10 日 (水) 11:05~11:50  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議案 : (1) 年間開催日程に関する件  
(2) FD 研修会等計画に関する件  
(3) 授業アンケート結果による授業改善計画書の基準に関する件
- 報告 : (1) FD 活動計画の提出について  
(2) 令和 4 年度 特別学期 (ウィンターセッション) の授業アンケート結果について  
(3) 学生による授業アンケート (春学期) の実施について  
(4) 「令和 4 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について  
(5) 大学 FD 委員会の資料について

### 第 2 回大学 FD 委員会

- 日時 : 令和 5 年 7 月 5 日 (水) 11:00~12:00  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議案 : (1) 各学部 FD 研修会等計画に関する件  
(2) 授業アンケート結果による授業改善計画書の基準に関する件  
(3) 学生による授業アンケートの集計結果レポート (授業別) の全学部配付に関する件
- 報告 : (1) 学生による授業アンケートの期中の集計結果について  
(2) 学生による授業アンケート (期末) の実施について  
(3) 学生による授業アンケート (特別学期) の実施について  
(4) 令和 4 年度 大学教育力研修受講アンケート (今後研修会で取り上げてほしいテーマ) 回答について

### 第 3 回大学 FD 委員会

- 日時 : 令和 5 年 9 月 7 日 (木) 11:00~11:10  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議案 : (1) 春学期授業アンケート結果ならびに授業改善の取組みに関する件
- 報告 : (1) 大学 FD 研修会「非常勤教員対象研修会」の実施について  
(2) 特別学期の授業アンケート結果について  
(3) 春学期授業アンケートの集計結果レポート (授業別) の全学部配付について

## 第4回大学FD委員会

- 日時 : 令和5年11月17日(金) 17:00~17:21  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室  
議案 : (1) 大学教育力研修実施計画に関する件  
報告 : (1) 大学FD研修会「非常勤教員対象研修会」の実施について  
(2) 特別学期(サマーセッション)の授業アンケート結果について  
(3) 秋学期 授業アンケートの実施について  
(4) 春学期 授業アンケート集計結果(授業別レポート)の確認状況について

## 第5回大学FD委員会

- 日時 : 令和6年2月1日(木) 11:00~11:50  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室  
議案 : (1) 大学教育力研修実施計画に関する件  
(2) 新任教員研修会実施計画に関する件  
報告 : (1) 大学FD研修会「非常勤教員対象研修会」の実施報告について  
(2) 学生による授業アンケート(期中)の集計結果について  
(3) 学生による授業アンケート(特別学期)の実施について  
(4) 令和5年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書作成スケジュールについて

## 第6回大学FD委員会

- 日時 : 令和6年3月18日(月) 11:00~12:00  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室  
議案 : なし  
報告 : (1) 授業アンケートについて  
(2) 令和5年度 各学部FD活動報告について  
(3) 令和5年度 大学教育力研修(2月21日)実施報告について

## 参考資料 2. 大学院 FD 委員会の議事内容

### 第 1 回大学院 FD 委員会

- 日時 : 令和 5 年 5 月 17 日 (水) 17 : 00 ~ 17 : 10  
場所 : 大学研究室棟 B101 会議室  
議案 : (1) 年間会議開催日程に関する件  
(2) FD 研修会等計画に関する件  
報告 : (1) 各研究科 FD 活動計画の提出について  
(2) 「令和 4 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について  
(3) 大学院 FD 委員会の資料について

### 第 2 回大学院 FD 委員会

- 日時 : 令和 5 年 7 月 19 日 (水) 15 : 00 ~ 15 : 25  
場所 : 大学研究室棟 B101 会議室  
議案 : (1) 各研究科 FD 研修会等計画に関する件  
報告 : (1) 令和 4 年度 大学教育力研修受講アンケート (今後研修会で取り上げてほしいテーマ) 回答について

### 第 3 回大学院 FD 委員会

- 日時 : 令和 5 年 12 月 13 日 (水) 9 : 30 ~ 10 : 30  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室  
議案 : (1) 各研究科 FD 研修会等計画の中間報告に関する件  
報告 : (1) 大学教育力研修実施計画について  
(2) 大学 FD 研修会「非常勤教員対象研修会」の実施について  
(2) 令和 5 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書作成スケジュールについて

### 第 4 回大学院 FD 委員会

- 日時 : 令和 6 年 3 月 25 日 (月) 15 : 00 ~ 15 : 25  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室  
議案 : なし  
報告 : (1) 令和 5 年度 各研究科 FD 活動報告について  
(2) 令和 5 年度 大学 FD 研修会「非常勤教員対象研修会」の実施報告について  
(3) 令和 5 年度 大学教育力研修 (2 月 21 日) 実施報告について

## 参考資料3. ユニバーシティ・スタンダード科目「授業アンケート」様式

123456789 科目A(教員B)

### 授業アンケート

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。

なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

#### あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか (必須)  
 4時間以上  3時間~4時間未満  2時間~3時間未満  1時間~2時間未満  1時間未満
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
3. 授業に意欲的に取り組みましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
4. 授業の内容に興味は持てましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
5. 授業の内容を十分に理解できましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか  
\* 各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載 (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

#### 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)

- とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)

- とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)

- とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

#### 自由記述欄

その他、意見、感想等を記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。  
特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。  
なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

**回答**

---

※ 期中は設問1～7および自由記述のみ実施した。

## 参考資料 4. 玉川大学 FD 委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(平成 31 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

**第 1 条** 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

**第 2 条** 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員は、各学部のFD担当があたる。
- 4 委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 5 委員長が必要と認めるときは副委員長を置くことができる。
- 6 本委員会には学部ごとの分科会を設けることができる。
- 7 前項による分科会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

**第 3 条** 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

**第 4 条** 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認められた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

**第 5 条** 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(分科会)

**第 6 条** 各分科会は、FD担当が取りまとめ、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

- 2 各分科会にはFD活動を円滑に進めるため、FDer（ファカルティ・ディベロッパー）（以下、「FDer」）を置く。FDerはFD担当が兼ねることができる。

(答申)

**第7条** 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

**第8条** 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

**第9条** 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

**第10条** 本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附 則

この規程は、平成 15 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 21 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 31 年 4 月 1 日から施行する。

## 参考資料 5. 玉川大学大学院 FD 委員会規程

(平成 19 年 4 月 1 日 制定)

(平成 29 年 4 月 1 日 改正)

(令和 4 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

**第 1 条** 玉川大学大学院（以下「本大学院」という。）教員の研究教育活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として大学院FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

**第 2 条** 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員は、各研究科のFD担当があたる。
- 4 委員は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 5 委員長が必要と認めるときは副委員長を置くことができる。
- 6 本委員会には研究科（専門職学位課程は専攻）ごとの分科会を設けることができる。
- 7 前項による分科会のまとめ役及び委員は研究科長（教職大学院科長含む）が選任する。

(任期)

**第 3 条** 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

**第 4 条** 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認められた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

**第 5 条** 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 分科会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(分科会)

**第 6 条** 各分科会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

**第 7 条** 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

**第8条** 前条の答申内容の実施については、大学院研究科長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

**第9条** 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、研究科会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

**第10条** 本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、令和4年4月1日から施行する。



令和5年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

令和6年6月 発行

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1